

茨城県教育財団文化財調査報告第430集

見川塚畠遺跡

広域公園偕楽園公園園路広場整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成30年3月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第430集

み が わ つか は た
見川塚畠遺跡

広域公園偕楽園公園園路広場整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成30年3月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団



第19号竖穴建物跡遺物出土状況



第19号竖穴建物跡出土遺物

序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県水戸土木事務所による広域公園偕楽園公園園路広場整備事業に伴って実施した、水戸市見川塚畠遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、弥生時代の竪穴建物跡が多数確認でき、水戸市における弥生時代の集落跡の一端が明らかとなりました。これらの成果は、当地域における弥生時代の様相を知る上で欠くことのできない貴重な資料となります。本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県水戸土木事務所に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、水戸市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成30年3月

公益財団法人茨城県教育財団
理事長 野口通

例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、公益財團法人茨城県教育財團が平成 27・28 年度に発掘調査を実施した、見川塚跡 茨城県水戸市見川 1 丁目 1234 番地 1 ほかに所在する見川塚遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査	平成 28 年 1 月 1 日～3 月 31 日
	平成 28 年 4 月 1 日～7 月 31 日
整理	平成 29 年 9 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
- 3 発掘調査は、副参事兼調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。

平成 27 年度	
首席調査員兼班長	寺内久永
次席調査員	木村光輝
調査員	天野早苗
平成 28 年度	
首席調査員兼班長	奥沢哲也
次席調査員	三浦祐介
調査員	盛野浩一
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長皆川修のもと、次席調査員盛野浩一が担当した。
- 5 本遺跡の出土遺物及び実測図・写真等は、茨城県埋蔵文化財センターにて保管されている。
- 6 第 3 号竪穴遺構から出土した炭化材の樹種同定及び弥生土器の底面についていた圧痕分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。結果については、付章で掲載した。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅷ系座標に準拠し、X = + 41.720 m, Y = + 54.760 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C …、西から東へ 1, 2, 3 … とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j、西から東へ 1, 2, 3, … o と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 HG - 遺物包含層 P - ピット SD - 溝跡 SF - 道路跡 SI - 壑穴建物跡 SK - 土坑

SS - 集石遺構 TM - 塚

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品

土層 K - 扰乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

燃土・赤彩・施釉

火床面・炉石被熱痕・竈範囲

黏土範囲・石器磨痕

柱痕跡・柱あたり

●土器 ○土製品 □石器・石製品

-----硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は（ ）を、推定値は〔 〕を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 壑穴建物跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告分で、整理の段階で遺構名を変更したもの及び欠番にしたもののは以下のとおりである。

変更 SI 4 → 第 1 号壗穴遺構 SI 20 → 第 2 号壗穴遺構 SI 26 → 第 3 号壗穴遺構

SS 3 → 第 2 号遺物包含層

欠番 SK 1

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

見川塚畠遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	11
1 縄文時代の遺構と遺物	11
遺物包含層	11
2 弥生時代の遺構と遺物	13
(1) 垂穴建物跡	13
(2) 垂穴遺構	85
(3) 土坑	87
3 古墳時代の遺構と遺物	88
豎穴遺構	88
4 平安時代の遺構と遺物	90
豎穴建物跡	90
5 江戸時代の遺構と遺物	97
塚	97
6 その他の遺構と遺物	98
(1) 道路跡	98
(2) 溝跡	99
(3) 土坑	101
(4) 集石遺構	106
(5) 遺物包含層	108
(6) 遺構外出土遺物	108

第4節　まとめ	110
付 章	121
写真図版	PL 1 ~ PL 24
抄 錄	
付 図	

み がわつか はた 見川塚畠遺跡の概要

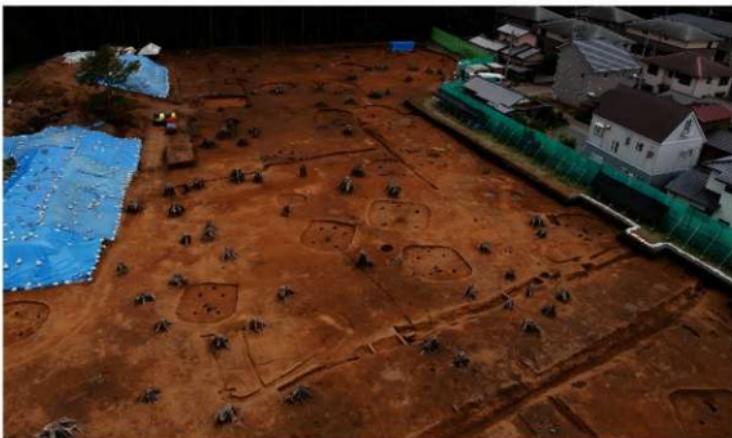
遺跡の位置と調査の目的

見川塚畠遺跡は、水戸市の中央部に位置し、さくら 桜川左岸の標高 24 ~ 26 m の台地上に立地しています。広域公園偕楽園公園園路広場整備事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、公益財団法人茨城県教育財団が平成 27・28 年度に 8,000m²について発掘調査を行いました。



調査の内容

調査の結果、縄文時代の遺物包含層 1 か所、弥生時代の堅穴建物跡 25 棟、
たてあな いこう 坚穴遺構 2 基、土坑 1 基、古墳時代の堅穴遺構 1 基、平安時代の堅穴建物跡 3 棟、江戸時代の塚 1 基などを確認しました。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、
弥生土器（蓋・高坏・広口壺・壺）、土師器（椀・壺・甕）、須恵器（坏・蓋）、
灰釉陶器（瓶）、土製品（紡錘車）、石器（鎌・磨製石斧・磨石・敲石・砥石・
炉石）、錢貨（寛永通寶）などです。



群在する堅穴建物跡



北西上空から見た見川塚畠遺跡（左奥が千波湖）



完全な形で出土した弥生土器



豊穴建物跡の調査



出土した紡錘車

調査の成果

調査の結果、縄文時代から江戸時代にかけて断続的に利用されていたことがわかりました。特に弥生時代の遺構からは、那珂川や久慈川流域を中心とした地域で使われていた十王台式土器が出土しており、弥生時代後期（約1,800年前）にムラが営まれていたことが分かりました。那珂川流域でこの時代のムラが確認された遺跡では、弥生時代以降にも人々が生活し、古い時代の遺構や遺物が壊されていることが多いのですが、当遺跡では良好な状態で残されていました。完全な形になる土器や紡錘車も数多く出土しており、十王台式土器を使用した人々の生活を復元するための貴重な資料となります。

また、平安時代（約1,200年前）の豊穴建物跡を3棟確認しました。3棟ともコーナー部に竈を持つ特徴的な作りをしています。灰釉陶器や灯明皿として利用されたことが考えられる須恵器の壊が出土しており、当時の一般的なムラとは違う様子がうかがえます。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県水戸土木事務所は、県土発展の基盤となる社会インフラの整備や維持管理に取り組んでおり、その一環として広域公園借楽園公園園路広場整備事業を行っている。

平成26年5月13日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、広域公園借楽園公園園路広場整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受け、茨城県教育委員会は、平成26年5月22日に現地踏査を行い、続いて、同年7月15・24日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成26年12月11日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に見川塚畠遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成27年2月10日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。これを受けて、茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成27年3月13日、茨城県水戸土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するように通知した。

平成27年3月16日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、広域公園借楽園公園園路広場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成27年3月17日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、見川塚畠遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として公益財團法人茨城県教育財團を紹介した。

公益財團法人茨城県教育財團は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成28年1月1日から3月31日まで、及び同年4月1日から7月31日まで、発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

見川塚畠遺跡の調査は、平成28年1月1日から3月31日まで、同年4月1日から7月31日までの7か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	平成27年度			平成28年度			
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
調査準備								
表土除去								
遺構確認								
遺構調査								
遺物洗浄								
注記								
写真整理								
撤収								

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

見川塚畠遺跡は、茨城県水戸市見川1丁目1234番地1ほかに所在している。

水戸市は、県のほぼ中央部に位置している。市域の地形は、西部が八溝山地中央部の鶴足山塊に属する標高60～200mの丘陵地、中央部が東茨城台地の北東部にあたる標高20～30mの水戸台地、北部の一部が標高30～40mの那珂台地、北部から東部へ流れる那珂川の流域が標高10m以下の沖積低地からなり、このうち台地部が最も広い地域を占めている。また、水戸台地は那珂川の支流である沢渡川、桜川、逆川によって上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地に分けられる。

台地の地質は、古生代の鶴足層を基盤とし、その上に、下から第三紀層の泥岩からなる水戸層、第四紀層の粘土や砂で構成される見和層、段丘疊層の上市層、灰白色粘土の常緑粘土層、関東ローム層の順に堆積している。また、低地部は沖積谷に河川堆積物である砂疊層が堆積し、場所によっては有機質の黒色泥や草炭類の堆積が見られる¹⁾。

当遺跡は、沢渡川と桜川に挟まれた見和台上に立地する。二つの川が合流する地点から西側の標高24～26mの台地先端部に位置しており、低地との比高は約15mである。調査前の現況は山林である。

第2節 歴史的環境

遺跡の所在する水戸市は、旧石器時代から近世にかけての遺跡が数多く確認されている²⁾。ここでは、当遺跡に関連する遺跡を中心に、時代ごとに記述する。

旧石器時代に関しては、市域北部の台地上のニガサワ遺跡、二の沢遺跡、ドウゼンクボ遺跡などで石器が採集されており、十萬原遺跡では石器集中地点や集石土坑などが確認されている³⁾。

縄文時代では、愛宕町遺跡（15）、アラヤ遺跡、渡里町遺跡などが上市台地の縁辺部に位置し、この地域が早い時期から生活域として利用されていたことがわかる。また、「常陸國風土記」に巨人伝説が記され、古代からその存在が知られていた大串貝塚をはじめ、柳崎貝塚（23）や吉田貝塚など、那珂川・桜川の流域が豊かな資源を与える生活に適した場であったことがうかがえる。

弥生時代では、那珂川流域の台地上を中心に遺跡や遺物が確認されている。吉田台地上では、古くから当該期の遺跡の調査が行われてきており、集落が確認されている遺跡だけで、お下屋敷遺跡⁴⁾、薬王院東遺跡⁵⁾、大鍋町遺跡⁶⁾、東組遺跡⁷⁾、町付遺跡⁸⁾が挙げられる。これらの遺跡は後期後半の十王台式期を中心とするものであり、この時期に流域の開発が進んだことがうかがえる。また、出土する土器に時期差がみられることから、吉田台地で生活した人々が少しづつ移動を行なながら集落を営んでいたと考えられている⁹⁾。こうした集落遺跡から出土する土器には、福島県域や茨城県西部及び南部の特徴を持つ土器などもあり、多様な交流関係を持っていたようである。上市台地上においても、櫛遺跡¹⁰⁾、愛宕山古墳群（16）¹¹⁾で集落が確認されている。見和台地上において当該期の遺跡に調査の手が入ったのは当遺跡が初めてとなる。

十王台式期の末期になると、十王台式土器と古墳時代の土師器が共存することが知られており、漸次古墳時代の文化に移行していくことが考えられている。古墳時代の遺跡としては、上市台地上に愛宕山古墳群があり

国指定史跡である愛宕山古墳^{ふるさかわらま}が存在している。県内では石岡市の舟塚山古墳、常陸太田市の梵天山古墳に次ぐ全長136.5mの大型前方後円墳である。また、台渡里官衙遺跡群^{ほりくわんや}では豪族居館跡に伴うと考えられている一辻75mの方形の堀^堀が発見されており、国造の存在が考えられている。集落遺跡は、大銀町遺跡や東組遺跡など、前時代の立地を踏襲^{とうしゆ}している遺跡も多くみられる。

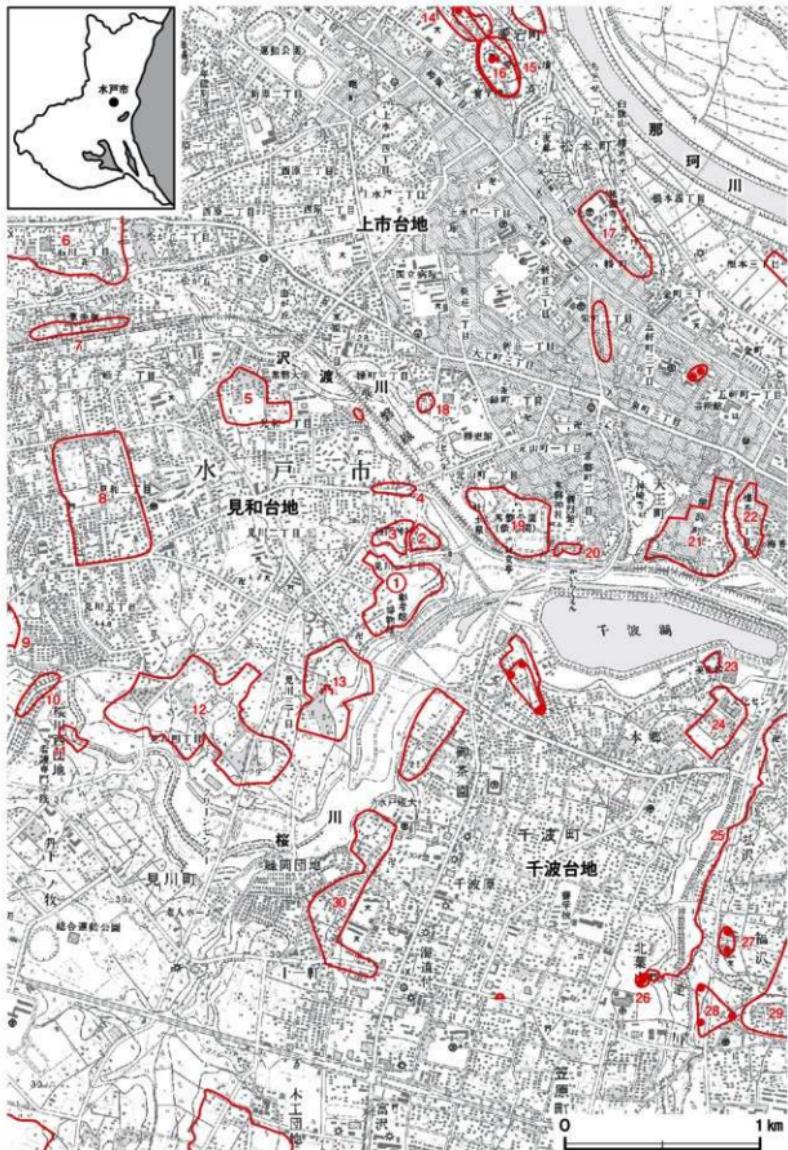
奈良・平安時代の主な遺跡としては国指定史跡の台渡里官衙遺跡群^{かわらじくわんや}があげられる。長者山地区が那賀郡衙の正倉院に比定されており、鶴音堂山地区では7世紀後半^{かののじごうま}、南方地区では9世紀後半の時期の異なる寺院跡が確認されている。周辺にはアラヤ遺跡、波里町遺跡、西原遺跡、堀遺跡、文京二丁目遺跡などが分布しており、台渡里廐寺跡を中心としたこれらの遺跡群は、那賀郡の郡庁院、正倉院、寺院、集落が一体となった官衙関連遺跡として捉えられている¹²⁾。集落遺跡は、上市台地上においては堀遺跡や水戸城跡¹³⁾で、吉田台地上においては薬王院東遺跡や大銀町遺跡などで確認されている。

中世以降になると、水戸地方においても戦乱が続き、多くの城館が築かれている。平安末期から鎌倉時代初期には馬場資幹が後の水戸城となる場所に館を構える。そのほかにも周辺には数多くの城館が確認されており、那珂川を望む台地上において、有力領主層を頂点とする領地支配のネットワークがみてとれ、政治的・軍事的に重要な地であったことがうかがえる¹⁴⁾。水戸城はその後、江戸氏の居館となり城郭としての構えを成立させ、戦国時代末期には常陸国を統一した佐竹氏の領國支配の本拠となった。佐竹氏は城の整備・拡張や城下の整備を進め、徳川時代の城郭及び城下町の基礎を作った。

江戸時代に入ると、佐竹氏は秋田へ転封を命じられ、水戸徳川家が水戸藩を治めることとなる。徳川家はさらに水戸城の整備を進めており、発掘調査等でその状況が分かる地点も増えている¹⁵⁾。城下には旧偕楽園(19)、七面製陶所跡(20)、笠原水道(25)等、水戸藩に関連する遺跡が複数存在している。また、当遺跡には、徳川家の屋敷地が存在しており、古くは徳川家宅地内繩文遺跡・同弥生遺跡と呼称されていた。

註

- 1) 水戸市史編さん委員会「水戸市史 上巻」水戸市 1963年10月
- 2) 水戸市教育委員会「水戸市埋蔵文化財分布図(平成24年度版)」2012年3月
- 3) 菅川修「十萬原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 十萬原遺跡1」「茨城県教育財團文化財調査報告第179集 2001年3月
- 4) 伊藤重敏「お下屋敷遺跡」「茨城県資料 考古資料編 弥生時代」1991年3月
- 5) 井上義安「薬王院東遺跡 千波中学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告書」水戸市薬王院東遺跡発掘調査会 1990年3月
- 6) 井上義安「水戸市大堀町遺跡(仮称)元吉田第三住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市大堀町遺跡発掘調査会 1988年12月
- 7) 南田法正はか「東組遺跡(第1地点) - 物販店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 」「水戸市埋蔵文化財調査報告」第25集 2009年3月
- 8) 南田法正はか「町付遺跡(第1地点) - 集合住宅建設に伴う発掘調査報告書 - 」「水戸市埋蔵文化財調査報告」第24集 2009年3月
- 9) 色川順子はか「薄内遺跡(第1地点) - 移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 」「水戸市埋蔵文化財調査報告」第18集 2008年8月
- 10) 井上義安「水戸市堀遺跡 堀町住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市堀遺跡発掘調査会 1995年12月
- 11) 根本康弘「愛宕山古墳群 旧水戸生涯学習センター解体撤去事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財團文化財調査報告」第414集 2016年3月

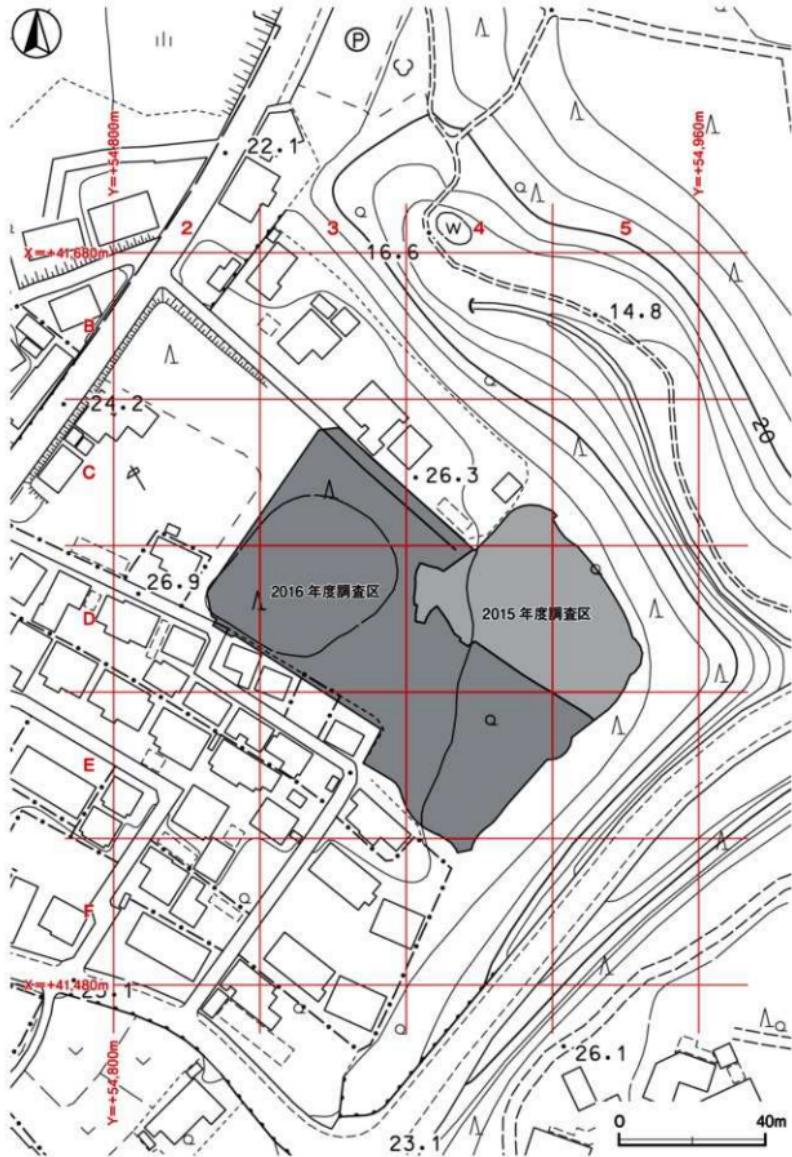


第1図 見川塚畠遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「水戸」「ひたちなか」）

表1 見川塚畠遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町
①	見川塚畠遺跡	○	○	○	○	○	○	16	愛宕山古墳群	○	○	○			○
2	植松遺跡	○	○	○	○			17	茨城高等学校遺跡	○			○		
3	横西遺跡				○			18	東町遺跡			○	○		
4	坂上遺跡			○				19	旧偕楽園						○
5	見和一丁目遺跡			○				20	七面製陶所跡						○
6	西堀原遺跡			○				21	釜神町遺跡	○					
7	宮西遺跡	○	○					22	鷹匠町遺跡				○		
8	見和二丁目遺跡			○				23	柳崎貝塚	○					
9	若林遺跡	○						24	下本郷遺跡	○					
10	見和遺跡	○	○					25	笠原水道						○
11	丹下一ノ牧野馬土手					○		26	笠原古墳群				○		
12	台内田遺跡	○	○					27	払沢古墳群				○		
13	見川城跡				○			28	福沢古墳群				○		
14	文京一丁目遺跡	○	○	○	○			29	米沢町遺跡		○	○	○		
15	愛宕町遺跡	○	○	○				30	菅掛遺跡			○			

- 12) 佐々木藤雄他「台渡里庵寺跡－市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)－」『水戸市埋蔵文化財報告書』第4集 水戸市教育委員会 2006年3月
- 13) 盛野浩一「水戸城跡 水戸地方検察庁仮庁舎建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財团文化財調査報告」第396集 2015年3月
- 14) 井上琢哉「主要地方道水戸茂木線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書 加倉井忠光館跡」「茨城県教育財团文化財調査報告」第294集 2008年3月
- 15) 宮田和男・岡口慶久「水戸城大手門・大手道の調査」『第39回茨城県考古学協会研究発表会 資料』2017年6月
清水哲「水戸城跡 一般県道市毛戸線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財团文化財調査報告」第329集 2010年3月



第2図 見川塚畠遺跡調査区設定図（水戸市都市計画図 2,500分の1から作成）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

見川塚畠遺跡は、水戸市の中央部に位置し、桜川左岸の標高24～26mの台地上に立地している。桜川は、千波湖の西側で沢渡川と合流し東へ向かい、那珂川と合流している。当遺跡は、桜川と沢渡川が合流する地点から西側にある見和台地の先端部に南北約440m、東西約420mの範囲で広がっている。今回の調査区は、遺跡の北西端にあたる。調査面積は8,000m²で、調査前の現況は山林である。

調査の結果、堅穴建物跡28棟（弥生時代25・平安時代3）、堅穴遺構3基（弥生時代2・古墳時代1）、塚1基（江戸時代）、土坑44基（弥生時代1・時期不明43）、道路跡1条（時期不明）、溝跡18条（時期不明）、遺物包含層2か所（縄文時代・時期不明）、集石遺構2基（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に70箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（高壺・蓋・広口壺・壺・甕）、土師器（椀・壺・甕・小形甕）、須恵器（壺・蓋）、灰釉陶器（瓶）、土製品（紡錘車）、石器（鐵・磨製石斧・磨石・敲石・砥石・炉石）、錢貨（寛永通寶）などである。

第2節 基本層序

調査区西部（C3h1区）及び中央部（D4a2区）の台地上の平坦面にテストピットを設定し、土層の堆積状況を観察した。土層は表土を除き9層に分層できる。土層観察は以下の通りである。

第1層は、暗褐色を呈する耕作土である。ロームブロック・炭化粒子を少量含み、粘性は普通で締まりはやや弱く、層厚は8～12cmである。

第2層は、黒褐色を呈する層である。ローム粒子・炭化粒子を少量含み、粘性・締まりは普通で、層厚は18～27cmである。調査区壁際で確認できる遺構覆土との関係から、弥生時代以降の堆積である。調査区東部では残存しておらず、ほとんど確認できない。

第3層は、褐色を呈するソフトローム層である。地点によっては第2層との漸移層も含まれる。炭化粒子・赤色粒子・白色粒子を極微量含み、粘性はやや弱く締まりは普通で、層厚は10～24cmである。赤色粒子・白色粒子は、今市輕石または七本桜輕石と考えられる。

第4層は、褐色を呈するハードローム層である。炭化粒子を極微量含み、粘性・締まりは普通で、層厚は20～34cmである。

第5層は、第3・4層よりやや明るい褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で締まりは強く、層厚は19～31cmである。

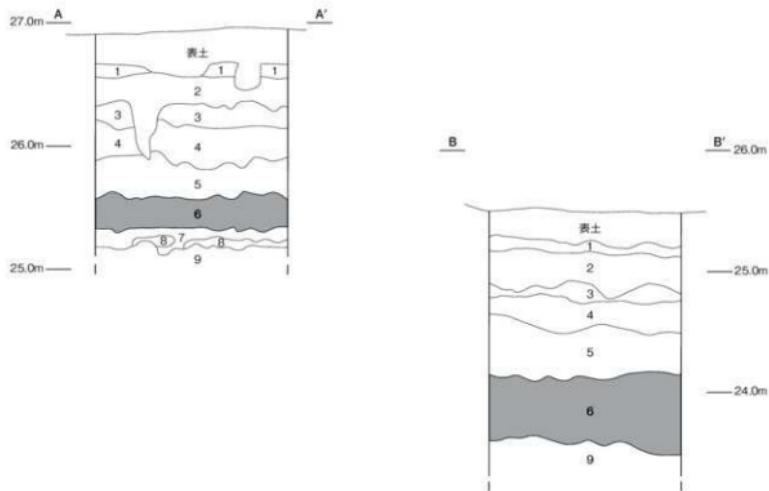
第6層は、第3・4層よりやや暗い褐色を呈するハードローム層である。粘性は強く締まりはやや強く、層厚は21～51cmである。第2黒色帶に相当すると考えられ、中央部では下層と不整合に堆積している。

第7層は、黄褐色を呈するハードローム層である。鹿沼輕石を少量含み、粘性・締まりはやや強く、層厚は5～15cmである。

第8層は、明黄褐色を呈するハードローム層である。鹿沼輕石を多量含み、粘性はやや弱く締まりは普通で、層厚は0～20cmである。

第9層は、黄橙色を呈する鹿沼軽石層である。粘性は弱く縮まりは強い。下層が未掘のため、層厚は不明である。

造構は、第3層中から第4層の上面で確認した。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 繩文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、遺物包含層1か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

遺物包含層

第1号遺物包含層（第4・5図 PL 2）

調査年度 2015年度

位置 調査区東部のD 5d2～D 5g4区にかけての標高24mほどの緩斜面部に位置している。

規模 東西幅・南北幅それぞれ約12mにかけて確認した。標高差は約0.8mである。

遺物出土状況 繩文土器片267点（深鉢）、石器36点（鐵1・磨石31・敲石2・敲砥石1・石皿1）、石核10点、剥片・チップ類41点、被熱疊46点のはか、弥生土器片8点（広口壺）、自然疊9点が基本層序の第3層中から出土している。

所見 繩文時代早期中葉の土器が85%と主体をなしており、当該期に捨て場として利用されたと考えられる。

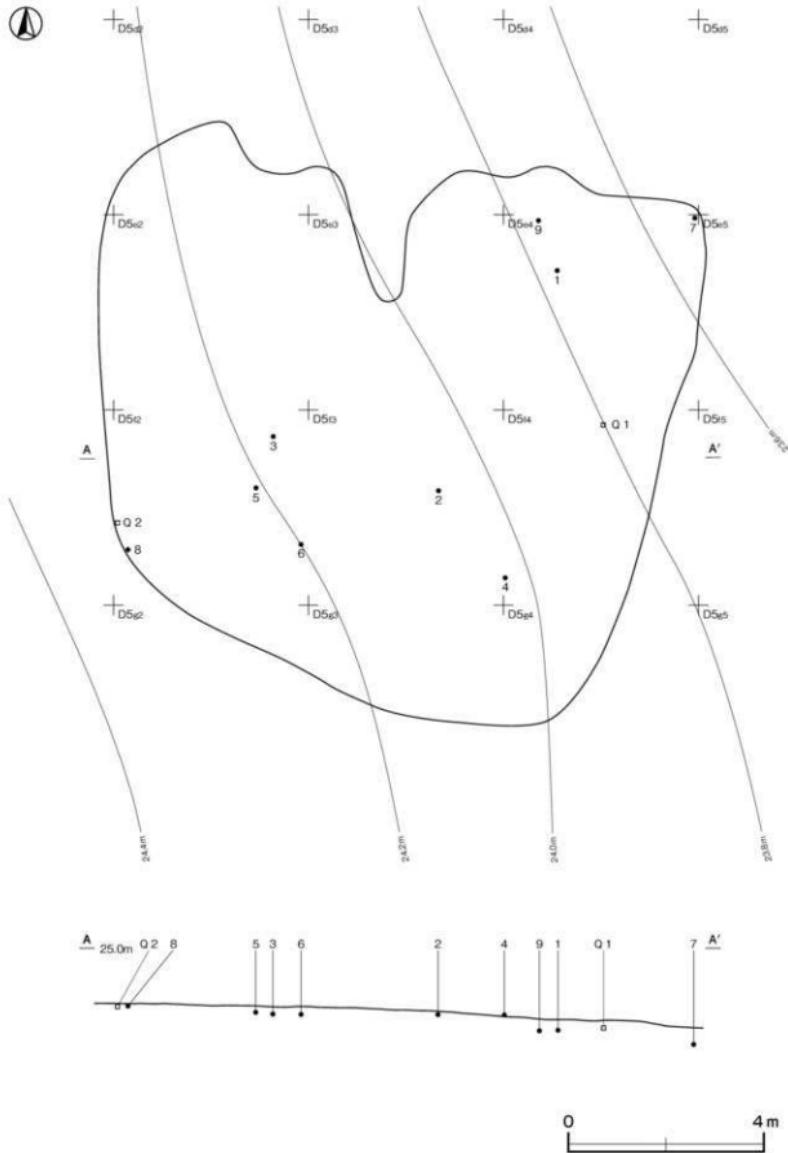
また、瑪瑙を中心とする石核、剥片・チップ類も出土しており、付近で石器製作が行われたと考えられる。

第1号遺物包含層出土遺物観察表（第5図）

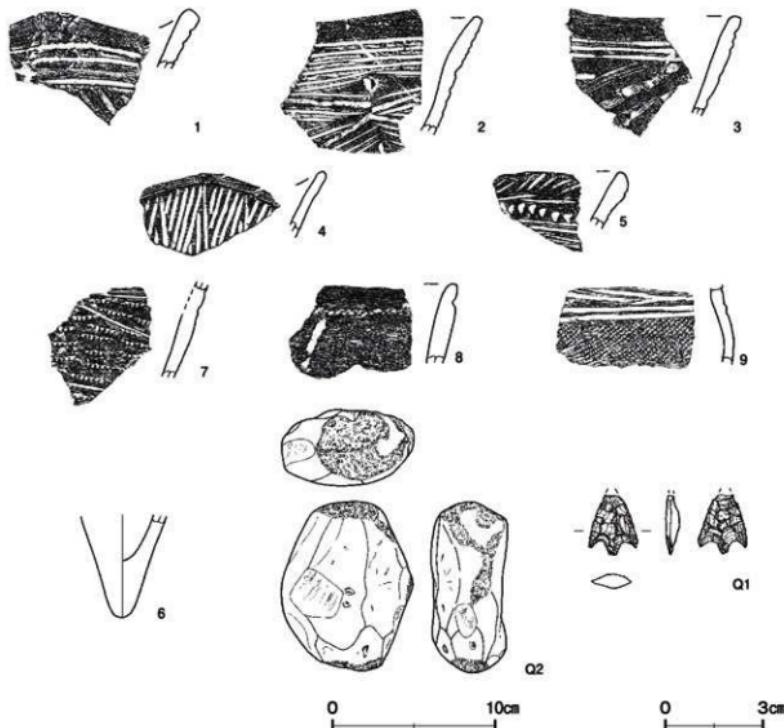
番号	種別	器種	口径	厚さ	底質	胎	土	色調	焼成	手法	特徴ほか	出土位置	備考	
1	繩文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい橙	普通	淡灰口縁	斜削・横穴の沈継	D5e4	PL2	早期中葉	
2	繩文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	平行沈継	変形区画の北側内に斜突文	D5b3	PL2	早期中葉	
3	繩文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	平行沈継	斜削の条痕文。	D5e2	PL2	早期中葉	
4	繩文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	灰黄褐	普通	淡灰口縁	斜削・縦穴の沈継	D5f4	PL2	早期中葉	
5	繩文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口沿部斜削	連続斜突文と横穴の沈継	D5f2	PL2	早期中葉	
6	繩文土器	深鉢	-	(6.4)	-	長石・石英	纏	普通	偏削	偏削のナデ	D5f2	PL2	早期中葉	
7	繩文土器	深鉢	-	-	-	灰石・石英	にぶい橙	普通	斜削	斜削線彫刻	D5e1	PL2	早期中葉	
8	繩文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	口縁部に繩文茎形押圧	平行沈継	D5e2	PL2	早期中葉	
9	繩文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・白粉	灰黒	普通	楕円の半周拵えLR後横穴の沈継	D5e4	PL2	早期中葉		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴						出土位置	備考
Q 1	鐵	(19)	15	0.5	(1.0)	瑪瑙	有茎	先端部欠損				D5f4	PL23	
Q 2	敲砥石	106	82	47	564.3	チャート	梢円錐の両端・舞錐部に敲打痕・研磨					D5f2	PL23	

表2 第1号遺物包含層グリッド別出土遺物集計表

グリッド	D5e2	D5e3	D5e4	D5e2	D5e3	D5e4	D5f2	D5f3	D5f4	D5g2	D5g3	D5g4	合計	
早期	9		5	22	18	18	52	55	31	2	10	4	226	
前中期					1	2						1	6	
繩文土器		1				1	1						3	
中期													15	
後期					1			14					2	
不明						1	1						15	
小計	9	1	6	23	20	22	53	84	31	3	11	4	367	
弥生土器（後期）	2	2										3	8	
鐵									1				1	
磨石（被熱疊）	2			4	2 (1)	1	5 (3)	12 (11)			3 (1)	2 (1)	31 (17)	
石核					1		1	1					3	
敲石・敲砥石													1 (1)	
石皿（被熱疊）									1 (1)				1 (1)	
小計	2	0	0	4	3	1	6	14	1	0	3	2	36	
石核					1	1		2	6				10	
剥片・チップ	1			3	8	5			14		10		41	
離	被熱疊	2 (2)	1		2	2 (1)	5 (5)	12 (10)	16 (13)	2 (2)	2 (2)	7 (7)	4 (4)	55 (46)



第4図 第1号遺物包含層遺物出土状況図



第5図 第1号遺物包含層出土遺物実測図

2 弥生時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴建物跡 25 棟、堅穴遺構 1 基、土坑 1 基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 堅穴建物跡

第1号堅穴建物跡（第6～9図）

調査年度 2015 年度

位置 調査区中央部のD 4 c2 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号堅穴遺構に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.86 m、短軸 5.70 m の隅丸方形で、主軸方向は N - 34° - W である。壁は高さ 18 ~ 33 cm で、ほぼ直立している。

床 平坦で、出入り口部から炉の周辺にかけて踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径 92 cm、短径 83 cm の楕円形で、深さ 8 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼ

んでおり、炉石が据えられている。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。第1層は覆土第6層に相当する。

炉土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・燒土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・燒土粒子微量

3 にぶい赤褐色 燃土粒子中量、ローム粒子微量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ57～65cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ28cmで、

配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第1層は柱痕跡、第2層は埋土である。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

2 黒褐色 ロームブロック中量

覆土 7層に分層できる。ロームブロックが含まれる層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黑褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

5 黒褐色 ローム粒子微量
6 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
7 黒褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 弥生土器片804点（高坏1、広口壺803）、土製品3点（紡錘車2、不明1）、石器12点（石鍬1、磨製石斧1、磨石5、敲石3、台石1、炉石1）、調片1点のほか、繩文土器片12点（深鉢）、須恵器片3点（坏2、蓋1）、土師器片11点（高坏1、甕10）、土師質土器片1点（羽釜）、陶器片1点（擂鉢）、磁器片1点（碗）、粘土塊1点、自然窓7点が出土している。11は北西壁際の床面から逆位で、12・15は、南東壁側の床面から横位で、それぞれ遺棄された状態で出土している。10は、西コーナーから中央部にむかって破片が投棄されたような出土状況を示している。Q 3・Q 4は出入り口付近の床面から出土している。

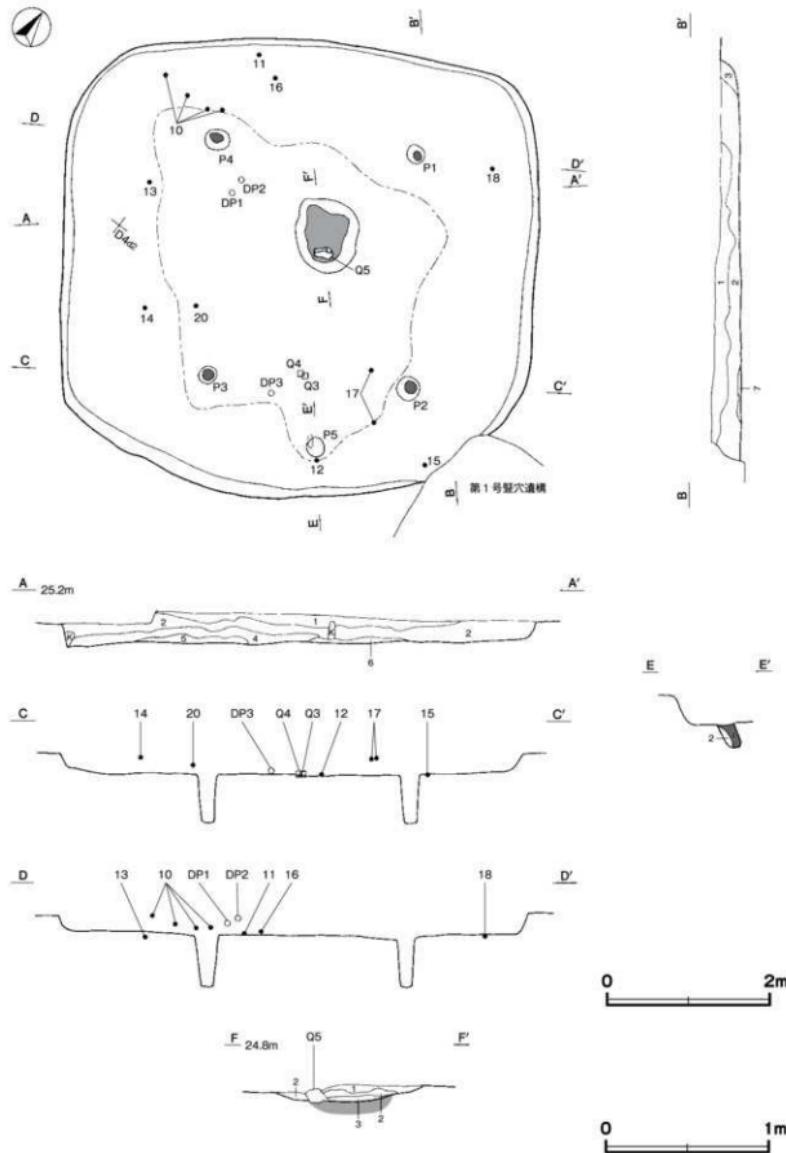
所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表（第7～9図）

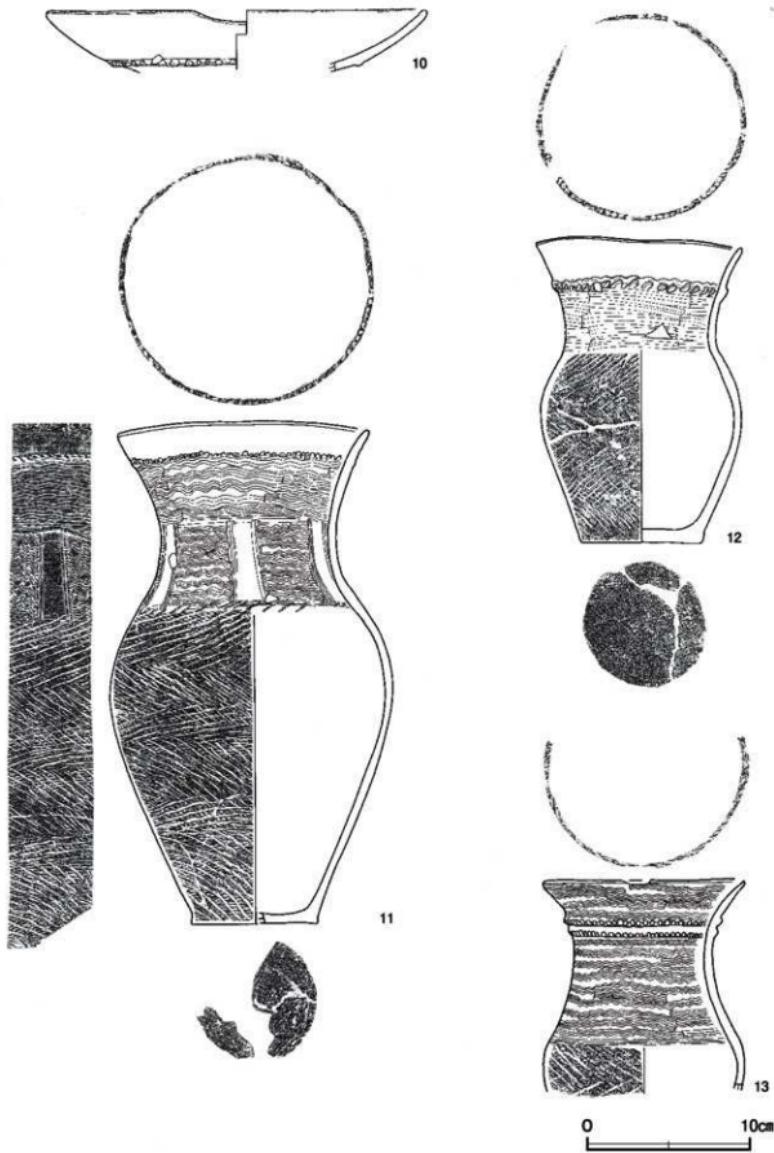
番号	器種	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
10	弥生土器	高坏	[23.4]	(3.7)	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	坏口部焼成・口部断面原体による割れ・坏下部断面に焼成工具で削除	床	覆土中層	30%
11	弥生土器	広口壺	153	31.0	7.8	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口部断面原体による割れ・4本脚状工具スリットによる区画・附加条一種(附加1条)	床面	90% PL15	内面墨渦痕
12	弥生土器	広口壺	128	18.6	7.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口部断面原体による割れ・4本脚状工具スリットによる区画・附加条二種(附加2条)・縫合による口状焼成	床面	90% PL20	二次焼成
13	弥生土器	広口壺	126	(13.1)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口部断面原体による割れ・附加条二種(附加1条)・縫合による口状焼成	床面	40% PL20	
14	弥生土器	広口壺	109	16.9	6.6	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口部断面原体による割れ・附加条二種(附加2条)・縫合による口状焼成	床面	70% PL20	
15	弥生土器	広口壺	118	16.8	5.8	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口部断面原体による割れ・附加条二種(附加2条)・縫合による口状焼成	床面	90% PL20	
16	弥生土器	広口壺	—	(17.2)	6.6	長石・石英・雲母	浅黄褐	普通	3本脚状工具スリットによる区画・網部附加条二種(附加1条)・縫合による口状焼成	覆土下層	80% PL20	
17	弥生土器	広口壺	[152]	(9.0)	—	長石・石英・粘土質鉱物	灰褐褐	普通	口部断面原体による割れ・2本の平行沈線	覆土上層	10% PL22	
18	弥生土器	広口壺	—	(21.3)	(7.7)	長石・石英・青色・黒色粒子	にぶい黄褐	普通	脚状工具による帶状焼成凹凹・5本脚状工具附加条二種(附加2条)・縫合による口状焼成	床面	30% PL21	内面墨渦痕
19	弥生土器	広口壺	—	—	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	脚状工具に貼付2個・附加条二種(附加1条)・縫合による成形	覆土中		
20	弥生土器	広口壺	—	—	—	長石・石英・赤色粒子・細粒	にぶい黄褐	普通	脚状原体による剝突文・附加条二種(附加2条)・縫合による口状焼成	覆土中層		

番号	器種	口径	厚さ	底径	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	紡錘車	38	21	0.5	31.5	長石・石英・雲母	黒褐	全面指捺テクニクス	指捺痕 一方向からの穿孔	覆土上層	PL21
DP 2	紡錘車	(38)	20	0.6	(14.8)	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	半分道存	一方向からの穿孔	覆土上層	風化
DP 3	不明土製品	34	23	2.5	21.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	脚状原体による剝突文	附加条二種(附加1条)・縫合による成形	床面	底面圧痕

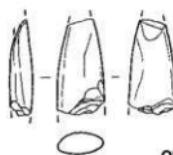
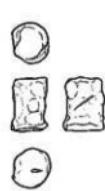
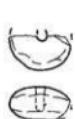
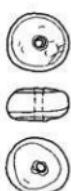
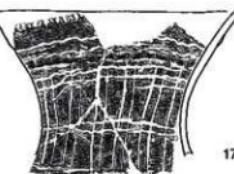
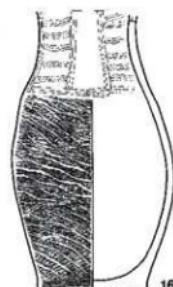
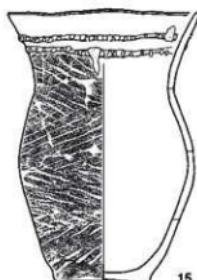
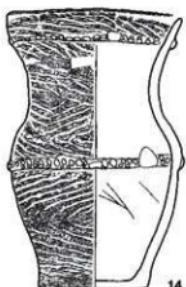
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 3	磨製石斧	(6.0)	(3.0)	1.3	(37.9)	鈍絞岩	刃部欠損	床面	
Q 4	石鍬	11.7	9.5	2.4	(335.2)	ホルンフェルス	一面剥離 表面擦痕	床面	風化
Q 5	炉石	25.4	13.3	8.3	3355.1	流紋岩	火熱を受け赤変・破碎	炉火床面	PL23



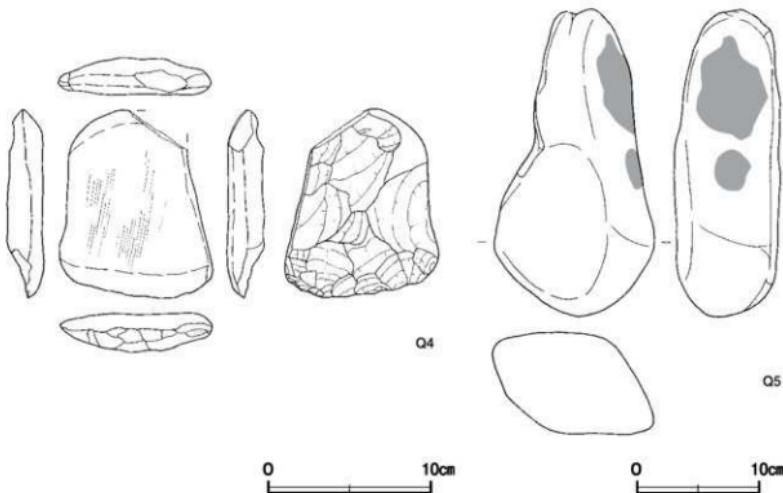
第6図 第1号竖穴建物跡実測図



第7図 第1号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第8図 第1号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)



第9図 第1号竪穴建物跡出土遺物実測図(3)

第2号竪穴建物跡 (第10～13図 PL 3)

調査年度 2015年度

位置 調査区北東部のC 4jo区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.52m、短軸5.13mの方形で、主軸方向はN-41°-Eである。壁は高さ35～46cmで、外傾している。

床 平坦で、炉の周辺が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径109cm、短径102cmの円形で、深さ7cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉石が据えられている。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ55～80cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ60cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 10層に分層できる。ロームブロックが多く含まれる第6～10層が埋め戻された後、第1～5層が自然堆積している。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

2 黒褐色 ロームブロック微量

3 黒褐色 ローム粒子少量

4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

5 暗褐色 ローム粒子中量

6 暗褐色 ロームブロック中量

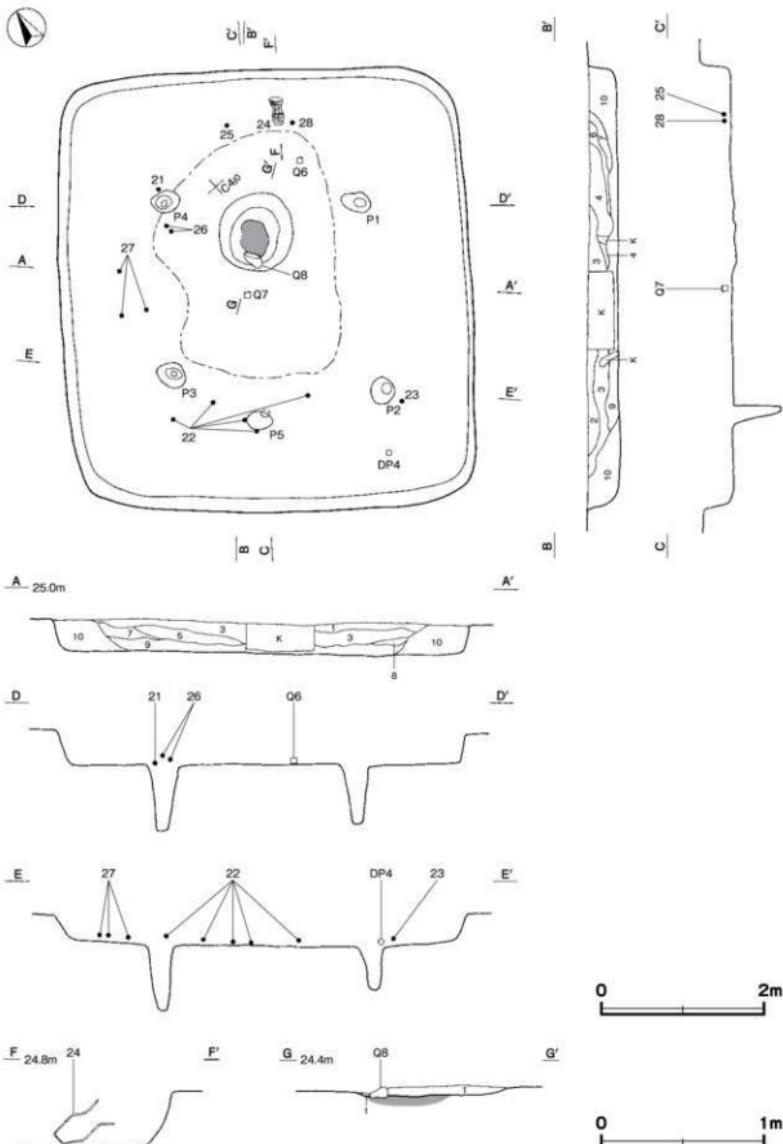
7 暗褐色 ロームブロック中量

8 暗褐色 ロームブロック少量

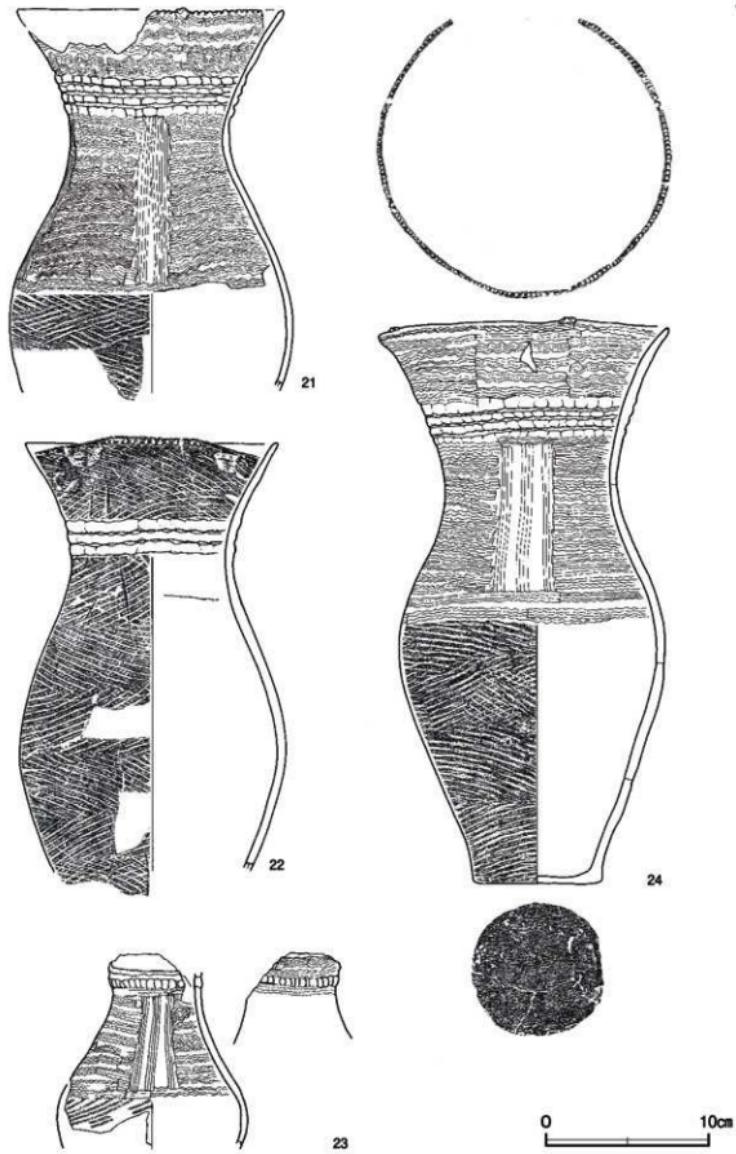
9 暗褐色 ローム粒子多量

10 暗褐色 ロームブロック多量

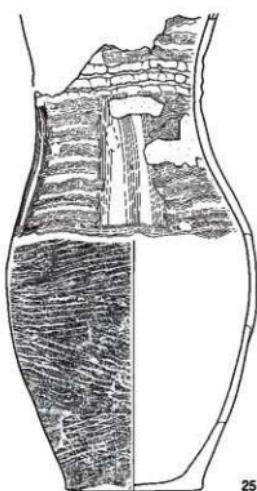
遺物出土状況 弥生土器片773点（高坏1、広口壺772）、土製品1点（紡錘車）、石器20点（鉢2、磨製石斧1、磨石2、敲石6、砥石5、台石3、炉石1）、石核4点、剥片14点のほか、縄文土器片26点（深鉢）、自然礫



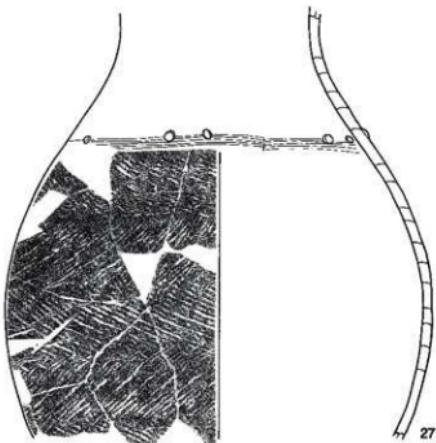
第10図 第2号竪穴建物跡実測図



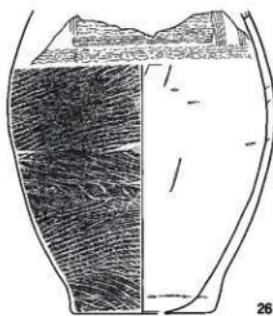
第11図 第2号堅穴建物跡出土遺物実測図(1)



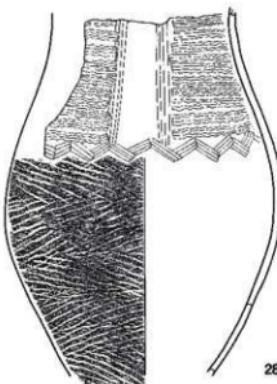
25



27



26



28



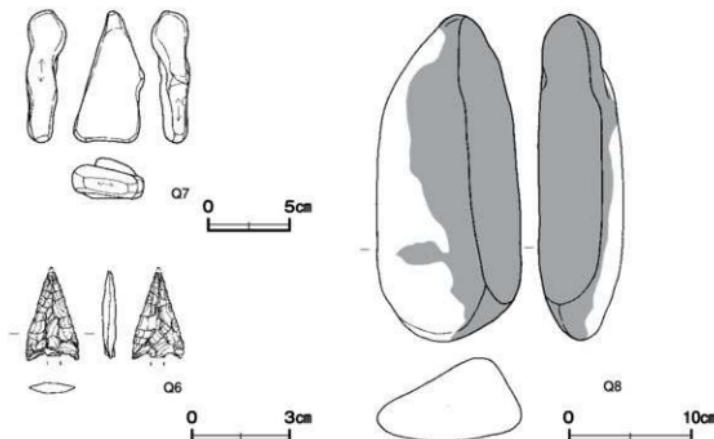
29



DP4



第 12 図 第 2 号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)



第13図 第2号堅穴建物跡出土遺物実測図(3)

10点が出土している。24はほぼ完形で、北東壁側の床面から斜位で、遺棄された状態で出土している。21～23・25～28、D.P.4は、覆土下層から出土しており、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。Q.7は、炉の南側の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。

第2号堅穴建物跡出土遺物観察表（第11～13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
21	弥生土器	広口壺	16.4	(23.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	U形鉗ヘラ状工具による削み、突起4箇所、側部附加条痕不規則による羽状構成	覆土下層	50% PL16
22	弥生土器	広口壺	15.6	(26.5)	-	長石・石英・雲母・石英・白色粒子	橙	普通	U形鉗頭部突起による削み、附加条1種(附加2条)、縦文による羽状構成	覆土下層	50%
23	弥生土器	広口壺	-	(12.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	U形鉗頭部突起、ストリットにより3区画、附加条痕目立つ	覆土下層	30%
24	弥生土器	広口壺	18.4	35.2	7.9	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	U形鉗ヘラ状工具による削み、突起4箇所、側部附加条痕不規則による羽状構成、側部下端ナデ痕痕目立つ	床面	95% PL15
25	弥生土器	広口壺	-	(29.5)	8.4	長石・石英・雲母	橙	普通	U形鉗頭部突起、ストリットにより4区画、附加条痕不規則による羽状構成、底面且墨	覆土下層	30% 外面壁 内面蓋薄板
26	弥生土器	広口壺	-	(18.6)	8.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	U形鉗頭部突起、ストリットにより2区画、附加条2種(附加1条)、縦文による羽状構成	覆土下層	30% 外面壁 内面蓋薄板
27	弥生土器	広口壺	-	(26.7)	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	U形鉗頭部突起、ボタン状突起貼付、附加条繩目立つ、縦文による羽状構成	覆土下層	30% PL21
28	弥生土器	広口壺	-	(22.9)	-	長石・石英・金剛石・針状結晶	橙	普通	U形鉗頭部突起、ストリットにより4区画、附加条繩目立つ、縦文による羽状構成	覆土下層	30% 外面壁
29	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	明赤褐	U形鉗ヘラ状工具による削み、附加条繩不明	覆土中		

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP.4	結縫車	4.1	2.9	0.5	565	長石・雲母・白色粒子	にぶい橙	全面ナデ調整 一方向からの穿孔	覆土下層	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q.6	鏡	(27)	1.6	0.4	(1.2)	チャート	有茎 先端・基部欠損	覆土下層	PL23
Q.7	砥石	8.1	4.4	2.4	81.8	砂岩	砥面3か所	床面	
Q.8	鉛石	26.9	12.1	6.8	2814.0	安山岩	火熱を受け赤変	仰火床面	

第5号竪穴建物跡（第14・15図）

調査年度 2015年度

位置 調査区北東部のD 4 a6 区、標高 25 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北西部が調査区域外へ延びているため、南西北東軸は 657 mで、北西南東軸は 5.50 mしか確認できなかった。楕円形と推測でき、主軸方向は N - 38° - W である。壁は高さ 37 ~ 51 cmで、外傾している。

床 平坦で、炉の周辺が踏み固められている。

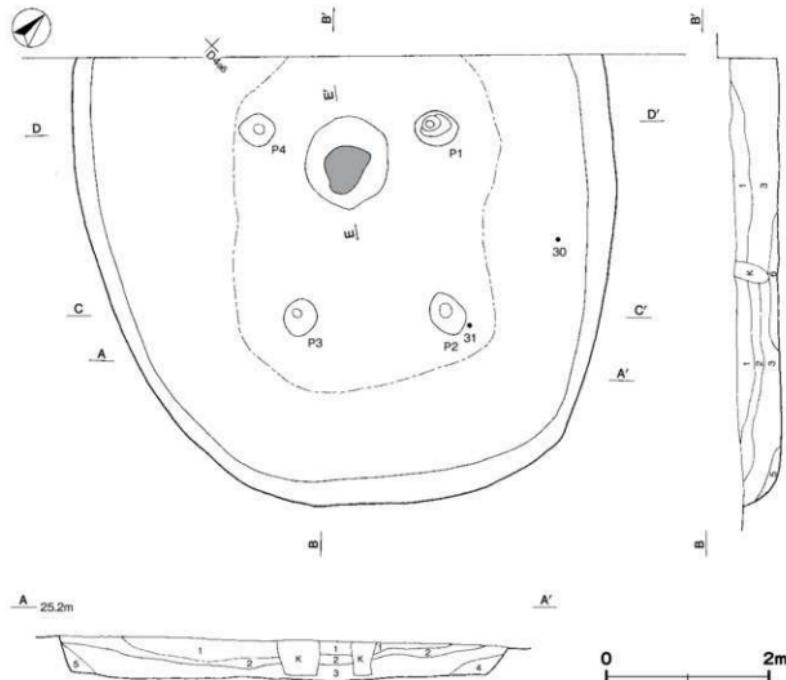
炉 中央部に付設されている。長径 115 cm、短径 101 cm の楕円形で、深さ 8 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

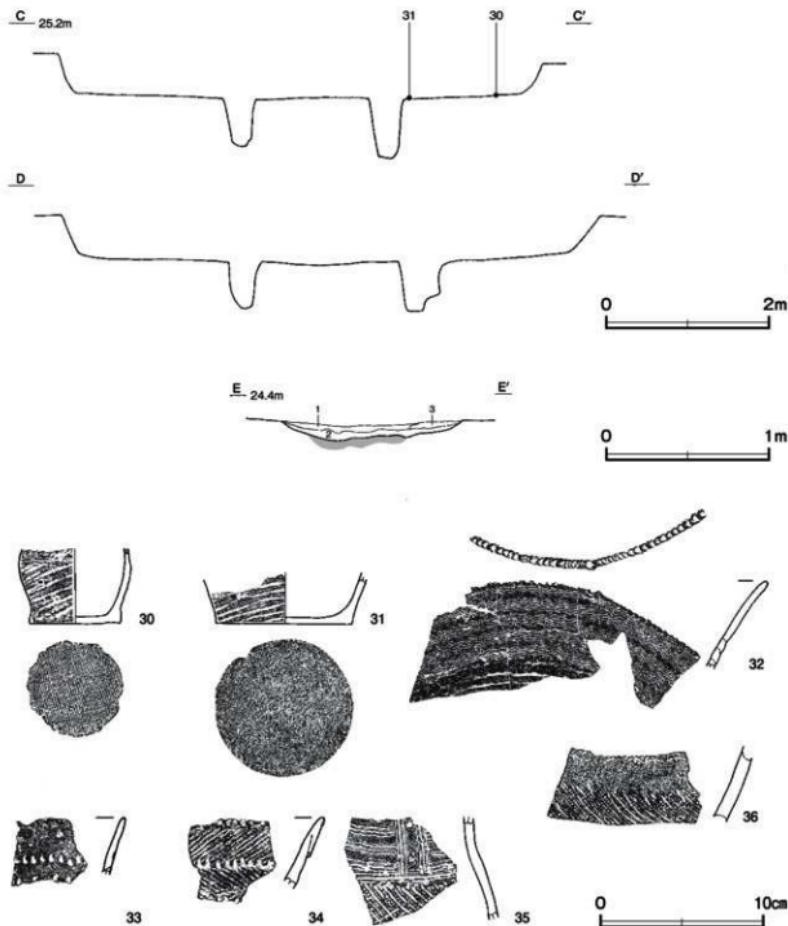
1 黑 色 ローム粒子少量、焼土粒子微量	3 暗 褐 色 ロームブロック中量、焼土粒子少量
2 灰 色 ロームブロック・焼土粒子少量	

ピット 4か所。P 1 ~ P 4 は深さ 59 ~ 75 cm で、規模と配置から主柱穴と考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 6 層に分層できる。ロームブロックが含まれる第3 ~ 6 層が埋め戻された後、第1・2 層が自然堆積している。



第14図 第5号竪穴建物跡実測図



第15図 第5号竪穴建物跡・出土遺物実測図

土層解説

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 灰化粒子少量、ロームブロック微量 | 4 青褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量、灰化粒子微量 | 5 青褐色 ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量 | 6 青褐色 ローム粒子少量、桃土粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片267点（高环1、広口盞266）、石器5点（磨石4、石皿1）、剥片3点のほか、縄文土器片18点（深鉢）、陶器片1点（鉢）が出土している。土器片はほとんどが細片で、全域に散在した状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。

第5号竪穴建物跡出土遺物觀察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
30	生土器	広口壺	-	(4.6)	5.7	長石・石英、 赤鉄・黒色粒子	にぶい黄褐	普通	3本以上の横糸状工具 附加条縫繩不明縫文 底面布目底	床面	25%
31	生土器	広口壺	-	(3.3)	8.4	長石・石英、 赤鉄・黒色粒子	にぶい黄褐	普通	附加条縫繩不明縫文 底面布目底	床面	10%
32	生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英、 赤鉄	褐色	普通	附加条縫繩不明縫文 5本横糸状工具	覆土中	
33	生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英、 赤鉄	にぶい黄褐	普通	口唇部へフチ工具による削み 口唇部に突起 5本横糸状工具	覆土中	
34	生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英、 赤鉄・黒色粒子	明赤褐	普通	口唇部へフチ工具による削み 複文底体による2 段階の縫合	覆土中	
35	生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英、 赤鉄・黒色粒子	にぶい黄	普通	3本横糸状工具 附加条一種(附加2条) 縫文	覆土中	PL.22
36	生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	附加条一種(附加2条) 縫文	覆土中	

第6号竪穴建物跡（第16・17図）

調査年度 2015年度

位置 調査区中央部のD 466区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第23号土坑に掘り込まれ、埋没後に第1号塚が構築されている。

規模と形状 長軸3.08m、短軸2.75mの隅丸長方形で、長軸方向はN=60°Wである。壁は高さ34~55cmで、外傾している。

床 平坦で、炉の周辺がわずかに硬化している。

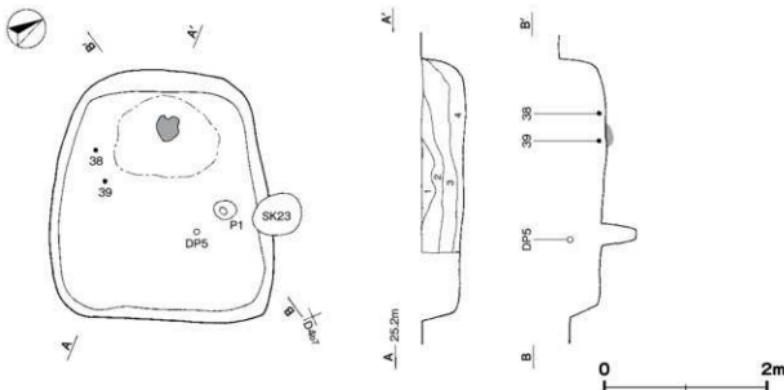
炉 中央部の西壁近くに付設されている。長径65cm、短径56cmの楕円形の地床炉である。炉床は床面とほぼ同じ高さである。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

ピット P 1は深さ41cmである。通常とは異なる配置であるが、出入り口施設に伴うピットの可能性がある。

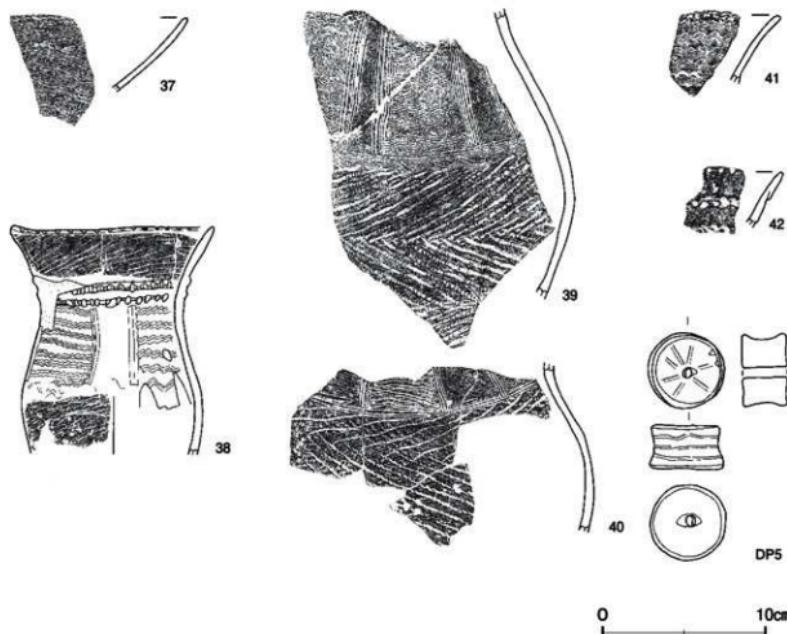
覆土 4層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子が含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量 | 3 黒 褐 色 ロームブロック中量、焼土粒子微量 |
| 2 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量 | 4 暗 褐 色 ロームブロック多量、焼土粒子微量 |



第16図 第6号竪穴建物跡実測図



第 17 図 第 6 号竪穴建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 弥生土器片 148 点（高坏 1、広口壺 147）、土製品 1 点（紡錘車）、石器 5 点（磨石 2、敲石 2、台石 1）、剥片 9 点のほか、繩文土器片 5 点（深鉢）、自然縫 4 点が出土している。38 は炉の南西部の床面から斜位で、遺棄された状態で出土している。39、D.P.5 は、覆土上層から出土しており、埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 ほかの竪穴建物跡と異なる規模と形状であるが、遺物の出土と炉を確認したことから竪穴建物跡と判断した。時期は、出土土器から後期後半に比定できる。

第 6 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 17 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
37	弥生土器	高坏	-	-	-	長石・石英・ 赤母	に赤い黄母	普通	口部断面直角による削み、口縁部分口一部削 り削記痕文弱体灰褐色	覆土中	
38	弥生土器	広口壺	125 (141)	-	-	長石・石英	に赤い褐	普通	口部断面直角による削み、3 本横状工具、スリットにより 4 区割 り縫記痕文弱体灰褐色	床面	60%
39	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・黒色粒子 長石・石英	橙	普通	口部断面直角工具、附加条縫痕不明繩文による羽 状構成	覆土下層	
40	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・角閃石・ 赤母粒子	灰黃褐色	普通	口部断面直角工具、附加条縫痕不明繩文による羽 状構成	覆土中	
41	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	に赤い黄母	普通	口部断面直角による削み、4 本横状工具	覆土中	
42	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 赤母	に赤い黄母	普通	口部断面直角による削み、2 段の折返し口縁 繩文弱体による削み	覆土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 5	紡錘車	46	28	05	67.9	長石・石英・ 赤母	に赤い黄母	全面ナメ調整、2 本の平行弦縫、一方側からの草 刈	覆土上層	PL21

第9号竪穴建物跡(第18～20図 PL 3・4)

調査年度 2016年度

位置 調査区北西部のC 3 d6 区、標高 26 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北西部は第2号溝に掘り込まれ、北東部が調査区域外へ延びているため、北西南東軸は5.56 m、南北東西軸は4.56 mしか確認できなかった。長方形と推測でき、主軸方向はN - 52° - Wである。壁は高さ40～45cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、炉を中心として北西部が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径137cm、短径103cmの楕円形で、深さ8cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。第2層は火熱を受けていない白色粘土ブロックを含む層で、炉床面を横断するように確認できることから、発絶時に意図的に配置された可能性がある。

炉土層解説

1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量	3 黒褐色 焃土ブロック少量、炭化粒子微量
2 黒褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子微量	4 黒褐色 焃土ブロック・炭化粒子微量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ60～85cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ20cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックが多く含まれる第3～6層が埋め戻された後、第1・2層が自然堆積している。

土層解説

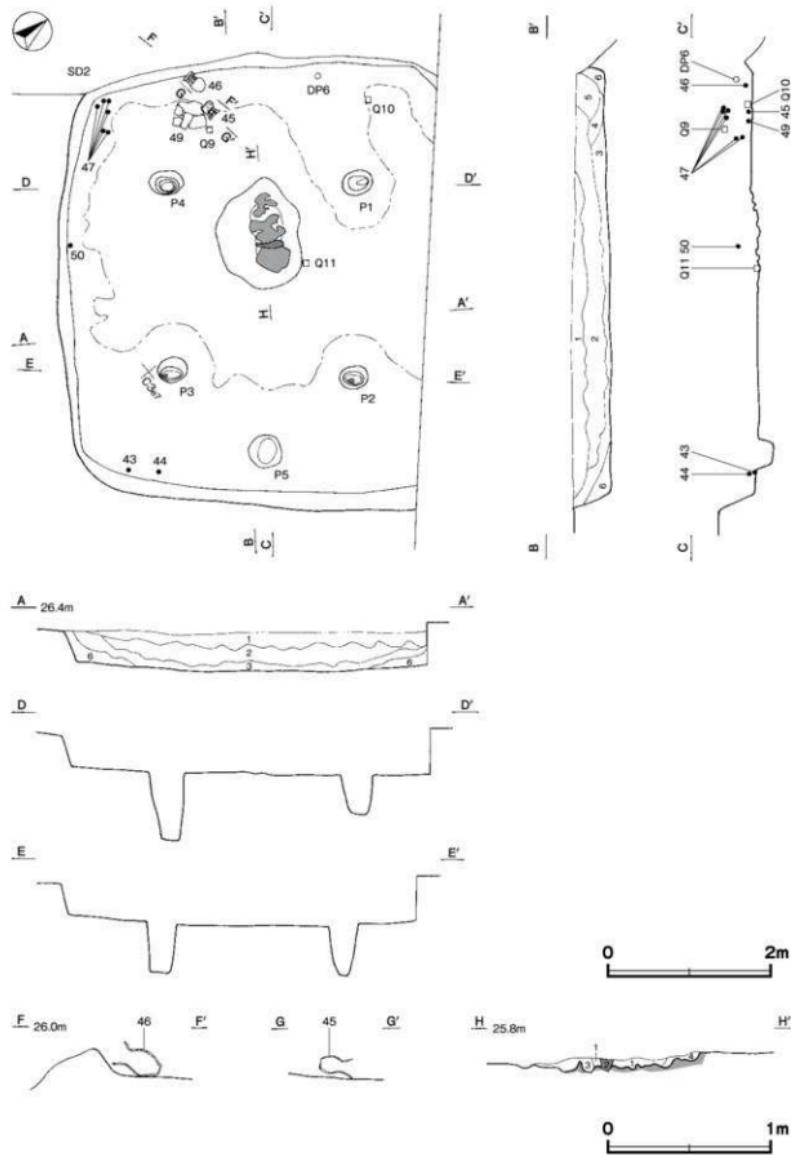
1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量	4 黑褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量
2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量	5 黑褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
3 墓褐色 ロームブロック中量	6 黑褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 弥生土器片487点(高坏1、広口壺486)、土製品1点(紡錘車)、石器13点(縫1、磨石5、敲石3、砥石1、台石3)、剥片3点、石核1点のほか、繩文土器片4点(深鉢)、土師器片1点(甌)、粘土塊4点が出土している。45・46はほぼ完形の状態で北西壁側の床面から横位で、43・44は南コーナー付近の床面から、それぞれ遺棄された状態で出土している。47は西コーナーの覆土下層から破片がまとまった状態で出土しており、埋め戻し過程で投棄されたものと考えられる。Q10は北東壁側の床面から出土している。

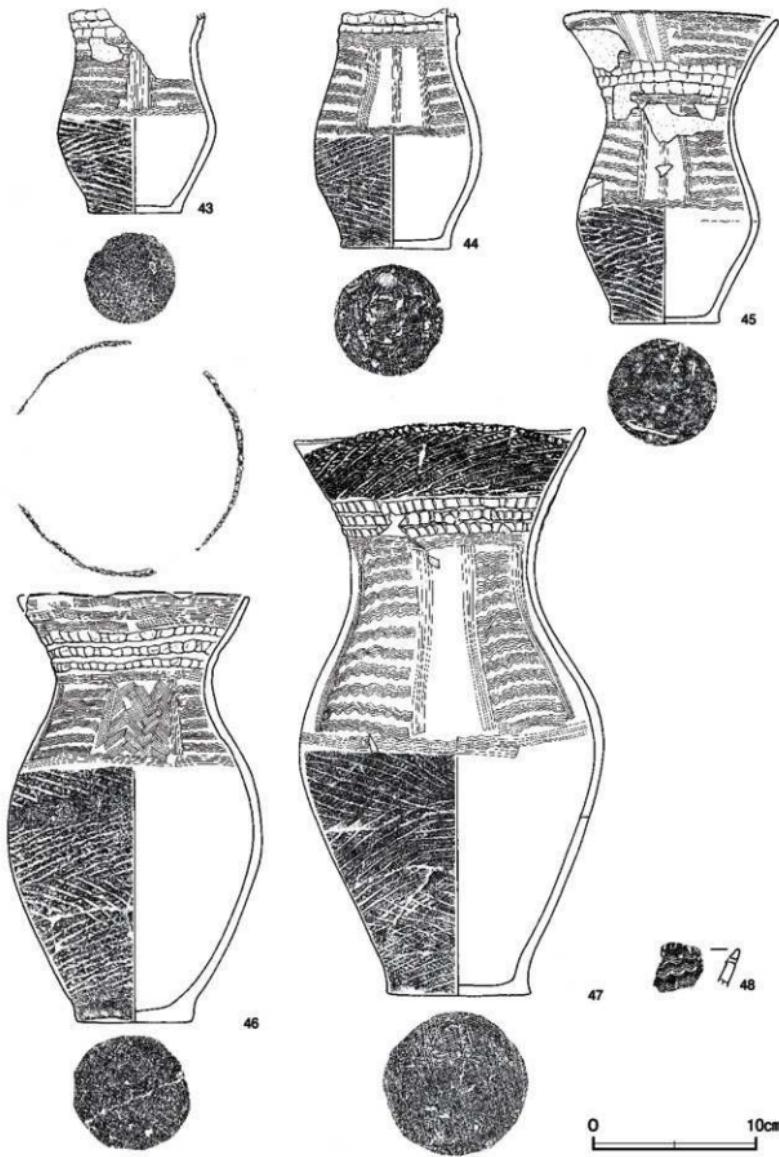
所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。

第9号竪穴建物跡出土遺物観察表(第19・20図)

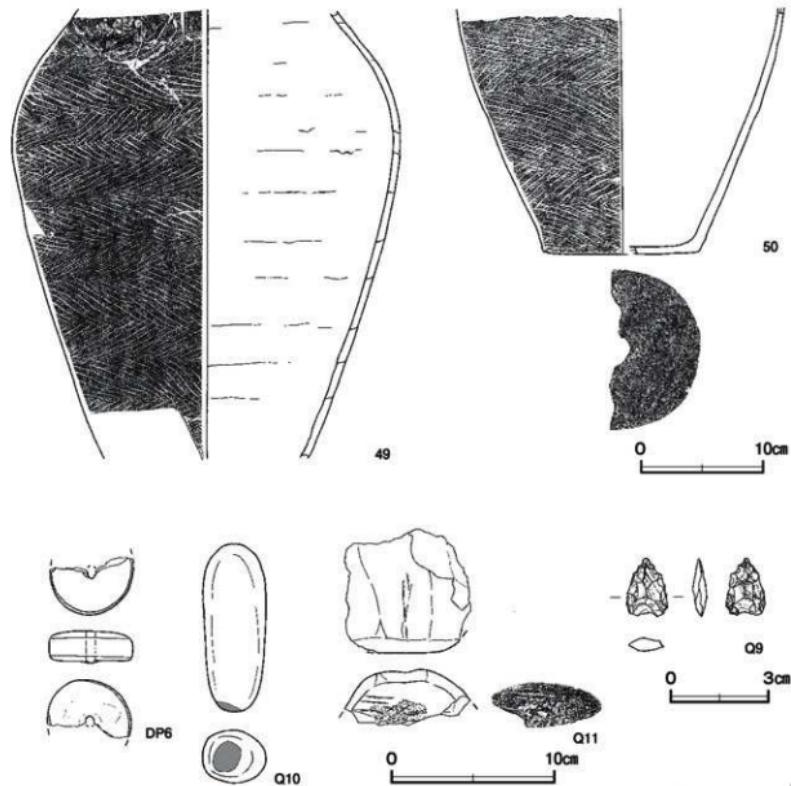
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
43	弥生土器	広口壺	-	(125)	5.8	長石・石英・黒色粒子	に多い青白	普通	4本櫛歯状工具、スリットにより4区画 斜削成、底面を目皿	床面	50% PL20 二次焼成
44	弥生土器	広口壺	-	(149)	6.9	長石・石英・黒色粒子	に多い青白	普通	5本櫛歯状工具、スリットにより4区画 斜削成、底面を目皿	床面	75% PL20 二次焼成
45	弥生土器	広口壺	135	195	6.7	長石・石英・雲母	に多い青白	普通	1面削ヘラ工具による面あら、4本櫛歯状工具、スリットにより4区画 斜削成、底面を目皿	床面	95% PL20 二次焼成
46	弥生土器	広口壺	140	267	7.0	長石・石英・金雲母・赤色粒子	に多い青白	普通	1面削ヘラ工具による面あら、5本櫛歯状工具、スリットによる4区画 斜削成、底面を目皿	床面	95% PL16 内面青白灰 底面灰
47	弥生土器	広口壺	180	35.1	8.9	長石・石英・粘土・灰状灰被物	に多い青白	普通	1面削ヘラ工具による面あら、5本櫛歯状工具、スリットによる4区画 斜削成、底面を目皿	覆土下層	90% PL15 外面灰
48	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	標準	1面削ヘラ工具による面あら、4本櫛歯状工具、斜削成前掌突孔1ヶ所	覆土中	PL22	
49	弥生土器	広口壺	-	(37.0)	-	長石・石英・黒色粒子	に多い青白	普通	4本櫛歯状工具、斜削成二種(削加工1条)、焼成	床面	30%
50	弥生土器	広口壺	-	(202)	128	長石・石英・雲母	に多い青白	普通	斜削成二種(削加工1条)、焼成による羽状焼成、底面摩滅一部を目皿	覆土下層	外面灰 内面青白灰



第18図 第9号堅穴建物跡実測図



第19図 第9号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第20図 第9号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)

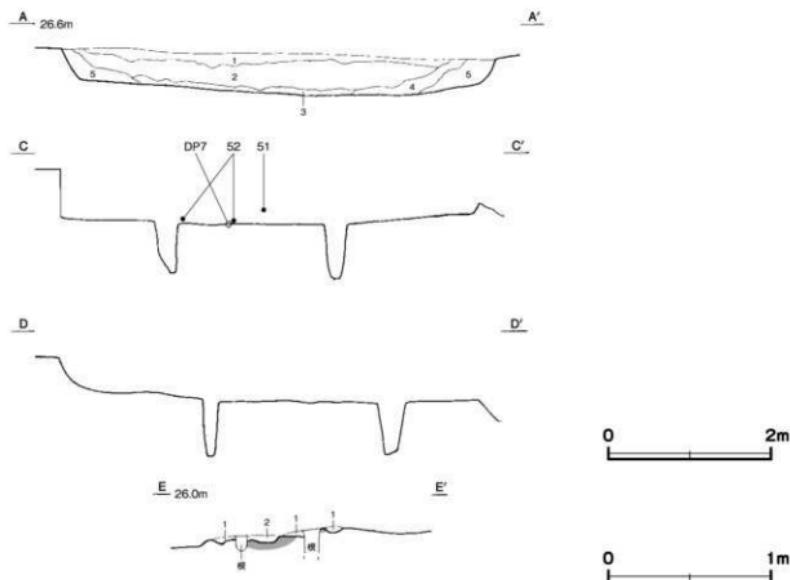
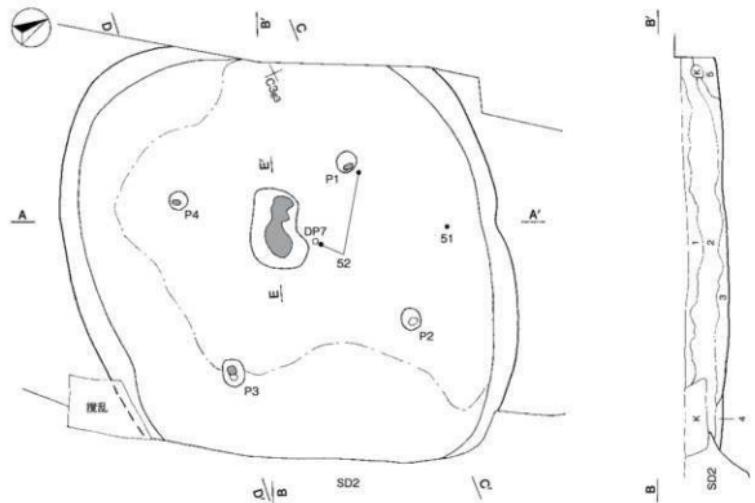
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	始土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 6	轆轤車	52	20	0.6	(349)	長石・石英・ 雲母	灰黄褐色	半分遺存 全面ナメ調整 一方向からの穿孔	覆土下層	
Q 9	鐵	18	13	0.4	0.9	チャート	無客		覆土上層	PL23
Q 10	磨石	105	39	3.4	26.4	安山岩	磨面1か所		床面	PL23
Q 11	鐵石	(7.7)	(7.9)	(3.5)	(291)	砂岩	敲面1か所 2面に細い溝状痕 砥石転用。		覆土下層	

第10号堅穴建物跡 (第21・22図 PL 4)

調査年度 2016年度

位置 調査区北西部のC 3 g3 区、標高 26 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号溝に掘り込まれている。



第21図 第10号堅穴建物跡実測図

規模と形状 南東部は第2号構に掘り込まれ、北西部が調査区域外へ延びているため、南北軸は5.40mで、東西軸は5.36mしか確認できなかった。隅丸長方形と推測でき、主軸方向はN-82°-Wである。壁は高さ28~55cmで、外傾している。

床 平坦で、炉の周辺から北側の壁にかけて踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径98cm、短径74cmの不整梢円形で、深さ5cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 黒褐色 腐化粒子多量、焼土粒子中量

2 黒色 腐化粒子多量、焼土ブロック中量

ピット 4か所。P1~P4は深さ62~70cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれる第3~5層が埋め戻された後、第1・2層が自然堆積している。

土層解説

1 黒色 腐化粒子少量

4 墨褐色 ロームブロック中量、炭化物少量

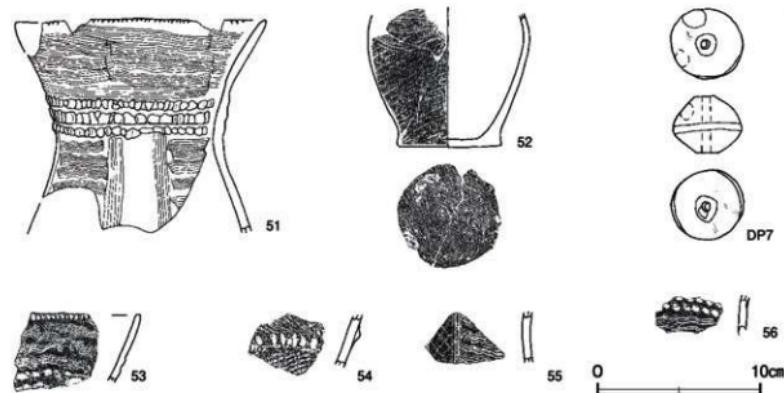
2 黒色 ローム粒子・腐化粒子少量

5 浅褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量

3 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片605点(広口壺)、土製品1点(鉢錐車)、石器7点(磨石3、敲石1、砥石3)、剥片3点、被熟繰7点のほか、瓦質土器片1点(火鉢)、自然繰1点が出土している。51・52・54・55は、出土層位から埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。53・56は、窪地状に堆積した黒色土中から出土しており、後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。出入り口に伴う施設は確認できなかったが、炉の配置から出入り口は東に存在していたと考えられる。



第22図 第10号竪穴建跡出土遺物実測図

第10号竪穴建物跡出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	厚さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
51	弥生土器	広口壺	15.4	(13.3)	-	長石・石英、 黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口部部ヘラ状工具による削み スリットにより4区割 5本櫛歯状工具 附加素輪縄不明顯文を一方向	覆土下層	30%
52	弥生土器	広口壺	-	(8.2)	6.3	長石・石英、 黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	普通	覆土下層	30%
53	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英、 黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口部部ヘラ状工具による削み 5本櫛歯状工具	覆土中 (上層)	
54	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英、 黒色粒子	明黄褐色	普通	口部部に繩文底突起 附加素輪縄 縄文による羽状模様	覆土中 (中層)	
55	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英、 黒色粒子	明黄褐色	普通	5本櫛歯状工具	覆土中 (下層)	
56	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英、 黒色粒子	黄褐色	普通	複数個体による2列の帯状剥突文 3本櫛歯状	覆土中 (上層)	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 7	紡錘車	4.4	3.5	0.5	582	長石・石英、 黒色粒子	橙	全面ナゲ調整 上面穿孔部周辺丁寧なナデ 向からの穿孔	床面	PL2I

第11号竪穴建物跡（第23・24図 PL 4）

調査年度 2016年度

位置 調査区北西部のD 2 b9 区、標高 26 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 西部が調査区域外へ延びているため、東西軸は 624 m で、南北軸は 628 m しか確認できなかった。隅丸長方形と推測でき、主軸方向は N - 41° - W である。壁は高さ 15 ~ 35 cm で、外傾または緩やかに立ち上がりっている。

床 平坦で、炉の北西側が踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに付設されている。北西部が搅乱を受けており、長径は 114 cm で、短径は 55 cm しか確認できなかった。不整梢円形で、深さ 9 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 黒 色 焼土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子少量 2 黒 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子多量、ローム粒子中量

ピット 7 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 53 ~ 73 cm で、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ 36 cm で、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6・P 7 は深さ 60 ~ 50 cm で、P 1・P 4 を立て替えた主柱穴の可能性がある。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

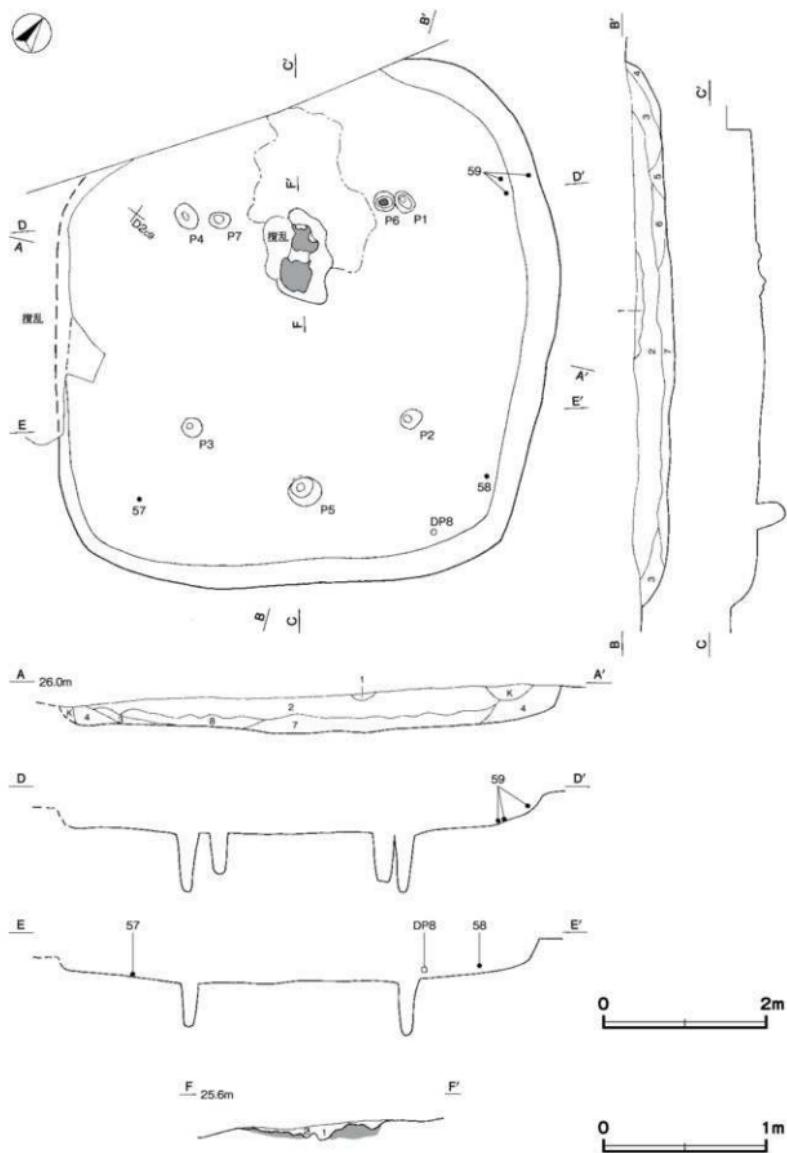
覆土 8 層に分層できる。ロームブロックが含まれる第3 ~ 8 層が埋め戻された後、第2層が自然堆積している。第1層は流入土である。

土層解説

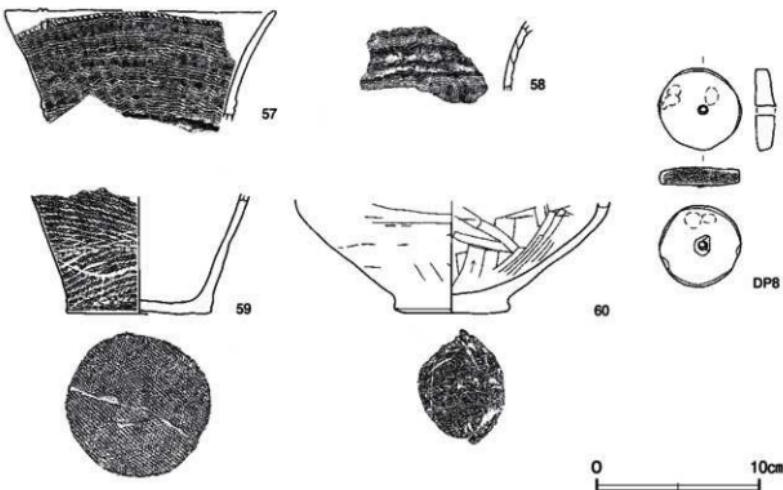
1 黒 暗褐色 ローム粒子中量	5 暗褐色 ロームブロック少量
2 黒 色 ローム粒子・炭化粒子少量	6 黒 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量
3 暗褐色 ロームブロック中量	7 黒 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
4 暗褐色 ロームブロック多量	8 灰黄褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片 531 点（広口壺）、土師器片 2 点（壺）、土製品 1 点（紡錘車）、石器 7 点（磨製石斧 1、磨石 3、敲石 2、砥石 1）、被燃窯 1 点のほか、繩文土器片 1 点（深鉢）、自然窯 1 点が出土している。57 ~ 59 は、出土層位から埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。60 は、窯地状に堆積した黒色土中から散在した状態で出土しており、後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。黒色土中から土師器片が出土していることから、本跡は廃絶後しばらく窯地の状態で残されていたと考えられる。



第23図 第11号堅穴建物跡実測図



第24図 第11号竪穴建物跡出土遺物実測図

第11号竪穴建物跡出土遺物観察表（第24図）

番号	種 别	器種	口径	厚高	底径	胎 土	色 調	燒成	手 法 の 特 徹 は か	出土位置	備 考
57	弥生土器	広口壺	16.8	(6.8)	—	長石・石英	にぶい褐色	普通	口部沿へラ状工具による削み 突起4單位。	覆土下層	10%
58	弥生土器	広口壺	—	—	—	長石・石英	にぶい褐色	普通	5本櫛歯状工具	覆土下層	
59	弥生土器	広口壺	—	(7.3)	8.8	長石・石英 青銅	にぶい褐色	普通	附加柵網焼(引継文による羽状構成後胴部下端 濃焼 周囲赤目焼	覆土下層	10% 内面赤渋痕
60	土器部	甌	—	(6.9)	6.8	長石・石英・韌繩	にぶい褐色	普通	外面部斜位のハナナデ 内面部斜位のハケ目 赤色粒子・韌繩	覆土中 (上層)	10%
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎 土	色 調	特 徹		出土位置	備 考
DP 8	紡錘車	5.0	1.2	0.5	34.0	長石・石英 青銅 黒色粒子	褐色	上下面ナデ調整 指調痕 無面目痕 一方向か 心の穿孔		覆土下層	PL.21

第12号竪穴建物跡（第25図）

調査年度 2016年度

位置 調査区北西部のD2街区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2・3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南西部が調査区域外へ延びていて、北西南東軸は5.05mで、北東南西軸は2.52mしか確認できなかった。方形または長方形と推測できる。壁は高さ13~22cmで、外傾している。

床 平坦で、壁際を除き踏み固められている。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれる第2~4層が埋め戻された後、第1層が自然堆積している。

土層解説

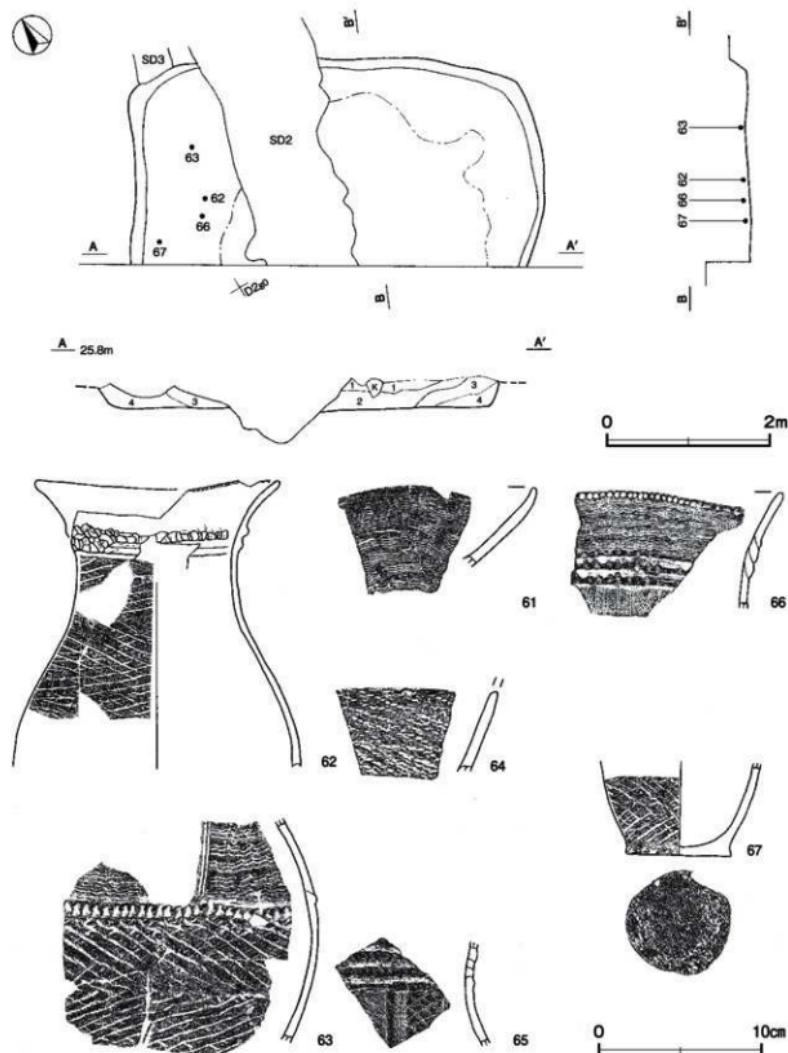
- | | |
|---------|----------------|
| 1 黒 色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒 褐 色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |

- | | |
|---------|------------------|
| 3 褐 色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 4 黑 褐 色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片365点(高坏1、広口壺364)、土師器片1点(甌)、土製品1点(紡錘車)、石器4点(磨石2、敲石1、石皿1)、剥片1点、被熟繩2点のほか、繩文土器片1点(深鉢)、錢貨1点(寛永通寶)が出

土している。62・63・66・67は、出土層位から埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。炉も柱穴も確認できていないが、確認できた北西南東軸の幅や硬化面の状況、遺物の出土状況から堅穴建物跡と判断した。



第25図 第12号堅穴建物跡・出土遺物実測図

第12号竪穴建物跡出土遺物観察表（第25図）

番号	種 別	器種	口径	基高	底径	胎 土	色 調	施成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
61	弥生土器	高環	-	-	-	瓦石・石英、 赤色粒子	にぶい褐色	普通	5本櫛歯状工具	覆土中 (下層)	
62	弥生土器	広口壺	[150]	(177)	-	瓦石・石英、 赤色粒子	にぶい褐色	普通	口部櫛歯状工具による刷込み 貼加条一種(附加 2条) 縞文による羽状焼成	覆土下層	20%
63	弥生土器	広口壺	-	-	-	瓦石・石英、 赤色・黑色粒子	にぶい褐色	普通	3本櫛歯状工具 脚部底帯に縞文原体による刷 込み 貼加条二種(附加1条) 縞文による羽状燒成	覆土下層	
64	弥生土器	広口壺	-	-	-	瓦石・石英、 赤色	にぶい褐色	普通	貼加条施純不明縞文	覆土中 (下層)	
65	弥生土器	広口壺	-	-	-	瓦石・石英、 赤色	灰褐色	普通	4本櫛歯状工具 平行沈れによる格子目文	覆土中 (下層)	
66	弥生土器	広口壺	-	-	-	瓦石・石英、 赤色・黒色粒子	灰褐色	良好	口部櫛歯原体による刷込み 4本櫛歯状工具	覆土下層	
67	弥生土器	広口壺	-	(3.7)	6.4	瓦石・石英、 赤色	灰褐色	普通	貼加条施純不明縞文による羽状焼成 褐面ナゲ 調整	覆土下層	30%

第13号竪穴建物跡（第26・27図 PL 5）

調査年度 2016年度

位置 調査区西部のC 3h9区、標高 26m はどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径 553m、短径 4.94m の楕円形で、主軸方向は N - 23° - E である。壁は高さ 18 ~ 40cm で、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部の北東寄りに付設されている。長径 134cm、短径 87cm の楕円形で、深さ 8cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 燈土ブロック多量、炭化物少量、ローム粒子微量
2 暗褐色 燈土ブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子少量

ピット 5か所。P 1 ~ P 4 は深さ 49 ~ 59cm で、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ 23cm で、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 5層に分層できる。ローム粒子やブロックが多く含まれており、埋め戻されている。一度第5層を床面に敷くように埋め戻した後、第1 ~ 4層を埋め戻している。

土層解説

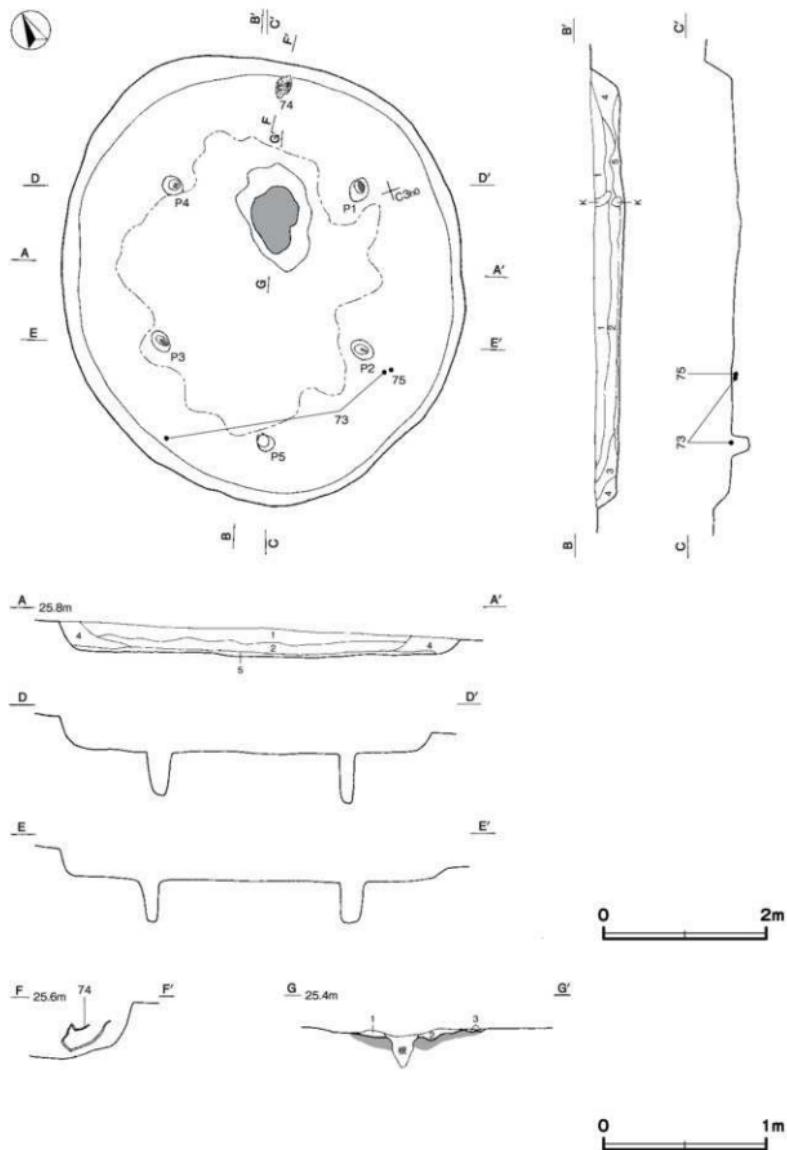
- 1 にぶい黄褐色 ローム粒子中量、炭化物少量
2 にぶい黄褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
3 暗褐色 ローム粒子、炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
5 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片 461点(高環2、広口壺459)、石器9点(磨石3、敲・磨石2、敲石1、砥石2、石斧1)、剥片2点。被熱離6点が出土している。73は第5層を埋め戻す際に投棄されたもので、74・75は第5層埋め戻し後に設置され遺棄された可能性がある。

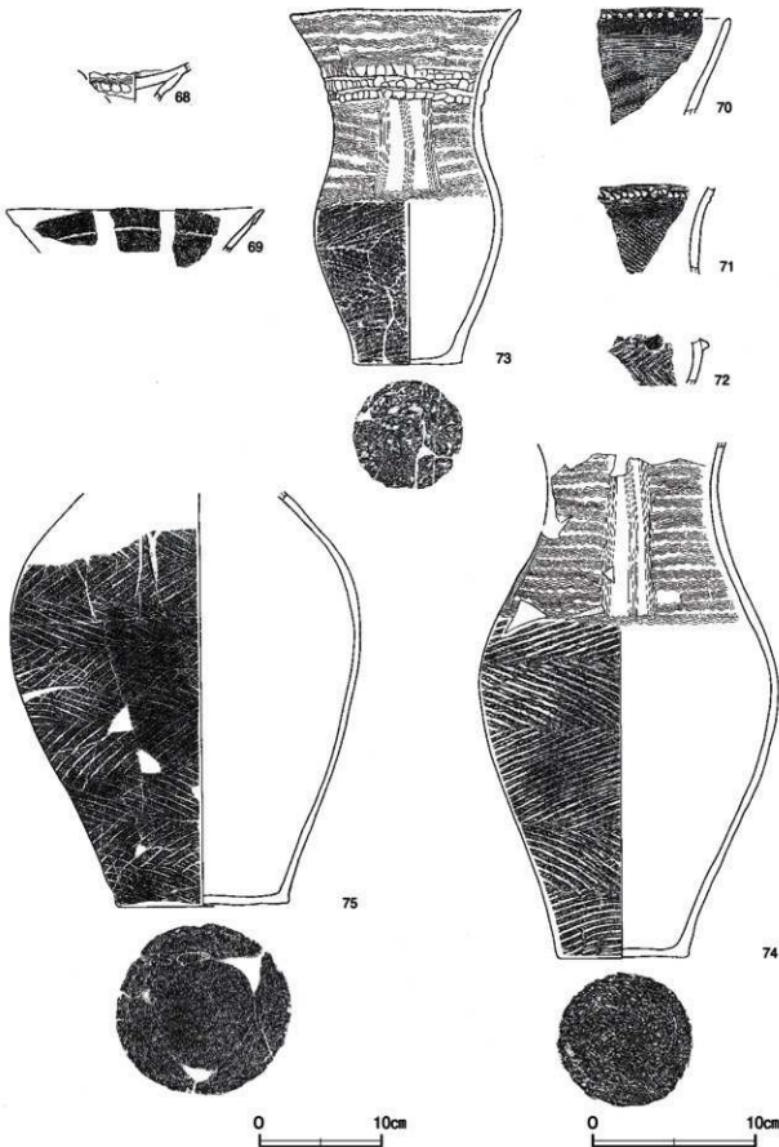
所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。

第13号竪穴建物跡出土遺物観察表（第27図）

番号	種 別	器種	口径	基高	底径	胎 土	色 調	施成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
68	弥生土器	高環	-	(2.4)	-	瓦石・石英、 赤色粒子	にぶい褐色	普通	5本櫛歯状工具	P 1 覆土中	5%
69	弥生土器	高環	[160]	(2.7)	-	赤色・粒子	にぶい褐色	普通	貼口土縁	覆土中	5%
70	弥生土器	広口壺	-	-	-	瓦石・石英、 赤色粒子	にぶい褐色	普通	口部櫛歯状工具による刷込み 7本櫛歯状工具	覆土中	
71	弥生土器	広口壺	-	-	-	瓦石・石英、 赤色粒子	にぶい褐色	普通	縞文原体による帯状刷込み 貼加条施純不明縞 文	覆土中 (床面上)	
72	弥生土器	広口壺	-	-	-	瓦石・石英、 赤色	にぶい褐色	普通	貼加条二種(附加1条) 縞文による羽状燒成	覆土中	
73	弥生土器	広口壺	14.2	22.1	6.8	瓦石・石英、 赤色	灰褐色	普通	口部ハラビ工具による刷込み 5本櫛歯状工具 スリットにより4区割 貼加条二種(附加1条) 縞文による羽状燒成、直面凹凸線ナガテ波紋	床面～ 覆土下層	80% 外側保 内部直面



第26図 第13号堅穴建物跡実測図



第27図 第13号竪穴建物跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴 は か		出土位置	備考
									木標・衝突工具	附加条幅・不明縦文による羽状構成		
74	弥生土器	広口壺	-	(321)	82	長石・石英・ 黒色粒子	にぼい青緑	普通	5木標・衝突工具	附加条幅・不明縦文による羽 状構成	床面一 實土下層	80% 外周壁 内面裏済直
75	弥生土器	広口壺	-	(326)	142	長石・石英・ 赤色粒子	にぼい青 赤色粒子	普通	附加条幅・不明縦文による羽状構成	底面砂目	床面一 實土下層	50%

第14号竪穴建物跡（第28・29図）

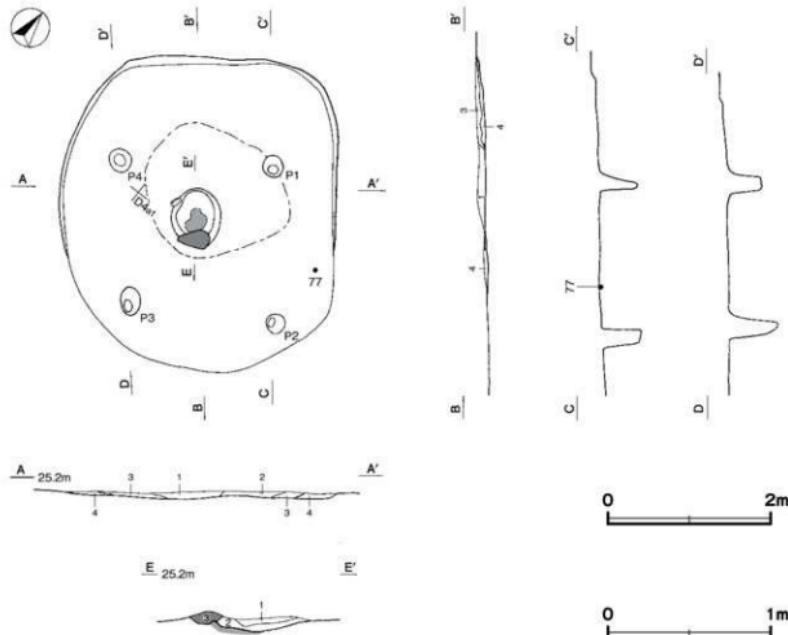
調査年度 2016年度

位置 調査区中央部のC4j1区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南部が削平されており、短軸は341mで、長軸は389mしか確認できなかった。床面の状況やピット、炉の配置から隅丸長方形と推測でき、主軸方向はN-36°-Wである。壁は高さ6-8cmで、緩やかに立ち上がっている。

床 平坦で、炉の周辺が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径72cm、短径60cmの楕円形で、深さ8cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けてわずかに赤変している。第3層は火熱を受けていない白色粘土ブロックを含む層で、炉床面南東部に確認できることから、廃絶時に意図的に置かれた可能性がある。



第28図 第14号竪穴建物跡実測図

炉土層解説

- 1 黒褐色 烧土ブロック・炭化粒子少量
2 褐色 烧土ブロック・ローム粒子中量

- 3 灰褐色 粘土ブロック多量

ピット 4か所。P 1～P 4は深さ40～61cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれる第3・4層が埋め戻された後、第1・2層が自然堆積している。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
2 黒褐色 ロームブロック少量

- 3 暗褐色 ロームブロック中量
4 褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 弥生土器片55点（広口壺）、自然礫2点が出土している。炉の西側の床面からは風化した花崗岩が出土しており、土器製作の際の混和剤として持ち込まれた可能性がある。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。



第29図 第14号竪穴建物跡出土遺物実測図

第14号竪穴建物跡出土遺物観察表（第29図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	筋	土	色調	施成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
76	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	にい・黄褐	普通	口唇部縦文原体による割み。4本削歯状工具		覆土中	
77	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	にい・褐	普通	口唇部縦文原体による割み。4本削歯状工具		床面	
78	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	にい・黄褐	普通	平行削歯による格子目文		覆土中	
79	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	にい・黄褐	普通	削歯2種（附加1条）。縦文による羽状構成		覆土中	

第15号竪穴建物跡（第30・31図 PL.5）

調査年度 2016年度

位置 調査区北西部のC 37区、標高26mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.84m、短軸3.98mの隅丸長方形で、主軸方向はN-37°Wである。壁は高さ12～36cmで、外傾している。

床 平坦で、炉の周辺及び北西部が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径115cm、短径44cmの楕円形で、深さ7cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。第3層は火熱を受けていない白色粘土ブロックで、炉床面を横断するように確認できることから、発絶時に意図的に置かれた可能性がある。

炉土層解説

- 1 黒褐色 烧土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量
2 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

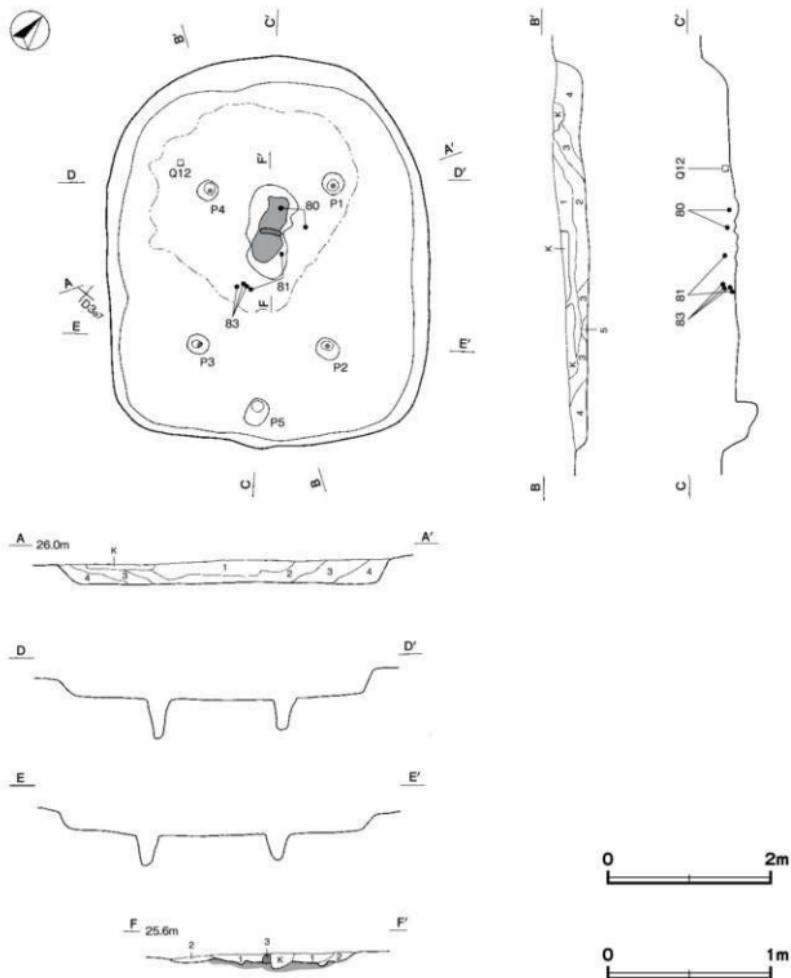
- 3 灰白色 粘土ブロック多量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ32～46cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ22cmで、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれる第3～5層が埋め戻された後、第1・2層が自然堆積している。

土層解説

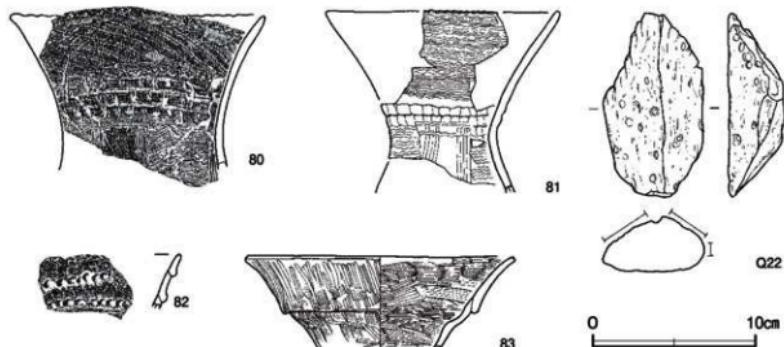
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 黄褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 5 黄褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 灰褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | | |



第30図 第15号堅穴建物跡実測図

遺物出土状況 弥生土器片 290 点（広口壺）、土師器片 1 点（壺）、石器 10 点（磨石 6、敲石 2、石皿 1、砥石 1）、剥片 3 点、粘土塊 1 点が出土している。80～83 は、窪地状に堆積した黒色土中から散在した状態で出土しており、埋め戻し後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。黒色土中から土師器片が出土していることから、本跡は廃絶後しばらく窪地の状態で残されていたと考えられる。



第31図 第15号堅穴建物跡出土遺物実測図

第15号堅穴建物跡出土遺物観察表（第31図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
80	弥生土器	広口壺	[160]	(9.1)	-	長石・石英	灰黄褐色	普通	Q1削礫文施成による割込み、附加施成不明確 Q2削礫文施成による割込み、スリットにより4区画 Q3削礫文施成による割込み、7本施成状工具、スリットにより4区画	覆土上層	20%
81	弥生土器	広口壺	[147]	(11.0)	-	長石・石英・ 黑色粒・赤色粒子	に赤・青白	普通	Q1削礫文施成による割込み、5本削齒状工具 Q2削礫文施成による割込み、4区画	床面・ 覆土上層	15%
82	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 黑色粒	灰褐色	普通	Q1削礫文施成による割込み、4本以上の削齒状 工具	覆土中	
83	土師器	壺	164	(5.9)	-	長石・石英・ 黑色粒・赤色粒子	に赤・青白	普通	外側面・斜傾のハケ目後斜・横段のミガキ 内 側面のミガキ 口縁部外側面有影	覆土上層	20%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
Q 12	砥石	11.4	6.2	3.5	63.8	軽石	紙面	さか所		PL.23	

第16号堅穴建物跡（第32・33図 PL. 5）

調査年度 2016 年度

位置 調査区西部の D 3d4 区、標高 26 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 5.32 m、短軸 5.05 m の隅丸方形で、主軸方向は N - 49° - W である。壁は高さ 13 ~ 38 cm で、外傾している。

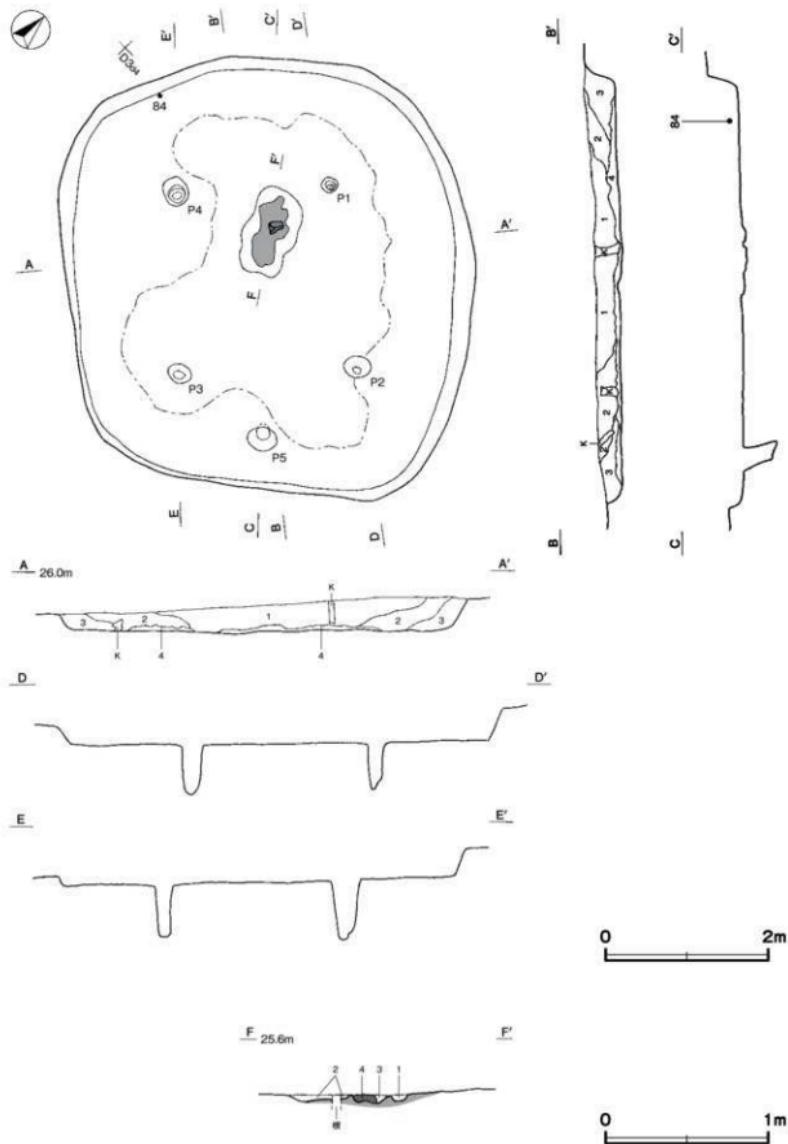
床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに付設されている。長径 110 cm、短径 65 cm の楕円形で、深さ 6 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。第 4 層は火熱を受けていない白色粘土ブロックで、炉床面を横断するように確認できることから、廃絶時に意図的に置かれた可能性がある。

炉土層解説

- 1 剛 機 色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 機 色 焼土ブロック・ローム粒子少量

- 3 黒 機 色 灰化物中量、焼土ブロック・ローム粒子少量
- 4 灰 黃 機 色 粘土ブロック多量



第32図 第16号堅穴建物跡実測図

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ57～72cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ31cmで、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

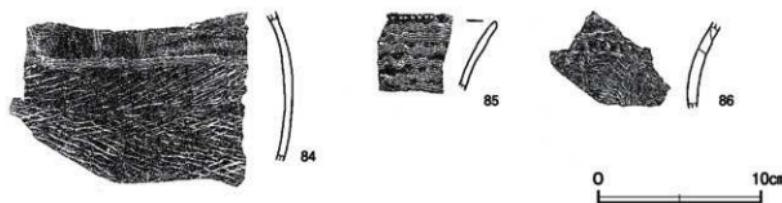
覆土 4層に分層できる。黒褐色土を主体とする第4層が全域に堆積した後、ロームブロックが含まれる第1～3層が埋め戻されている。

土層解説

1	褐	色	ロームブロック多量、炭化粒子少量	3	褐	色	ローム粒子多量、炭化粒子中量	
2	褐	色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	4	黑	褐	色	炭化粒子多量、ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片241点(広口壺)、石器6点(磨石3、敲石2、台石1)、被熱躍1点のほか、縄文土器片1点(深鉢)が出土している。土器片はほとんどが細片で、全域に散在した状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。



第33図 第16号竪穴建物跡出土遺物実測図

第16号竪穴建物跡出土遺物観察表（第33図）

番号	種別	器種	口径	肩高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
84	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 黄鐵	にぶい黄	普通	6本櫛歯状工具 附加系縄彫不明文による羽 状模様		覆土中層	
85	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	暗褐	普通	口部芯部ハラ状工具による削み	4本櫛歯状工具	覆土中	
86	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 紫母・黑色粒子	棕	普通	5本櫛歯状工具		覆土中	

第17号竪穴建物跡（第34・35図 PL 6）

調査年度 2016年度

位置 調査区西部のD 3g2区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径5.46m、短径5.32mの円形で、主軸方向はN-50°Wである。壁は高さ12～23cmで、外傾している。

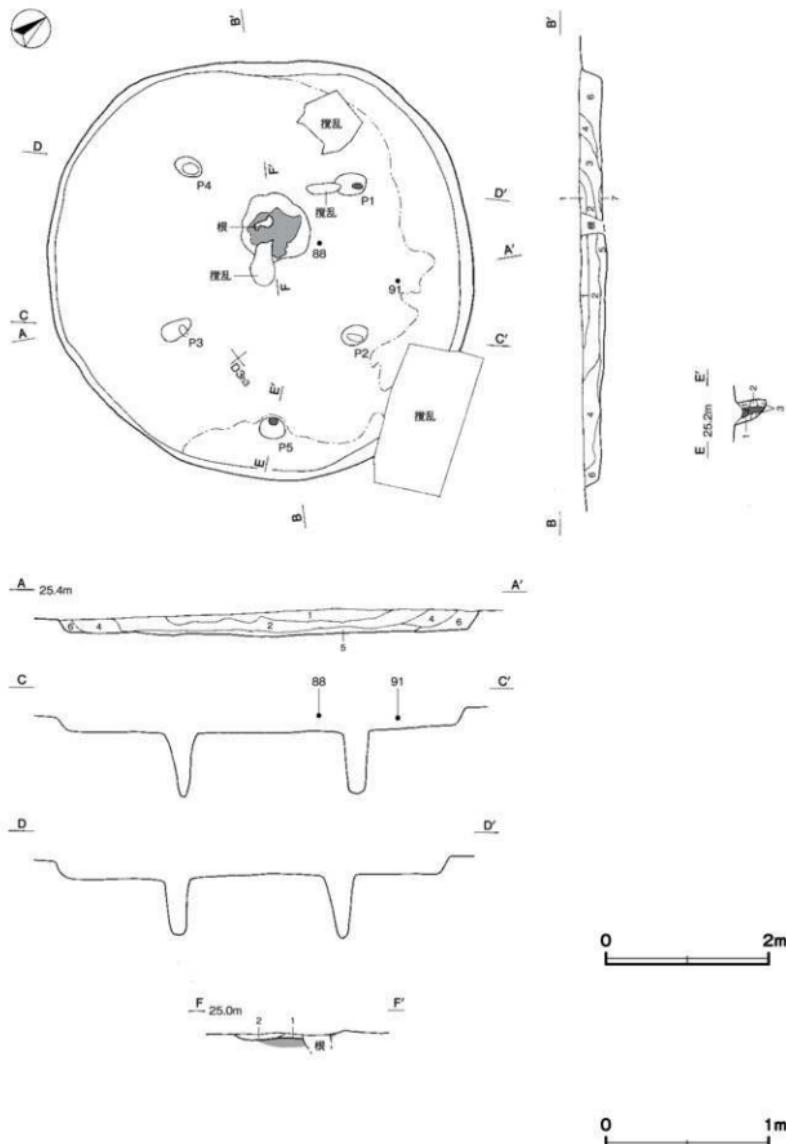
床 平坦で、ほぼ全面が踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに付設されている。長径94cm、短径85cmの楕円形で、深さ5cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1	暗	褐	色	燒土粒子中量、ローム粒子少量	2	暗	褐	色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量
---	---	---	---	----------------	---	---	---	---	-------------------

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ76～80cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。土層の堆積状況から、主柱穴は4本とも抜き取られている。主柱穴の平面形はおおむね楕円形で、割材を柱として利用した可能性がある。P 5は深さ40cmで、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第1～3層は埋土、第4層は柱痕跡である。



第34図 第17号堅穴建物跡実測図

ピット土層解説

1 白 色 ロームブロック中量、炭化粒子少量	3 白 色 ローム粒子多量
2 黒 色 ロームブロック少量	4 黒 色 ローム粒子微量

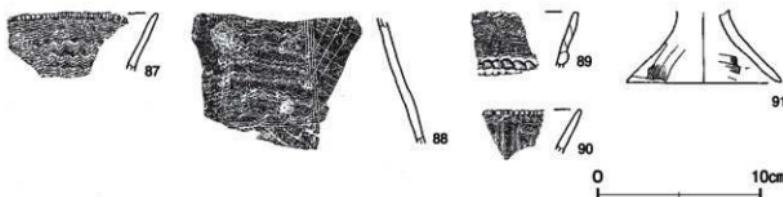
覆土 7層に分層できる。ロームブロックが含まれる第3～7層が埋め戻された後、第1・2層が自然堆積している。

土層解説

1 黒 色 ローム粒子少量	5 白 色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
2 黒 色 ロームブロック・焼土粒子微量	6 白 色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
3 白 色 ロームブロック少量	7 白 色 ローム粒子多量、焼土粒子中量
4 白 色 ローム粒子少量	

遺物出土状況 弥生土器片219点（広口壺）、土器片1点（器台）、石器5点（磨石2、敲・磨石1、敲石1、台石1）のほか、繩文土器片2点（深鉢）、土師質土器片1点（鉢）が出土している。88・91は、出土層位から埋め戻し後に投棄された、または混入したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。



第35図 第17号竪穴建物跡出土遺物実測図

第17号竪穴建物跡出土遺物観察表（第35図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
87	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 黒色粒子	浅黄褐	普通	口唇部ヘラ状工具による削み 4本横歯状工具	覆土中	
88	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 赤色・細理	にい(浅粉)	普通	4本横歯状工具 平行沈継による格子目文 脚部軸継不明確文	覆土上層	
89	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 赤色	にい(浅粉)	普通	口唇部輪郭部軸押圧	覆土中	
90	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 黒色	白	普通	口唇部ヘラ状工具による削み 5本横歯状工具	覆土中	
91	土師器	器台	-	(4.5)	(9.2)	長石・石英・ 黒色粒子・赤色粒子	白	普通	脚部外縁側位のヘラナデとハゲ目 内面斜位のハケ目	覆土上層	10%

第18号竪穴建物跡（第36図）

調査年度 2016年度

位置 調査区北西部のC3e3区、標高26mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号溝に掘り込まれている。

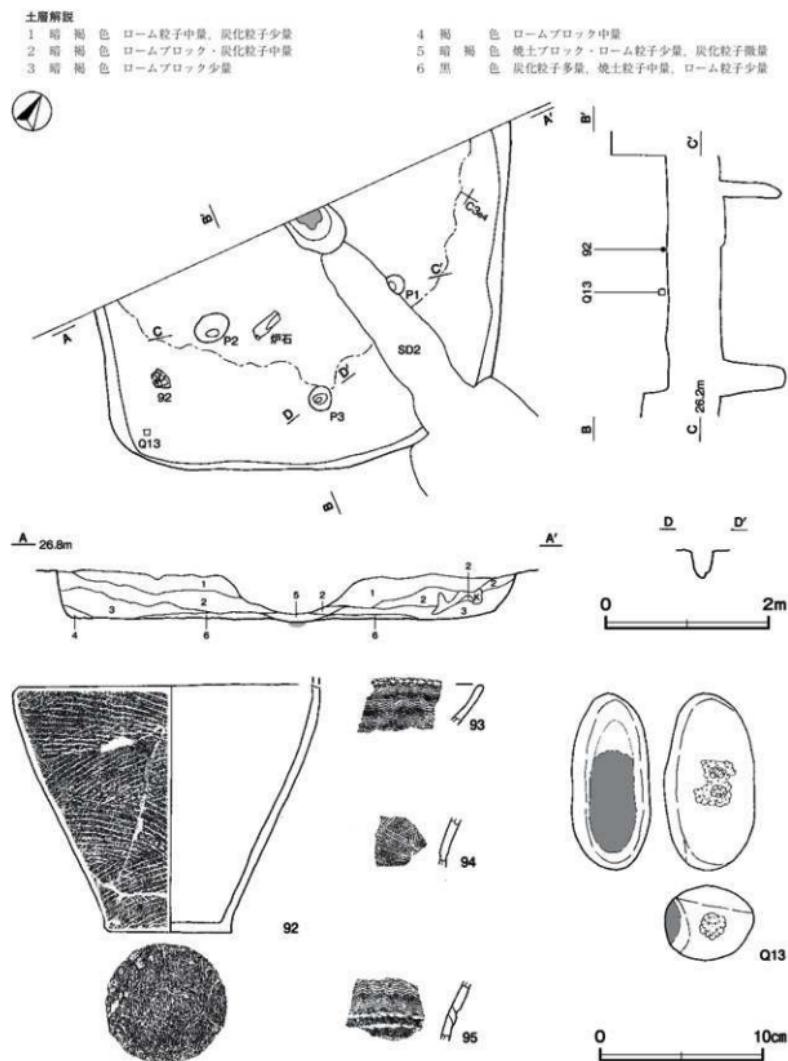
規模と形状 西部が調査区域外へ延びているため、北東南西軸は5.00mで、北西南東軸は3.48mしか確認できなかった。方形または長方形と推測でき、主軸方向はN-34°-Wである。壁は高さ30～42cmで、直立または外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。確認できた部分は長径60cm、短径50cmで、楕円形と推定できる。深さ6cmの地床炉で、炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 3か所。P1・P2は深さ75・80cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ32cmで、

配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。
覆土 6 層に分層できる。黒色土を主体とする第6層が床面上に堆積した後、ロームブロックを含む第1～4 層で埋め戻されている。第5層は炉の覆土である。



第36図 第18号堅穴建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 弥生土器片 162 点（高坏 1, 広口壺 161), 石器 9 点（磨石 4, 敲・磨石 2, 凹石 1, 台石 1, 炉石 1), 石核 2 点。剥片 1 点。被熱隕 1 点。瑪瑙原石 1 点のほか、繩文土器片 2 点（深鉢）、自然隕 5 点が出土している。92 は覆土下層からつぶれた状態で出土しており、埋め戻しの際に投棄されたものと考えられる。火熱を受けて赤色変化した炉石が出土しているが、炉からは離れており廃絶後に動かされたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。

第 18 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 36 図）

番号	種 別	器種	口径	深高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
92	弥生土器	広口壺	189	154	7.6	長石・石英・ 角母	にい・青白	普通 附加第二種（附加 1 点）構文による羽状構成 追加第三種（附加 1 点）構文による羽状構成	覆土下層 追加布目追加縞ナガ調整	覆土下層 内面着溝直 内利用	
93	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	にい・青白	普通 口部彌文原体による削り 5 本羽状工具		覆土中	
94	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 角母	にい・青白	普通 5 本羽状工具		覆土中	
95	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 角母・黑色粒子	灰褐色	普通 4 本羽状工具		覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q 13	敲・磨石	11.0	5.5	4.5	426.9	安山岩	敲面 2 か所 壓面 1 か所	覆土下層	PL23

第 19 号竪穴建物跡（第 37 ~ 40 図 PL 6・7）

調査年度 2016 年度

位置 調査区西部の D 3c7 区、標高 26 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 12 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.48 m、短軸 4.50 m の隅丸長方形で、主軸方向は N - 22° - W である。壁は高さ 15 ~ 40 cm で、外傾している。

床 平坦で、ほぼ全面が踏み固められている。

炉 中央部の北寄りに付設されている。長径 98 cm、短径 64 cm の楕円形で、深さ 8 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | | | | | |
|---------|---------|---------|--------|---------|-------|------|--------|
| 1 黒 暗 色 | ローム粒子中量 | 燒土粒子少量 | 炭化粒子微量 | 3 黑 暗 色 | ローム粒子 | 燒土粒子 | 炭化粒子微量 |
| 2 黒 暗 色 | 燒土ブロック | ローム粒子少量 | 炭化粒子微量 | | | | |

ピット 5 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 55 ~ 70 cm で、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ 37 cm で、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

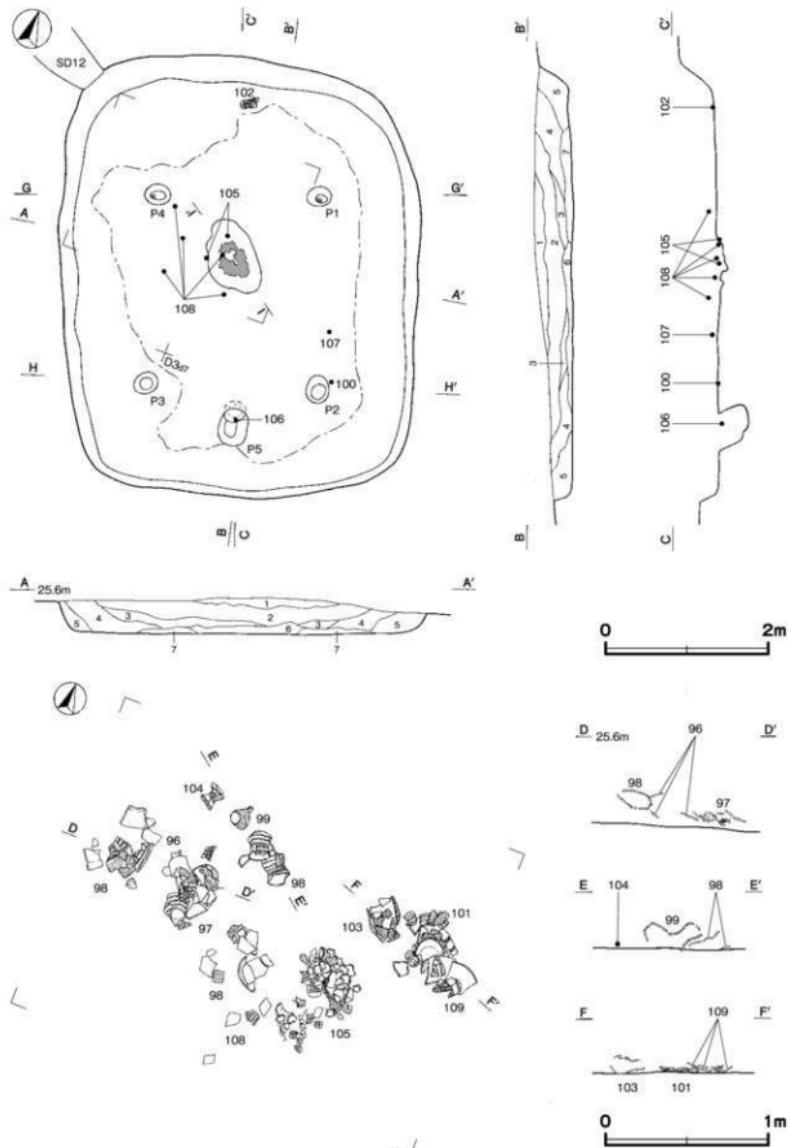
覆土 7 層に分層できる。ロームブロックが含まれる第 3 ~ 7 層が埋め戻された後、第 1・2 層が自然堆積している。

土層解説

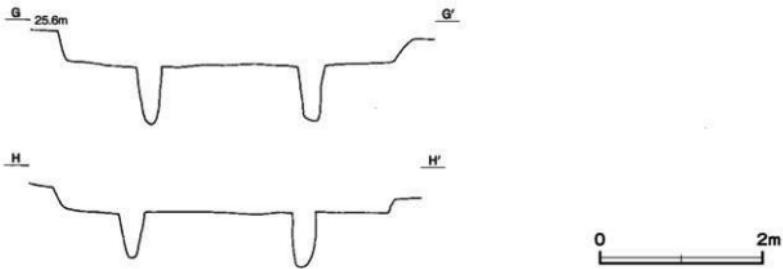
- | | | | |
|---------|--------------|---------|-----------|
| 1 黒 暗 色 | ローム粒子微量 | 5 暗 暗 色 | ローム粒子極多量 |
| 2 黒 暗 色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 6 暗 暗 色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒 暗 色 | ローム粒子中量 | 7 暗 暗 色 | 燒土粒子微量 |
| 4 暗 暗 色 | 炭化粒子微量 | | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 弥生土器片 1,029 点（高坏 1, 広口壺 1,028), 石器 8 点（磨石 2, 敲石 3, 砥石 1, 台石 2) のほか、自然隕 5 点が出土している。出土した大形の破片は、ある程度埋め戻した状態で北西コーナーから炉及び P 1 の方向に投棄された様相を呈している。96 ~ 109 は、主に床面から覆土下層にかけて破碎された状態で出土しており、埋め戻しの際に投棄されたものと考えられる。

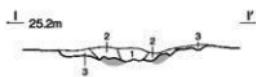
所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。多量の遺物が出土しているが、すべて破碎された状態で



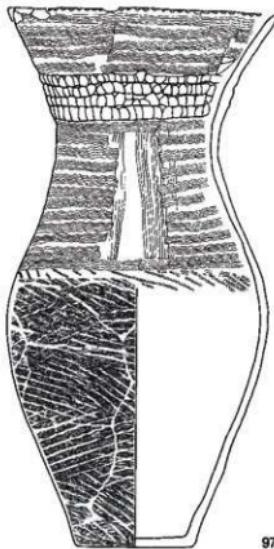
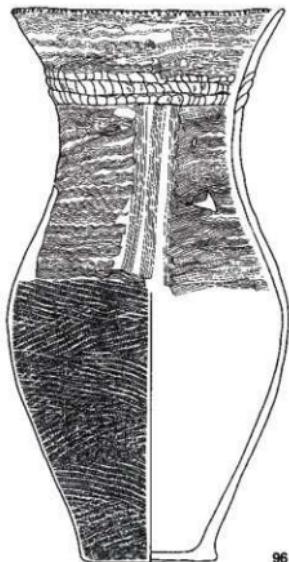
第37図 第19号堅穴建物跡実測図



0 2m

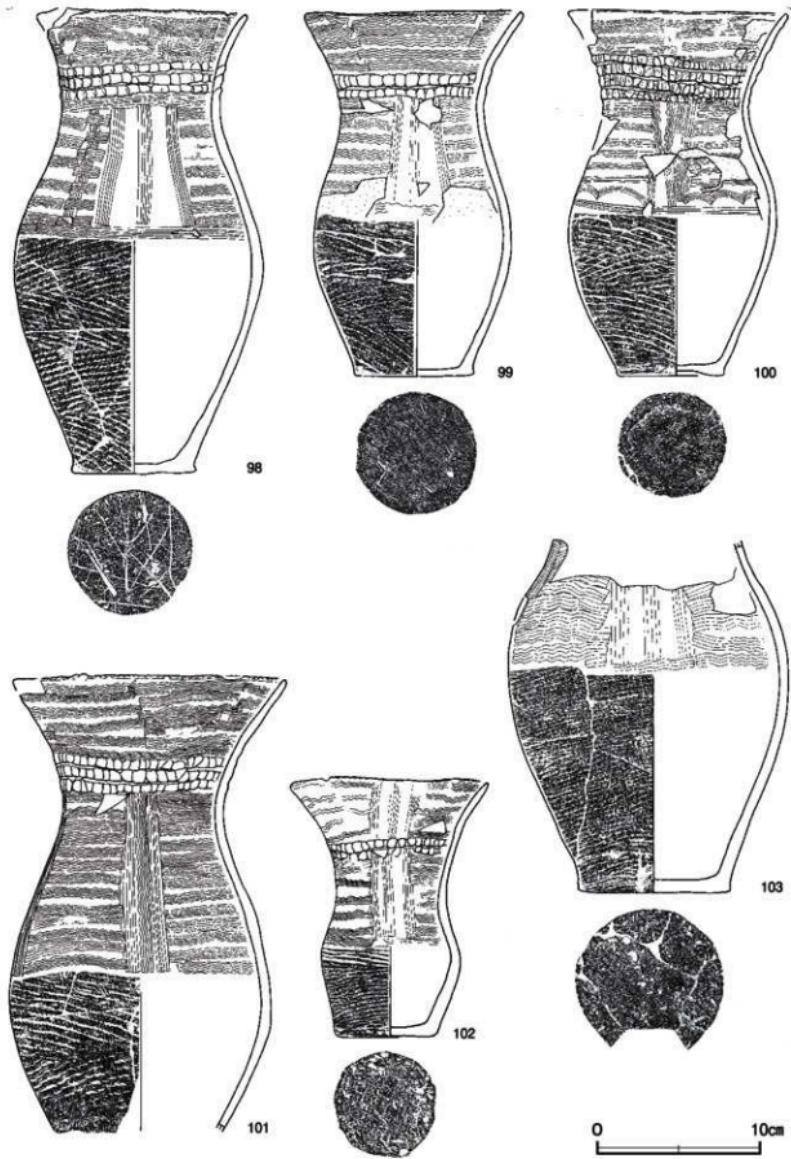


0 1m

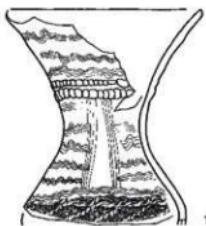


0 10cm

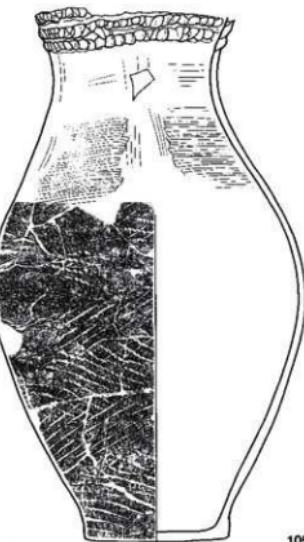
第38図 第19号竪穴建物跡実測図・出土遺物実測図



第39図 第19号堅穴建物跡出土遺物実測図(1)



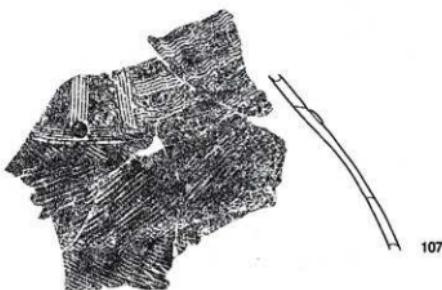
104



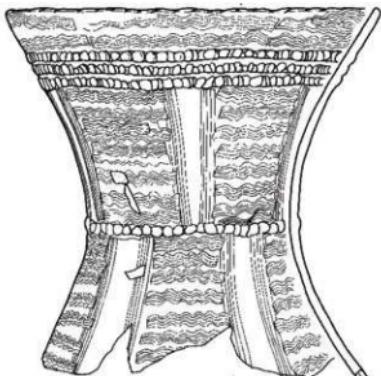
105



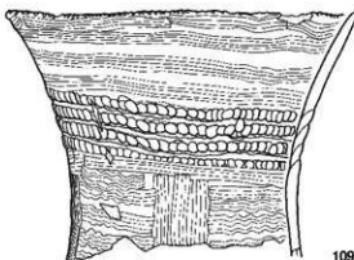
106



107



108



109



第40図 第19号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

の出土であり、二次焼成を受けた破片や風化の著しい破片も確認できる。これらは、本跡を埋め戻す際に不要な土器をまとめて廃棄したと考えられる。

第 19 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 38 ~ 40 図）

番号	種別	器種	口径	深さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
96	弥生土器	広口壺	168	345	84	長石・石英・雲母・黒色粒子	に多い黄褐色	良好	口唇部ハラ状工具による削み 石本標面状工具リストにより4区画 附加条幅不規則文による羽状構成 制芯下端指頭による調整 底面	覆土下層	75% PL16 内面薄漆痕
97	弥生土器	広口壺	(165)	334	72	長石・石英・雲母	に多い黄褐色	普通	口唇部ハラ状工具による削み 石本標面状工具リストにより3区画 附加条幅不規則文による羽状構成 制芯下端指頭による調整 底面	覆土下層	90% PL15 内面薄漆痕
98	弥生土器	広口壺	130	288	75	長石・石英・雲母・針状鉱物	に多い橙褐色	普通	口唇部ハラ状工具による削み 石本標面状工具リストによる羽状構成 附加条幅不規則文による羽状構成 底面	覆土下層	90% PL16 内面薄漆痕
99	弥生土器	広口壺	136	227	75	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部ハラ状工具による削み 石本標面状工具リストによる羽状構成 附加条幅不規則文による羽状構成 底面	床面	95% 二次焼成
100	弥生土器	広口壺	135	217	65	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口唇部ハラ状工具による削み 4本標面状工具リストによる羽状構成 附加条幅不規則文による羽状構成 底面	床面	60% 灰面一部剥がれ
101	弥生土器	広口壺	166	(284)	-	長石・石英	に多い橙褐色	普通	口唇部ハラ状工具による削み 灰褐色4带	床面	20% 外面葉
102	弥生土器	広口壺	122	163	61	長石・石英・雲母	に多い橙褐色	普通	口唇部ハラ状工具による削み 4本標面状工具リストによる羽状構成 附加条幅不規則文による羽状構成 底面	覆土下層	90% PL20 二次焼成
103	弥生土器	広口壺	-	(219)	94	長石・石英・雲母・黒色粒子	に多い黄褐色	普通	口唇部ハラ状工具による削み 4本標面状工具リストによる羽状構成 附加条幅不規則文による羽状構成 底面	床面	60% PL20
104	弥生土器	広口壺	(120)	(134)	-	長石・石英・雲母	に多い黄褐色	普通	口唇部ハラ状工具による削み 4本標面状工具リストにより3区画 附加条幅不規則文	覆土下層	50%
105	弥生土器	広口壺	-	(331)	90	長石・石英・雲母	に多い黄褐色	普通	口唇部ハラ状工具リストにより5区画 底面	覆土下層	80% 内面薄漆痕 風化後
106	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰褐色	普通	口唇部ハラ状工具による削み 折れ口縁 4本標面状工具	P 5 覆土上層	
107	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・雲母	黄褐色	普通	横走矢張り5本標面状工具 横走後ボタン状模様及び柱状構造	覆土下層	
108	弥生土器	広口壺	232	(229)	-	長石・石英・雲母	に多い黄褐色	普通	口唇部標面状工具回転押圧 5本標面状工具リストにより2~5区画	覆土下層 中層	30% PL16
109	弥生土器	広口壺	216	(156)	-	長石・石英・雲母・角閃石	に多い黄褐色	普通	口唇部標面状工具回転押圧 太い5本標面状工具リストにより4区画	床面	30% PL16

第 21 号竪穴建物跡（第 41・42 図 PL 7）

調査年度 2016 年度

位置 調査区西部の D 3 e6 区、標高 26 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 5.78 m、短軸 5.64 m の隅丸方形で、主軸方向は N - 31° - W である。壁は高さ 8 ~ 40cm で、外傾している。

床 平坦で、ほぼ全面が踏み固められている。

炉 中央部の北寄りに付設されている。長径 141cm、短径 88cm の楕円形で、深さ 9 cm の地床炉である。炉床は直状にくぼんでおり、炉石が据えられている。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

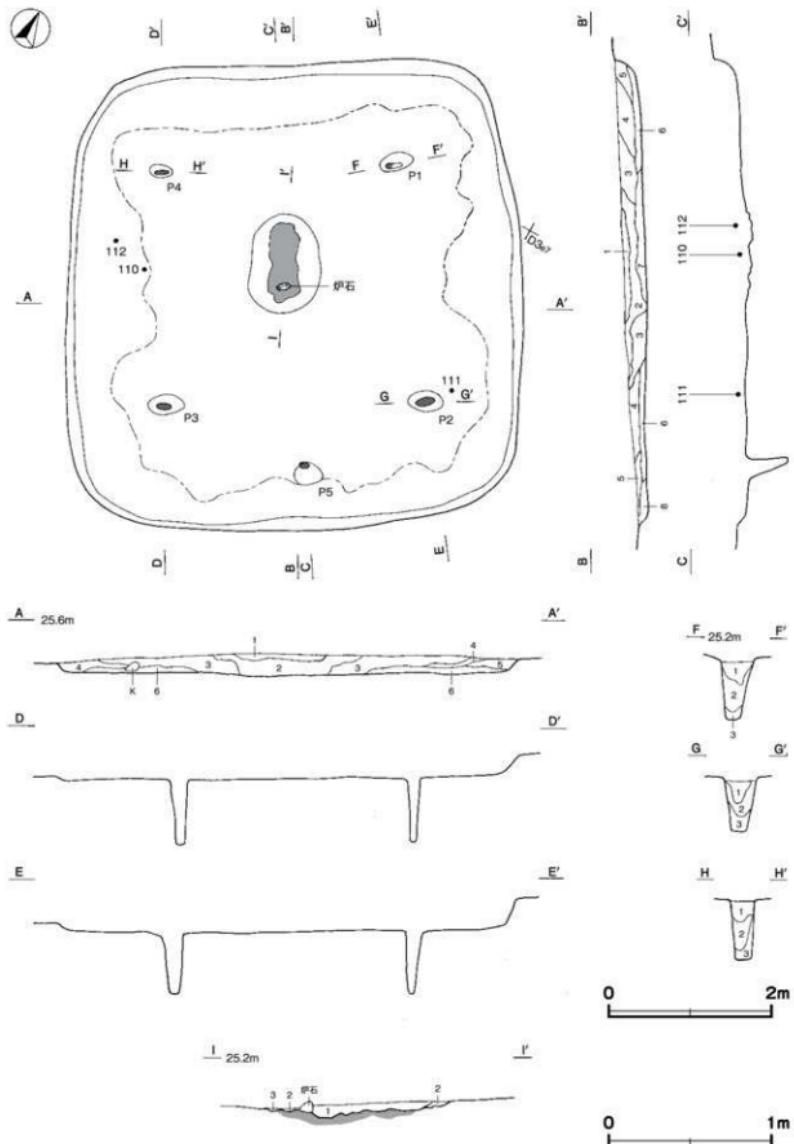
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子、炭化粒子微量 | | |

ピット 5 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 74 ~ 82cm で、規模と配置から主柱穴と考えられる。主柱穴の平面形は梢円形で、削材を柱として利用した可能性がある。覆土は柱抜き取り後の堆積である。P 5 は深さ 48cm で、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱は抜き取られている。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 黑褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |

覆土 8 層に分層できる。炉跡周辺に黒褐色土を主体とする第 7 層が堆積した後、ロームが多く含まれる第 2 ~ 6 層が埋め戻され、第 1 層が自然堆積している。



第41図 第21号竪穴建物跡実測図

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	5	褐	ローム粒子多量
2	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	6	褐	ローム粒子中量
3	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	7	黒褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量
4	褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	8	暗褐色	炭化粒子中量、ローム粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片 364 点（高坏 2、高坏 1、広口壺 361）、石器 3 点（磨石 2、炉石 1）、石核 1 点、剥片 1 点のほか、陶器片 1 点（小皿）、自然隕 1 点が出土している。土器片はほとんどが細片で、全域に散在した状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。



第42図 第21号竪穴建物跡出土遺物実測図

第21号竪穴建物跡出土遺物観察表（第42図）

番号	種別	器種	口径	深高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
110	弥生土器	広口壺	-	(29)	5.4	灰白・石英・砂多量 青白・石英・青母	にい・黄褐	普通	附加条一種（附加2条）縄文 底面木葉模	覆土下層	396	
111	弥生土器	広口壺	-	-	-	灰白・石英・ 青母	にい・黄褐	普通	口唇部縄文原体による削み	覆土下層		
112	弥生土器	広口壺	-	-	-	灰白・石英・ 青母	にい・黄褐	普通	4本櫛歯状工具	覆土下層		
113	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 青母	暗灰青	普通	5本以上の櫛歯状工具 附加条一種（附加2条） 底面にボタン状空腔貼付	覆土中 (下層)		
114	弥生土器	高坏	-	-	-	灰白・石英・ 青母・網理	にい・黄褐	普通	底面に縄文原体で弱火 5本櫛歯状工具 内面 小字	覆土中 (下層)	PL22	

第22号竪穴建物跡（第43図）

調査年度 2016 年度

位置 調査区中央部の D 310 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 8 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.35 m、短軸 4.77 m の隅丸長方形で、主軸方向は N - 74° - W である。壁は高さ 1 ~ 5 cm で、緩やかに傾斜している。

床 平坦で、炉の周辺が踏み固められている。

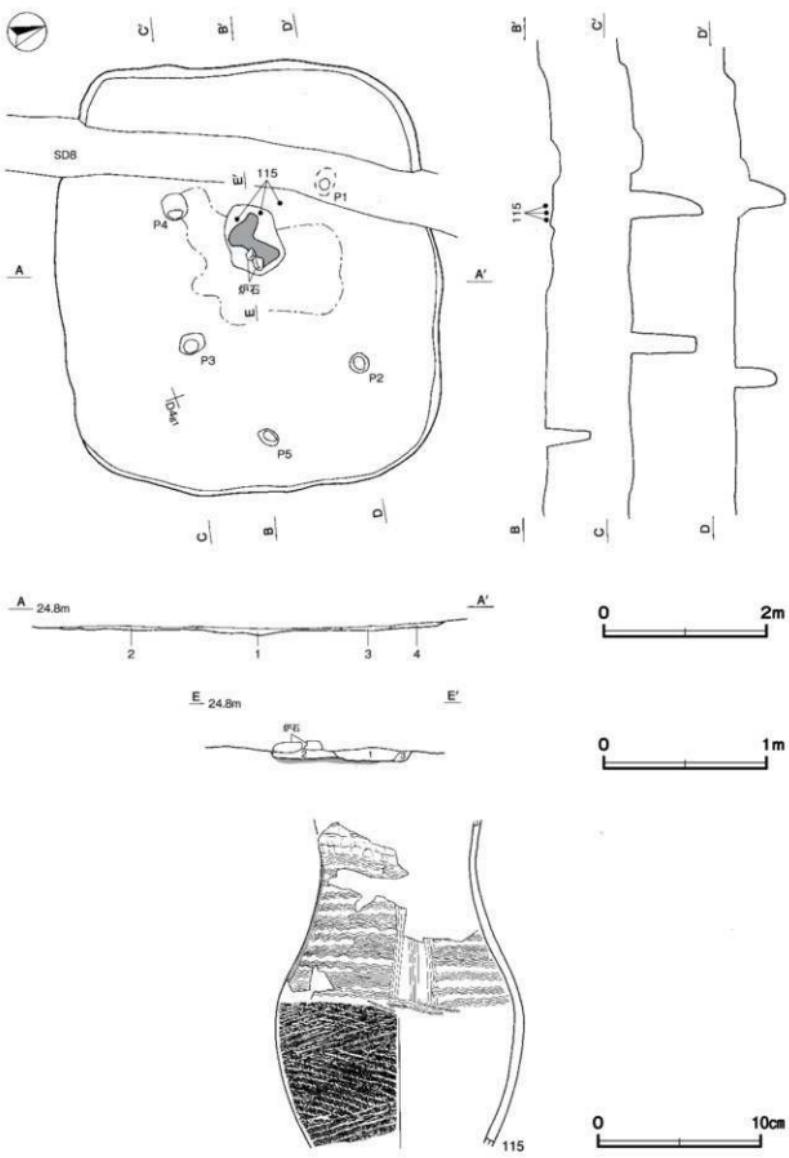
炉 中央部に付設されている。長径 109 cm、短径 67 cm の楕円形で、深さ 8 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉石が破碎され動いた状態で出土している。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1	黒褐色	燒土ブロック・ローム粒子少量	3	暗褐色	ロームブロック・燒土粒子少量
2	黒褐色	燒土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量			

ピット 5 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 49 ~ 89 cm で、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ 55 cm で、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 4 層に分層できる。炉跡周辺に黒褐色土を主体とする第 1 層が堆積した後、ロームが含まれる第 2 ~ 4 層が埋め戻されている。



第43図 第22号堅穴建物跡・出土遺物実測図

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量	3 黒褐色 灰化粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量
2 褐色 ローム粒子中量、灰化粒子少量	4 暗褐色 ロームブロック・灰化粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片 120 点（広口壺）、石器 7 点（磨石 2、敲石 4、炉石 1）、被熱繩 1 点のほか、自然繩 3 点が出土している。115 は、第 1 層中から投棄された状況で出土している。その他の土器片はほとんどが細片で、全域に散在した状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。

第 22 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 43 図）

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
115	弥生土器	広口壺	-	(20)	-	灰石・石英・ 珪藻・黒色粒子	暗褐色	普通	1本椎柄式工具、スリットにより 4 区画 各軸端不明確文による羽状構成	竪穴下層	50% 内面煮沸痕

第 23 号竪穴建物跡（第 44・45 図 PL 7）

調査年度 2016 年度

位置 調査区西部の D 3g8 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 7 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径 5.74 m、短径 5.66 m の円形で、主軸方向は N - 45° - W である。壁は高さ 12 ~ 27 cm で、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに付設されている。長径 93 cm、短径 67 cm の楕円形で、深さ 8 cm の地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・灰化粒子微量	4 暗褐色 焼土ブロック少量、灰粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム粒子微量	5 暗褐色 ロームブロック少量
3 暗褐色 烧土粒子中量、灰粒子少量	

ピット 5 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 50 ~ 60 cm で、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ 50 cm で、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第 3・4 層は埋土または崩落した埋土で、第 1・2 層は柱抜き取り後の堆積土である。

ピット土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・灰化粒子少量	3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
2 褐色 ローム粒子多量	4 にぶい黄褐色 ロームブロック多量

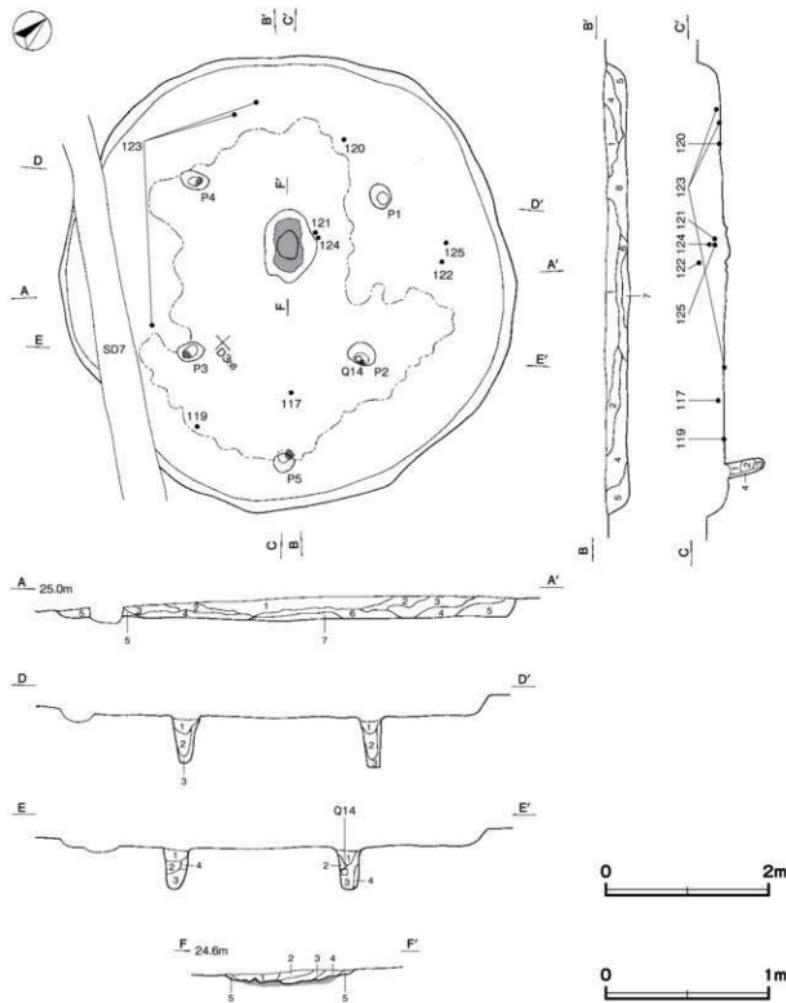
覆土 8 層に分層できる。炉跡周辺に黒褐色土を主体とする第 7 層が堆積した後、ロームが多く含まれる第 1 ~ 6 層が埋め戻されている。第 8 層は根の影響を受けている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック多量、灰化粒子少量	5 暗褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ロームブロック・灰化粒子少量	6 暗褐色 ローム粒子中量、灰化粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック中量、灰化粒子微量	7 黒褐色 ローム粒子少量、灰化粒子微量
4 暗褐色 ロームブロック少量、灰化粒子微量	8 黒褐色 ロームブロック・灰化物・焼土粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片 586 点（高坏 1、蓋 1、広口壺 583、壺 1）、石器 17 点（磨石 8、磨・敲石 1、敲石 5、砥石 1、台石 2）、被熱繩 3 点のほか、縄文土器片 2 点（深鉢）、自然繩 1 点が出土している。119・120・123 は床面から破碎された状態で出土しており、廃絶時に投棄されたと考えられる。119・120 は二次焼成を受けており、123 も同様の可能性がある。

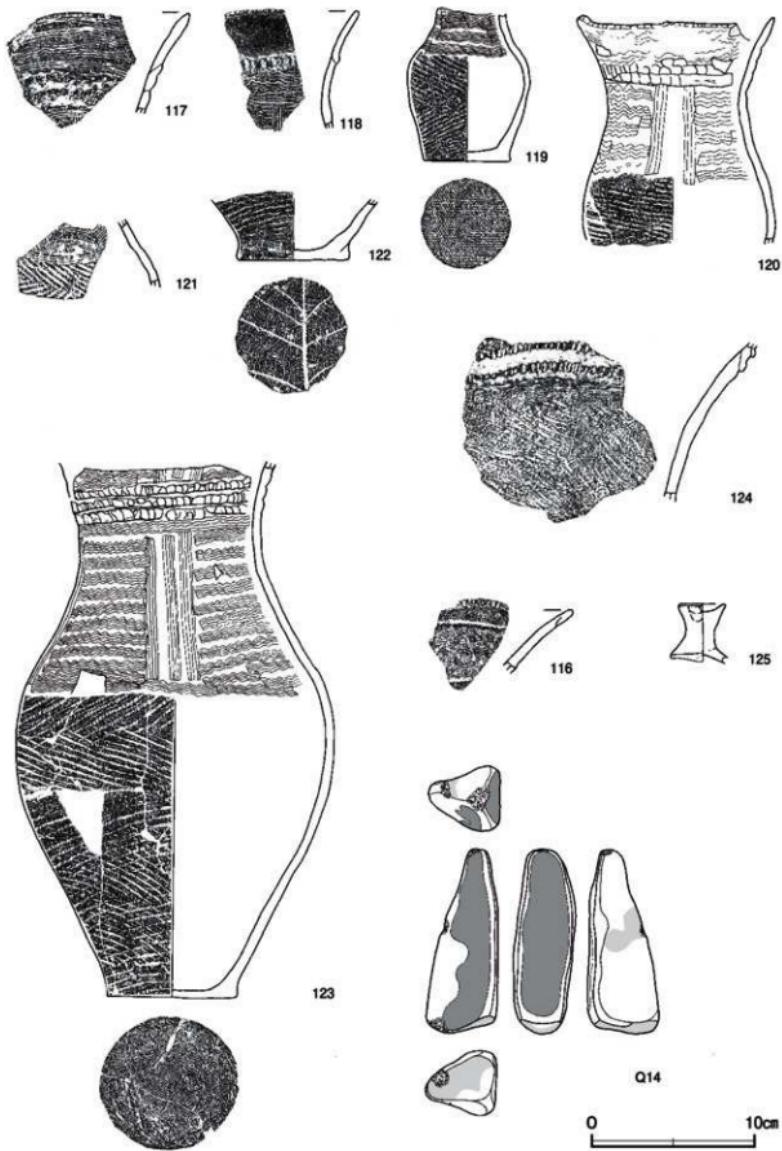
所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。



第44図 第23号竪穴建物跡実測図

第23号竪穴建物跡出土遺物観察表（第45図）

番号	種別	部種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
116	陶土器	高环	-	-	-	長石・石英・ 珪石	に赤い黄粉	普通	口部部ハラ状工具による削み 折り返し口縁	覆土中	
117	陶土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 珪石	に赤い黄粉	普通	口部繩文原体による削み 3本櫛歯状工具	覆土下層	
118	陶土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 珪石	に赤い黄粉	普通	口部繩文原体回転押圧 3本櫛歯状工具	覆土中	PL.22
119	陶土器	広口壺	-	(9.4)	5.4	長石・石英・ 珪石・黒色粒子	に赤い黄粉	普通	3本櫛歯状工具 底膨成 底凹形	床面	40% 二次焼成



第45図 第23号堅穴建物跡出土遺物実測図

番号	種別	部種	口径	壁高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
120	先生土器	広口壺	(12.1)	(13.8)	-	長石・石英・ 長石・石英・ 長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口部周縁文部厚体回転押出し、突起5単位。4本 横棒状工具、附加条純不明礫文による羽状構成。	床面	60% 二次焼成
121	先生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 長石・石英・赤色粒子	褐色	普通	日本標面伏丁目、附加条1種(附加2条)、礫文 による羽状構成。	覆土中層	
122	先生土器	広口壺	-	(3.7)	7.0	長石・石英・ 長石・石英・ 長石・石英・赤色粒子	灰褐色	普通	附加条純不明礫文、剖面下端調整、底面本葉	覆土上層	5% 底面直頂板内面直済直
123	先生土器	広口壺	-	(33.1)	8.0	長石・石英・ 黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	日本標面伏丁目、スリットにより4区画、附加 条1種(附加2条)、赤色粒子による羽状構成、底面	床面	60% 内面直済直
124	先生土器	壺	-	-	-	長石・石英・ 長石・石英・ 長石・石英・赤色粒子	浅褐色	普通	底面を構み上げて作出後ハラ状工具による削み 附加条1種(附加2条)、礫文	覆土中層	PL.22
125	先生土器	壺	-	(3.6)	-	長石・石英・ 長石・石英・ 長石・石英・赤色粒子	褐色	普通	つまみ部存、指頭による調整	覆土中層	

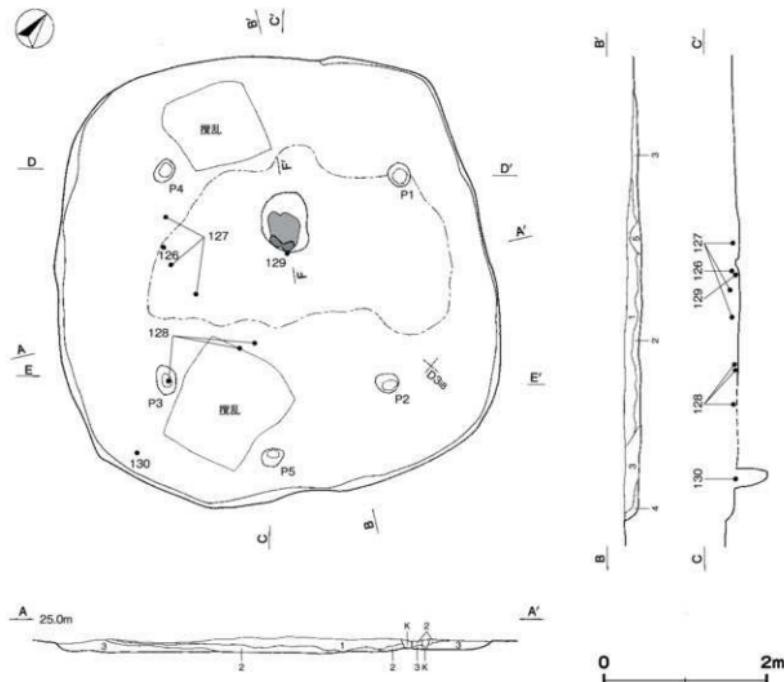
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 14	剪・磨石	11.4	4.4	4.0	219.5	鞍山岩	前面2か所、裏面3か所、赤色顔料、付着2か所	P 2 覆土中層	

第24号堅穴建物跡（第46・47図 PL.8）

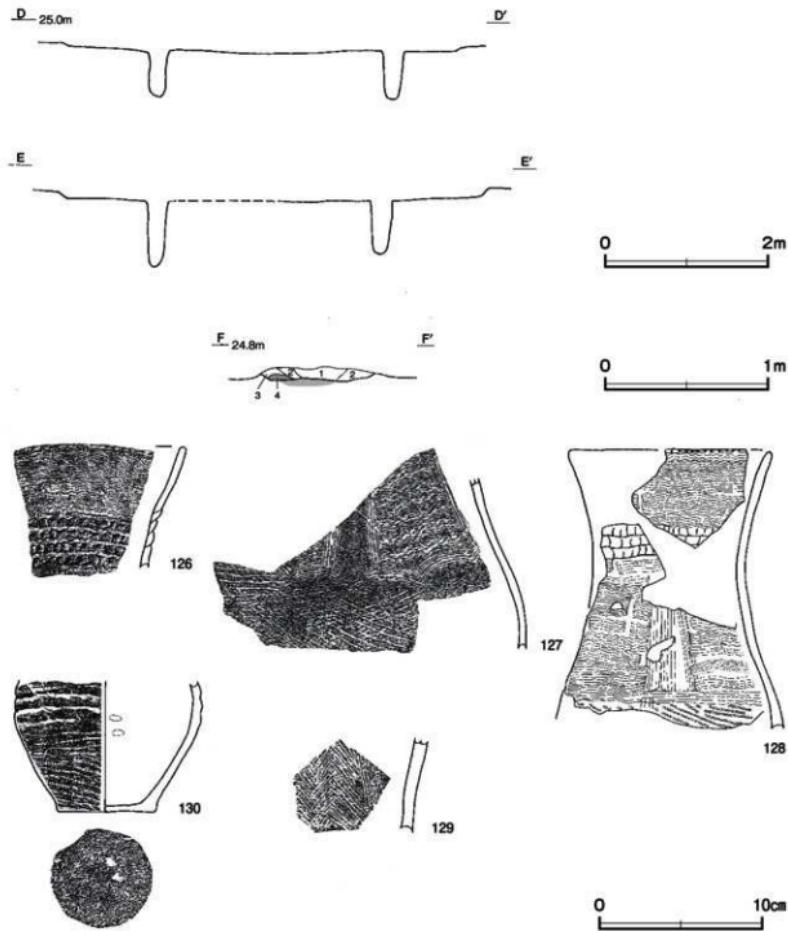
調査年度 2016年度

位置 調査区中央部のD 317区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.56m、短軸5.46mの隅丸方形で、主軸方向はN=37°-Wである。壁は高さ6~17cmで、緩やかに傾斜している。



第46図 第24号堅穴建物跡実測図



第47図 第24号堅穴建物跡・出土遺物実測図

床 平坦で、炉の周辺が踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに付設されている。長径77cm、短径57cmの楕円形で、深さ5cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けてわずかに赤変硬化している。第4層は火熱を受けていない白色粘土ブロックで、炉床面南東部を用ひるように確認できることから、廃絶時に意図的に置かれた可能性がある。

炉土層解説

- | | |
|---------|----------------|
| 1 黒 褐 色 | 燒土粒子中量、炭化粒子少量 |
| 2 細 褐 色 | 燒土ブロック、ローム粒子少量 |

- | | |
|-----------|---------------------|
| 3 黒 褐 色 | 粘土ブロック・ローム粒子、炭化粒子少量 |
| 4 灰 黄 褐 色 | 粘土ブロック多量 |

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ58～79cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ40cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 5層に分層できる。ロームが多く含まれる第2～5層が埋め戻された後、第1層が自然堆積している。

土層解説

1 黒 色	炭化粒子中量	ローム粒子少量	4 暗 棕 色	ローム粒子多量	炭化粒子少量
2 暗 棕 色	ロームブロック中量	炭化粒子少量	5 黑 棕 色	ローム粒子・焼土粒子少量	
3 暗 棕 色	ローム粒子中量	炭化粒子少量			

遺物出土状況 弥生土器片309点(広口壺)、石器1点(磨石)のほか、繩文土器片6点(深鉢)が上層の黒色土を中心に出土している。130は、床面からの出土で廃施設時に遺棄されたものと考えられる。128・129は埋め戻しの際に投棄され、126・127は窪地の状態の際に投棄または流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。

第24号竪穴建物跡出土遺物観察表(第47図)

番号	種 別	器 形	口径	器高	底径	胎 土	色 調	施成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
126	弥生土器	広口壺	~	~	~	長石・石英・ 骨母	にい(黄)色	普通	口部縦文原体押印 5本櫛歯状工具	覆土上層	
127	弥生土器	広口壺	~	~	~	長石・石英・ 骨母	灰青褐	普通	5本櫛歯状工具 工加条二種(附加1条) 縄文 による羽状構成	覆土上層	
128	弥生土器	広口壺 [124] (173)	~	~	~	長石・石英	棕	普通	口部ハラツ工具による削み 5本櫛歯状工具 削加条無縦文	覆土下層 15%	
129	弥生土器	広口壺	~	~	~	長石・石英・ 赤色粒子	にい(黄)色	普通	3本櫛歯状工具	覆土下層	
130	弥生土器	広口壺	~	(8.1)	60	長石・石英・ 骨母	にい(黄)色	普通	附加条二種(附加1条) 縄文による羽状構成 底面	床面	30% 二次焼成 内面压痕

第25号竪穴建物跡(第48・49図 PL 8)

調査年度 2016年度

位置 調査区中央部のE 3a0区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第30号竪穴建物跡を掘り込み、第17号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西側が第17号溝に掘り込まれているため、南北軸は6.92mで、東西軸は5.93mしか確認できなかった。隅丸方形と推測でき、長軸方向はN-24°-Eである。壁は高さ25～39cmで、外傾あるいは緩やかに傾斜している。

床 平坦で、炉の南側がわずかに硬化している。

炉 中央部の北寄りに付設されている。長径121cm、短径77cmの楕円形で、深さ6cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 黒 棕 色	焼土ブロック中量	炭化粒子少量	3 暗 棕 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 黑 棕 色	焼土粒子中量	ローム粒子・炭化粒子少量		

覆土 7層に分層できる。炉の周辺に黒褐色土を主体とする第7層が堆積した後、ロームが多く含まれる第5・6層が埋め戻され、第1～4層が自然堆積している。

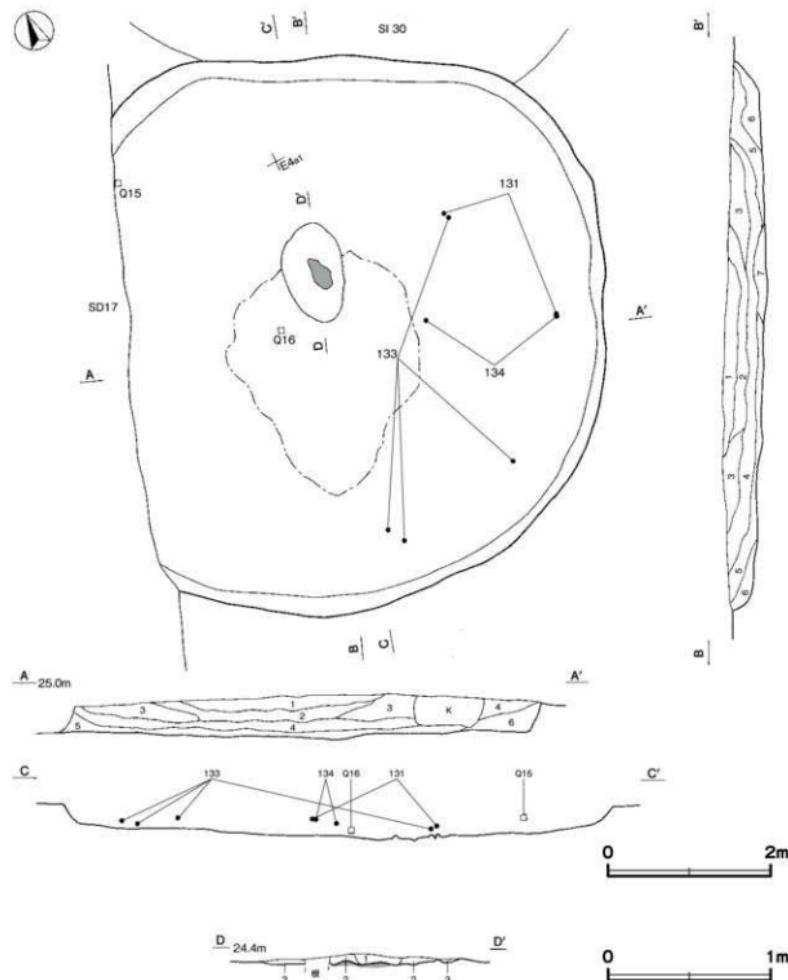
土層解説

1 黑 棕 色	ローム粒子微量	5 暗 棕 色	ロームブロック多量	赤色バミス微量
2 黑 棕 色	ローム粒子少量	6 暗 棕 色	ローム粒子中量	
3 黑 棕 色	ロームブロック微量	7 黑 棕 色	ロームブロック・焼土粒子少量	
4 黑 棕 色	ロームブロック少量			

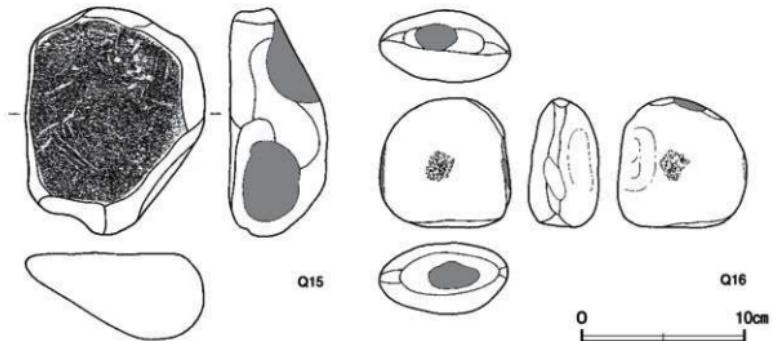
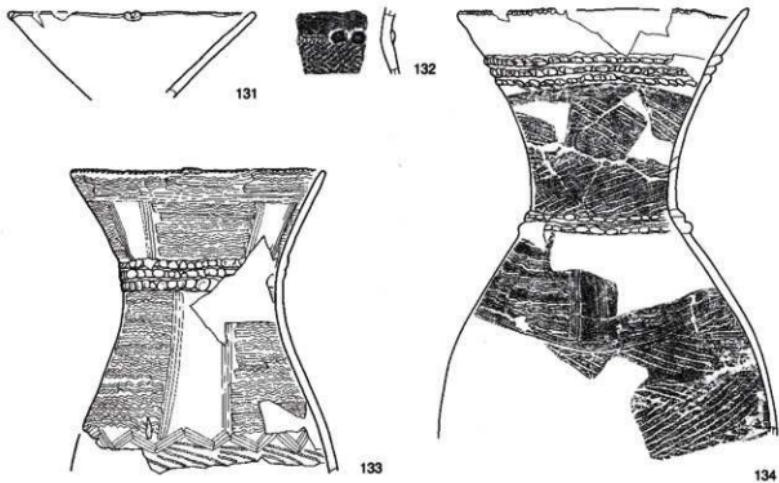
遺物出土状況 弥生土器片492点(高坏1、広口壺491)、土器片5点(堆1、壺4)、石器7点(磨石6、磨・敲石1)、被然砾1点が出土している。土器片は全城に散在した状態で出土している。131は、高坏の坏部片

がまとまった状態で出土したもので、Q15・Q16と同様に埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。133・134は覆土全域から出土した破片が接合したもので、埋め戻し後に投棄されたと考えられる。

所見 柱穴を確認していないが、遺物の出土と炉を確認したことから堅穴建物跡と判断した。時期は、出土土器から後期後半に比定できる。



第48図 第25号堅穴建物跡実測図



第49図 第25号堅穴建物跡出土遺物実測図

第25号堅穴建物跡出土遺物観察表（第49図）

番号	種別	器種	口径	縦高	底径	胎	土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
131	先史土器	高杯	15.0	(3.4)	-	灰石・石英・ 玄母	-	に赤い模 型透かしのナデ	口部部透かし4単位。外表面透かしのナデ 内面横・ 縦透かしのナデ	覆土下層	50%	
132	先史土器	広口壺	-	-	-	灰石・石英・ 玄母	灰褐色	普通	附加条一様(断面2条) 織文による羽状構成 点タシ状焼成割れ2ヶ所斜台付	覆土中		
133	先史土器	広口壺	15.5	(18.8)	-	長石・石英・ 黒色粒子	に赤い模 型透かしのナデ	普通	口部部ハラウ状工具による刷込み 焼成4単位。 口部部ハラウ状工具による刷込み 複数斜台付	覆土下層	40%	
134	先史土器	広口壺	[18.0]	(26.5)	-	長石・石英・ 玄母・黒色粒子	輕	普通	口部部織文透かしによる刷込み 附加条輪縫不明確 火炎による羽状構成 大いに本筋斜状工具	覆土中層・ 覆土中	20%	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 15	磨石	14.0	6.1	4.9	1,078.1	砂岩	磨面3ヶ所 細い溝状底 砥石転用。	覆土中層	PL.23
Q 16	磨・敲石	8.0	8.1	4.4	337.6	安山岩	磨面4ヶ所 敲打2ヶ所	覆土中層	

第27号竪穴建物跡（第50・51図 PL 8）

調査年度 2016年度

位置 調査区中央部のE 4 a5区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.68m、短軸5.33mの隅丸方形で、主軸方向はN-26°-Wである。壁は高さ18~52cmで、緩やかに傾斜している。

床 平坦で、炉とピットの周辺が踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに付設されている。長径130cm、短径92cmの楕円形で、深さ7cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉石が据えられている。炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1	暗褐色	燒土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	3	黒褐色	炭化粒子少量
2	暗褐色	燒土粒子中量、ローム粒子・灰粒子少量	4	黒褐色	ロームブロック少量

ピット 5か所。P 1~P 3は深さ73~84cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 4は深さ33cmで、配置や形状から補助柱穴と考えられる。P 5は深さ34cmで、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 7層に分層できる。跡跡周辺に黒褐色土を主体とする第7層が堆積した後、ロームが多く含まれる第2~6層が埋め戻され、第1層が自然堆積している。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・赤色バミス微量	5	暗褐色	ローム粒子中量
2	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	6	暗褐色	ロームブロック多量
3	褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	7	黒褐色	ロームブロック・炭化物少量、燒土粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量			

遺物出土状況 弥生土器片533点（高坏12、広口壺521）、土師器片3点（甕）、石器13点（磨石7、敲石1、敲・砥石1、砥石1、凹石2、炉石1）、被熟練2点のほか、自然縛2点が出土している。135、DP 9は、床面から出土しており、廃絶時に遺棄されたと考えられる。136・138~140は、覆土下層から出土しており埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。137、DP 10は、埋め戻し後の窪地に投棄または流れ込んだものと考えられる。

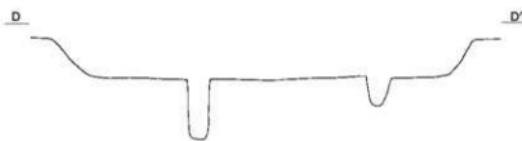
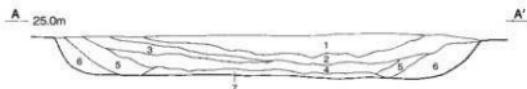
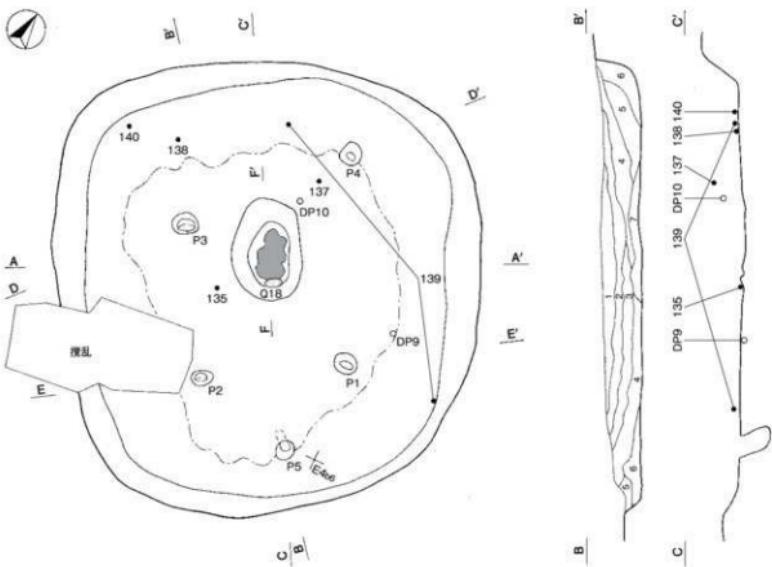
所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。

第27号竪穴建物跡出土遺物観察表（第51図）

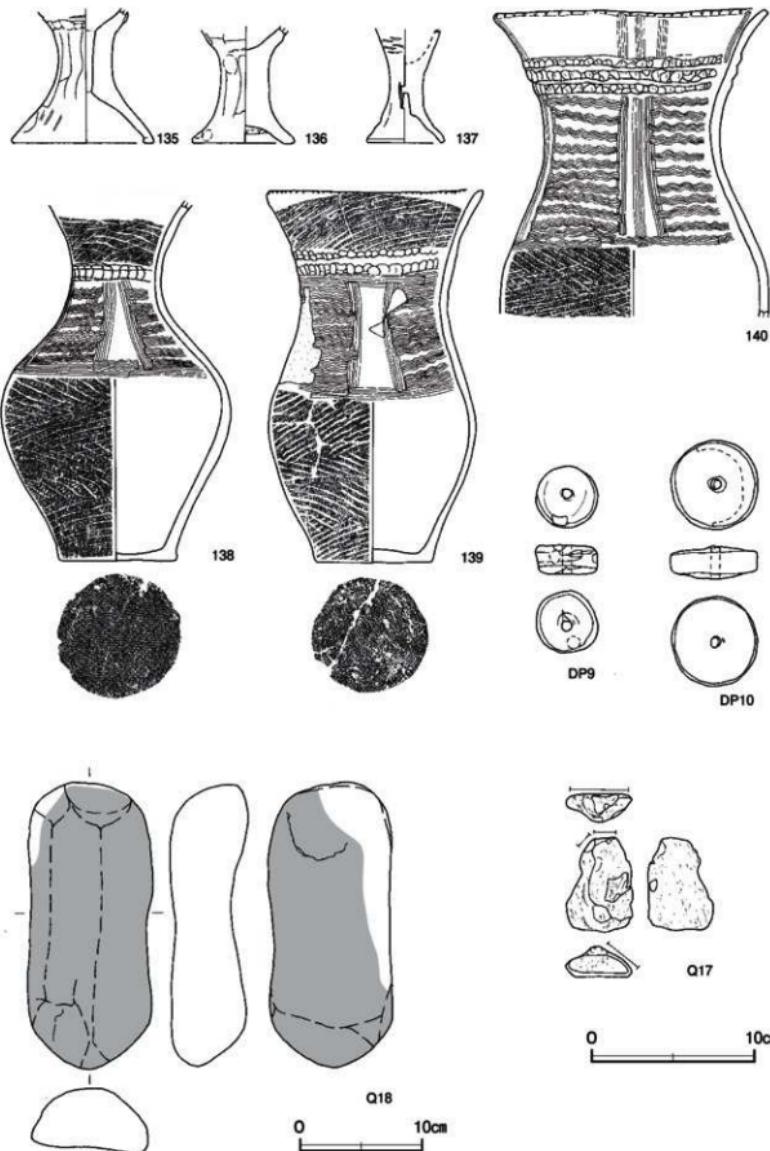
番号	種別	器種	口径	厚さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
135	弥生土器	高坏	-	(8.3)	8.6	長石・石英、赤色粒子	に赤い黄斑	普通	檻位のヘラナデ 縦部擦痕 指頭による調整	床面	30%
136	弥生土器	高坏	-	(7.2)	6.2	長石・石英、砂粒	黒褐	不良	檻位のヘラナデ 指頭による調整	覆土中(下層)	30%
137	弥生土器	高坏	-	(7.1)	4.6	長石・石英、砂粒	浅黄褐	普通	檻位のヘラナデ 横位の檻板	覆土上層	25%
138	弥生土器	広口壺	-	(22.2)	7.1	長石・石英、雲母	棕	普通	6本櫛歯状工具、スリットにより4区画 附加有り直縫	覆土下層	80% 内面漆
139	弥生土器	広口壺	13.0	23.0	7.2	長石・石英、雲母	に赤い黄斑	普通	口部はヘラ状工具による削み 6本櫛歯状工具 2本スリットにより3区画 口縁部附木条装飾(附木条) 有り直縫	覆土下層	90% 内面漆直縫
140	弥生土器	広口壺	16.9	(19.0)	-	長石・石英、雲母	棕	普通	口部はヘラ状工具による削み 6本櫛歯状工具 2本スリットにより5区画 附加垂輪輪不明縫文による直縫	覆土下層	45% 外面漆

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 9	研磨車	39	18	0.6	31.6	長石・石英、黒色粒子	棕	圓面ヘラ成形 全面ナデ調整 一方向からの穿孔	床面	PL21
DP10	研磨車	55	19	0.5	63.8	長石・石英、雲母	黒褐	上・圓面ヘラ成形 一方向からの穿孔	覆土上層	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q 17	砾石	58	4.1	1.8	6.1	鵞石	紙面4か所	覆土中(上層)	PL23
Q 18	砾石	236	105	63	22284	安山岩	火熱を受け赤変	炉火床面	



第50図 第27号竪穴建物跡実測図



第 51 図 第 27 号堅穴建物跡出土遺物実測図

第28号竪穴建物跡(第52～55図 PL 9)

調査年度 2016年度

位置 調査区南部のE 4c3区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸6.40m、短軸5.72mの隅丸長方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁は高さ8～28cmで、外傾している。

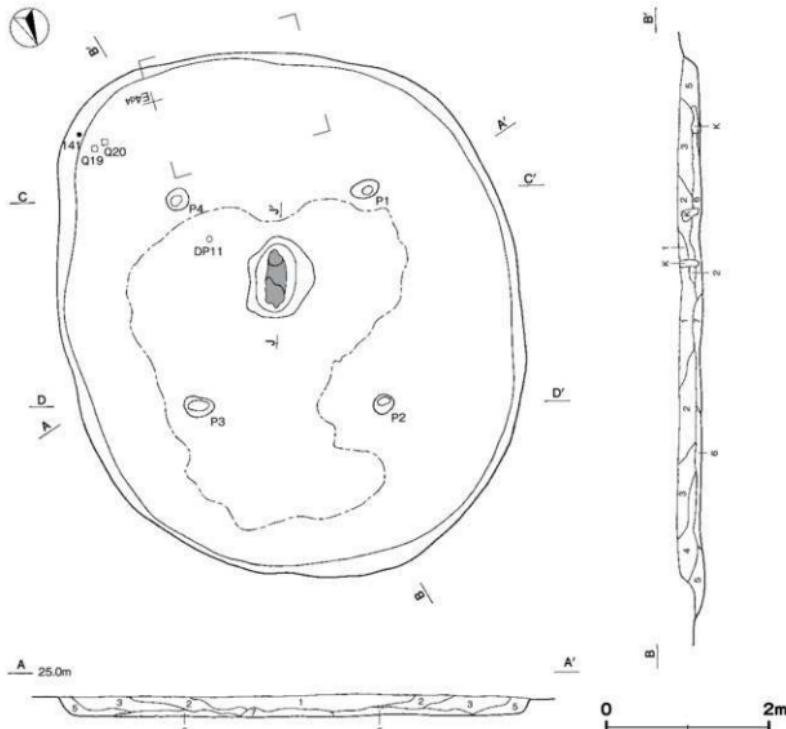
床 平坦で、炉とピットの周辺が踏み固められている。

炉 中央部の南寄りに付設されている。長径102cm、短径80cmの楕円形で、深さ9cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。

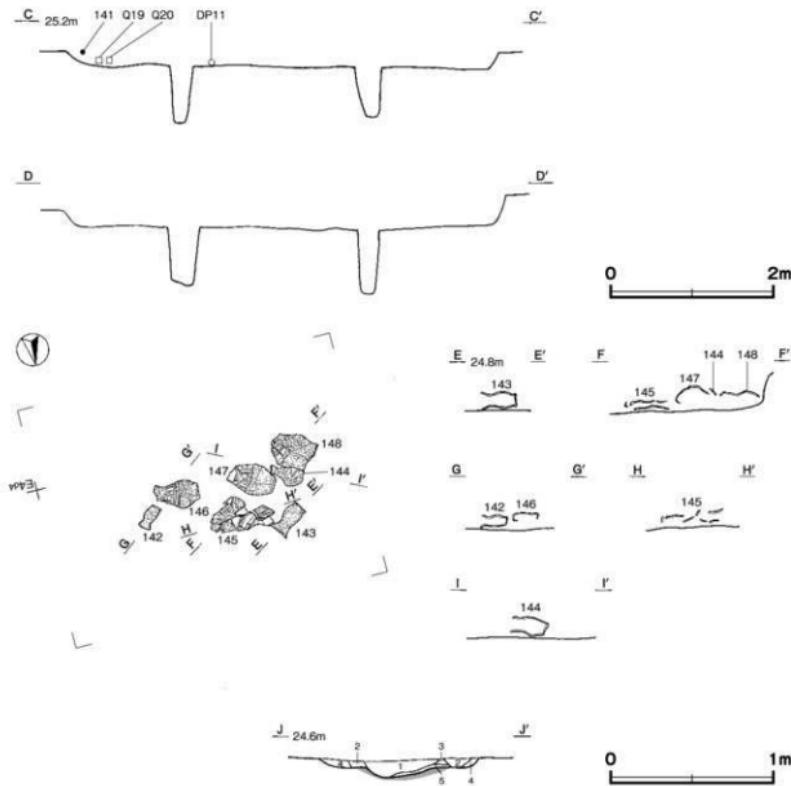
炉土層解説

1 黒 極 色 烧土粒子中量	4 暗 極 色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
2 暗 極 色 ローム粒子中量、焼土粒子少量	5 暗 極 色 烧土ブロック中量、ローム粒子、炭化粒子少量
3 黄 極 色 ローム粒子多量、焼土粒子少量	

ピット 4か所。P 1～P 4は深さ60～76cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。



第52図 第28号竪穴建物跡実測図(1)



第53図 第28号竪穴建物跡実測図(2)

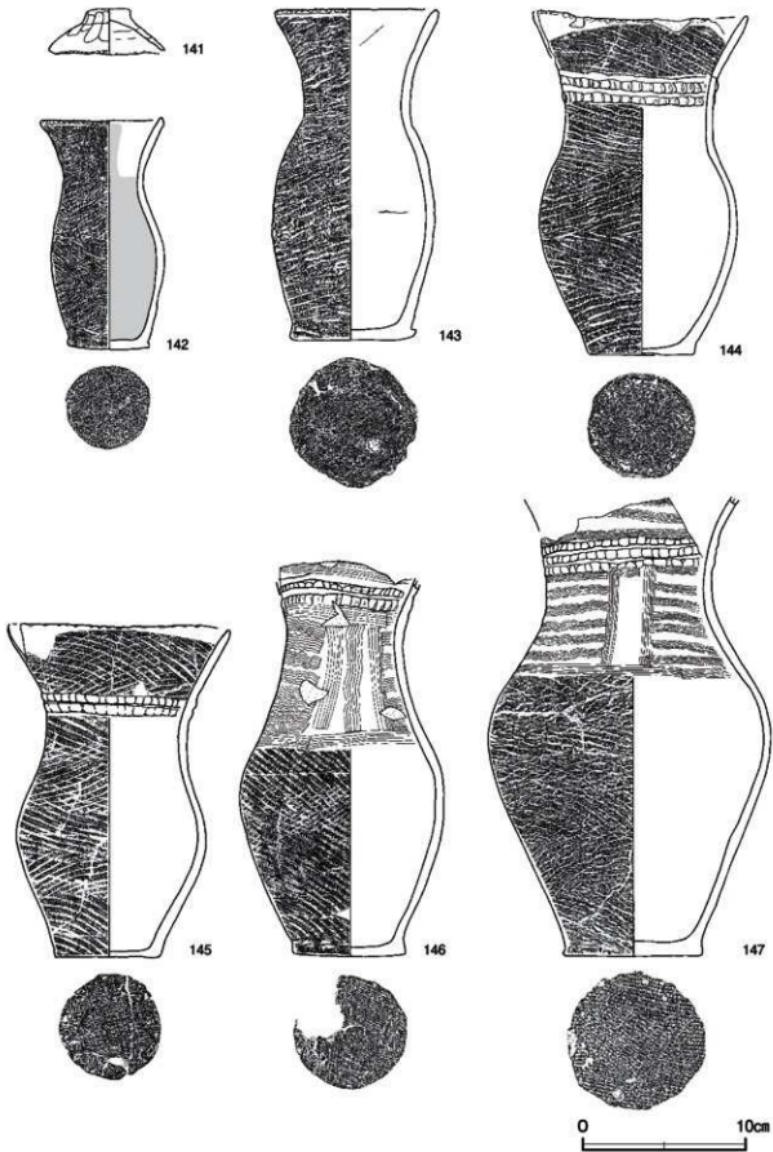
覆土 7層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

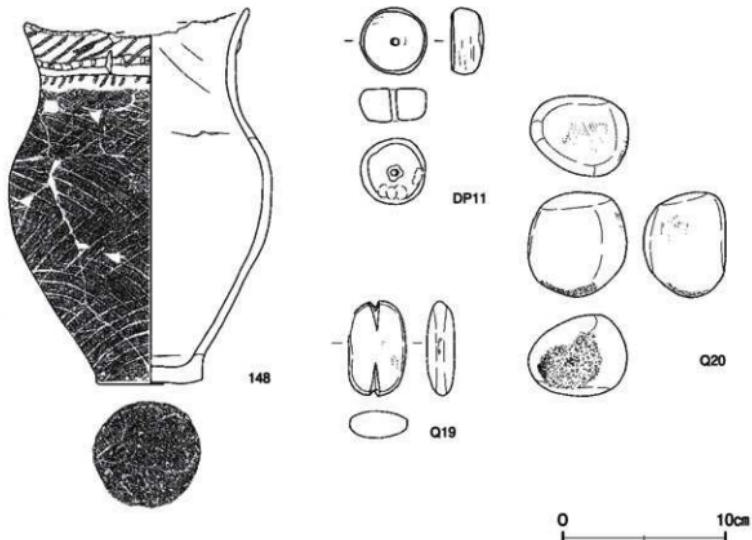
1	褐	色	ロームブロック多量、炭化粒子少量	5	暗	褐	色	ロームブロック中量
2	暗	褐	色	6	暗	褐	色	ローム粒子中量
3	暗	褐	色	7	暗	褐	色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4	暗	褐	色					

遺物出土状況 弥生土器片472点(蓋1, 高杯3, 広口壺467, 売1), 土製品1点(紡錘車), 石器7点(磨石4, 敷・磨石1, 敷石1, 石錐1), 刺片1点のほか、縄文土器片5点(深鉢)が出土している。142~148は、南壁際の床面から完形またはそれに近い形態で集中して出土しており、遺棄または埋め戻す以前に置かれたものと考えられる。141, DP11, Q19・Q20は、覆土下層から出土しており、埋め戻しの際に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。出入り口に伴う施設は確認できなかったが、炉の配置や床の状況から、出入り口は北に存在していたと考えられる。



第 54 図 第 28 号堅穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 55 図 第 28 号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)

第 28 号堅穴建物跡出土遺物観察表（第 54・55 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	
141	弥生土器	壺	7.3	2.8	-	長石・石英・雲母	に赤い黃鉄	普通	口縁部ハラナギ工具による削込み 縦肋のハラナギ	覆土下層	90% PL21	
142	弥生土器	広口壺	7.4	14.3	5.0	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部ハラナギ工具による削込み 前附加二種（附加1番上部黒色縞文による羽状構成、底面ナメ調整）	床面	100% PL17	
143	弥生土器	広口壺	9.9	20.5	7.5	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部縞文黒色回転押印 斜加条二種（附加1番）縞文を一方側 底面ナメ調整 内面赤色頬	床面	100% PL17	
144	弥生土器	広口壺	[13.2]	21.3	6.5	長石・石英・青色粒子	に赤い黃鉄	普通	口縁部縞文黒色回転押印 斜加条二種（附加1番）縞文による羽状構成 底面布目模	床面	3% PL17 底面布目模	
145	弥生土器	広口壺	13.5	20.6	6.3	長石・石英・雲母	に赤い橙	普通	口縁部縞文黒色回転押印 斜加条二種（附加1番）縞文による羽状構成 底面布目模	床面	20% PL17 底面布目模	
146	弥生土器	広口壺	-	(24.5)	7.2	長石・石英・雲母	に赤い黃鉄	去り6本網状工具具 スリットにより3区分 斜加条二種	普通	底面ナメ	床面	80% PL17
147	弥生土器	広口壺	-	(28.4)	8.5	長石・石英・雲母	に赤い橙	普通	5本網状工具具 スリットにより4区分 斜加条二種 不明縞文による羽状構成 底面布目模	床面	90% PL17 底面布目模	
148	弥生土器	壺	13.5	23.3	6.5	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部縞文黒色による削込み 口縁部斜加条二種 不明縞文、側部凹原体による羽状構成 底面ナメ	床面	90% PL17 内面青海板	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP11	結縛車	4.1	2.0	0.4	41.2	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	上面ナメナゲテ 縦・丁字ナメ調整 平面成形机	覆土下層	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 19	石鍬	5.8	3.5	1.8	(55.2)	粘板岩	切込み2か所 側缘磨耗出し 一部欠損	覆土下層	PL23
Q 20	刷・磨石	6.5	6.1	5.0	282.9	安山岩	顎面1か所 磨面2か所に擦痕	覆土下層	PL23

第29号竪穴建物跡（第56～58図 PL10）

調査年度 2016年度

位置 調査区南部のE4e5区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径5.95m、短径5.80mの円形で、主軸方向はN-38°Wである。壁は高さ22～40cmで、外傾している。

床 平坦で、壁際を除き踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに付設されている。長径88cm、短径70cmの楕円形で、深さ8cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火然を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 黒褐色	燒土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量	3 黑褐色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子少量
2 可褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量		

ピット 2か所。P1は深さ55cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P2は深さ51cmで、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 7層に分層できる。炉の北西部に黒色土を主体とする第6・7層が堆積し、全域に第5層が堆積した後、ロームブロックやローム粒子が多く含まれる第2～6層が埋め戻され、第1層が自然堆積している。

土層解説

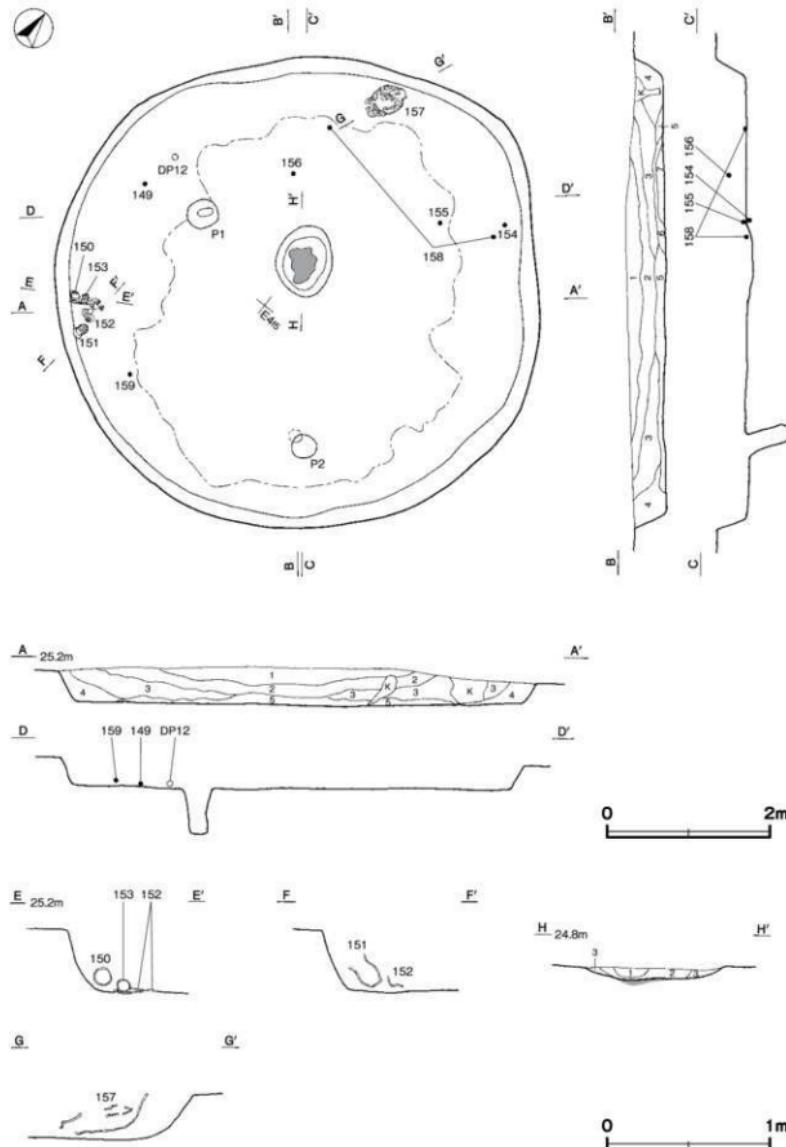
1 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
2 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子中量	6 黒褐色	ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子少量
3 暗褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	7 黒褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・燒土粒子少量
4 褐色	ローム粒子中量		

遺物出土状況 弥生土器片582点（高杯2、広口壺579、壺1）、土製品1点（紡錘車）、石器13点（磨石7、磨・敲石3、凹石1、台石1、炉石1）、チャート原石3点のほか、自然礫1点が出土している。150～153は、南西壁際の床面から4個体がまとまって出土したもので、遺棄または埋め戻す以前に置かれたものと考えられる。そのうち150・151・153は、完形またはそれに近い状態で出土しており、152は、穿孔土器で出土状況から、4点の土器を遺棄する際に意図的に破碎した可能性がある。149は西側、154・155は北東側の床面からそれぞれ完形に近い状態で出土しており、遺棄されたものと考えられる。158は大形の広口壺で、床面から器形が判別できる状態で出土しており、埋め戻しの直前に投棄または置かれたことが考えられる。157も同様に置かれた可能性がある。156・159、D.P.12は覆土中層からの出土で、埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。

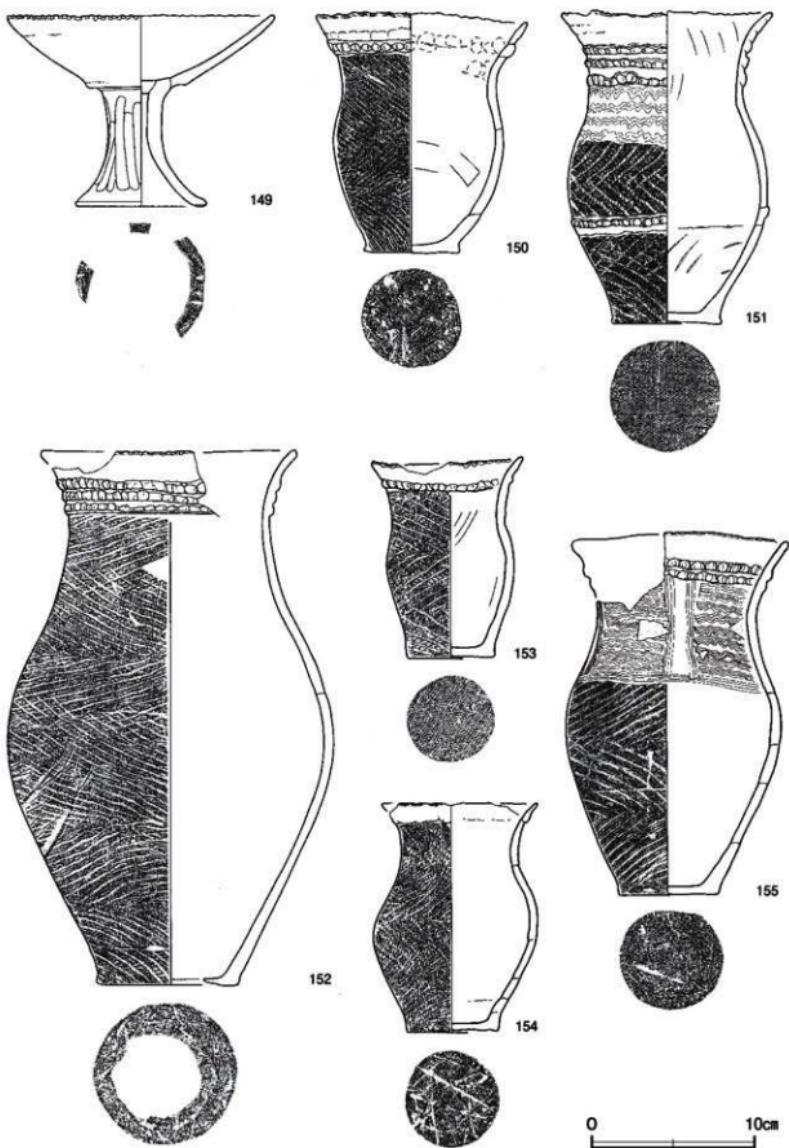
所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。

第29号竪穴建物跡出土遺物観察表（第57・58図）

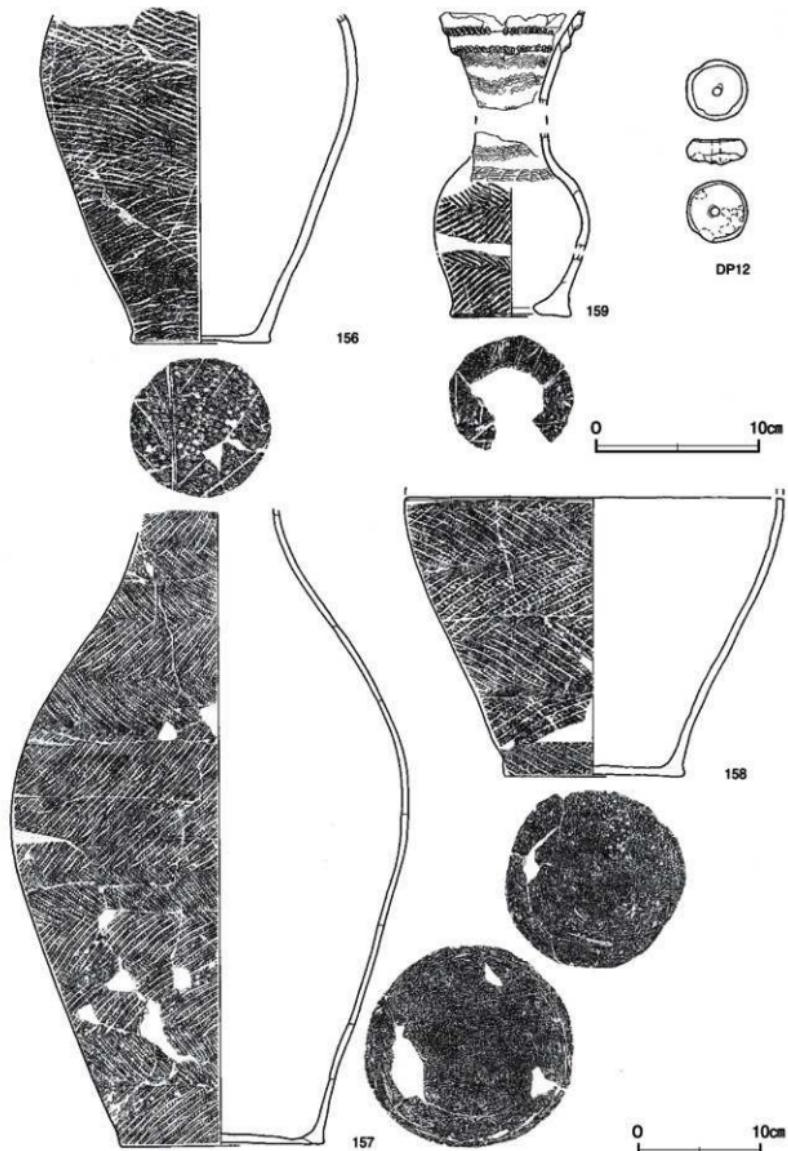
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
149	弥生土器	高杯	16.2	118	8.0	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	口唇部繩文原形回転押付 脚部縦位のヘラナデ	床面	80% PL20
150	弥生土器	広口壺	13.0	149	6.0	長石・石英・雲母・針状鉱物	にぶい黄褐色	普通	口唇部繩文原形による削み（一部削輪）、附加第一種（削輪）、附加第二種（削輪）、縦位と脚部縦位不明確な上に2～3回削輪による削み、内面削出頭張と斜位のヘラナデ	床面	90% PL18 另2箇 内面削出頭張 二次焼成
151	弥生土器	広口壺	12.8	19.4	6.8	長石・石英・雲母・針状鉱物・黒色粒子	にぶい橙	普通	口唇部繩文原形による削み（古い3本櫛削工具）、附加第一種（削輪）、縦位による羽状焼成、内面削出頭張と斜位のヘラナデ	床面	100% PL18 二次焼成
152	弥生土器	広口壺	15.6	23.1	8.7	長石・石英・赤褐色粒子	にぶい橙	普通	口唇部繩文原形による削み（新しい3本櫛削工具）、附加第一種（削輪）、附加第二種（削輪）、底面多方向へのヘラナデ	床面	60% PL18 外側削出頭張 底面空隙
153	弥生土器	広口壺	9.2	124	5.2	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部繩文原形による削み（新しい3本櫛削工具）、附加第一種（削輪）、附加第二種（削輪）、底面空隙と目隠し	床面	90% PL18 二次焼成
154	弥生土器	広口壺	[9.5]	142	5.7	長石・石英・黒色粒子	にぶい橙	普通	口唇部繩文原形による削み（新しい3本櫛削工具）、附加第一種（削輪）、附加第二種（削輪）、底面空隙と目隠し	床面	90% PL18 二次焼成
155	弥生土器	広口壺	[13.3]	22.6	6.4	長石・石英・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口唇部繩文原形による削み（新しい3本櫛削工具）、附加第一種（削輪）、附加第二種（削輪）、底面空隙と目隠し	床面	20% 二次焼成



第 56 図 第 29 号堅穴建物跡実測図



第 57 図 第 29 号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 58 図 第 29 号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)

番号	種別	部種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
156	弥生土器	広口壺	-	(204)	8.5	長石・石英・ 雲母	にぶい黄褐	普通	附加条二種(附加1条)、縄文と附加条触繩不明 縄文による羽状構成、底面木葉面中央布目机	覆土中層	30% 底面压痕 外面保 内面燒痕 21.15.18 一焼成
157	弥生土器	広口壺	-	(525)	16.9	長石・石英・ 雲母	にぶい黄褐	普通	附加条一條(附加2条)、縄文による羽状構成 内面ナダ調整	床面	40% 底面压痕 内面保 化
158	弥生土器	広口壺	-	(230)	14.7	長石・石英・ 雲母・赤色粒子・ 磁鐵	にぶい橙	普通	附加条二種(附加1条)、縄文による羽状構成 底面移目机	床面	60% 底面压痕 内面保 化
159	弥生土器	壺	-	[176]	7.5	長石・石英・ 雲母・磁鐵	にぶい黄褐	普通	直火工具 附加条一條(附加2条)、縄文による羽状構成 底面木葉面	覆土中層	60% 底面穿孔+
DP12	鋸跡車		3.8	1.5	0.5	長石・石英・ 雲母	にぶい黄褐	普通	全段下端に鋸刃工具 附加条一條(附加2条)、縄文による羽状構成 底面木葉面	覆土中層	PL.21

第30号竪穴建物跡（第59・60図 PL11）

調査年度 2016年度

位置 調査区中央部のD 4 j1区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第25号竪穴建物、第17号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.06m、短軸6.33mの隅丸長方形で、主軸方向はN-32°-Wである。壁は高さ34~50cmで、緩やかに傾斜している。

床 平坦で、壁際を除き踏み固められている。

炉 中央部の北寄りに付設されている。堆積や炉床の状況から、第6~8層を埋め戻し、南側に付設し直している。最終段階の形状は、長径90cm、短径80cmの楕円形で、深さ7cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉床面は火熱を受けて赤変硬化している。炉石が炉床面から浮いた状態で出土しており、据え直されたと考えられる。

炉土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	5	暗褐色	焼土粒子少量、粘土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子微量	6	暗褐色	炭化粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・灰微量
3	黒褐色	焼土粒子中量、炭化粒子微量	7	にぶい黄褐色	灰中量、焼土粒子・炭化粒子少量
4	黒褐色	ロームブロック少量	8	にぶい黄褐色	粘土ブロック中量、焼土粒子・灰少量

ピット 5か所。P.1~P.4は深さ54~68cmで、配置と柱あたりが確認できたことから主柱穴と考えられる。P.5は深さ31cmで、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

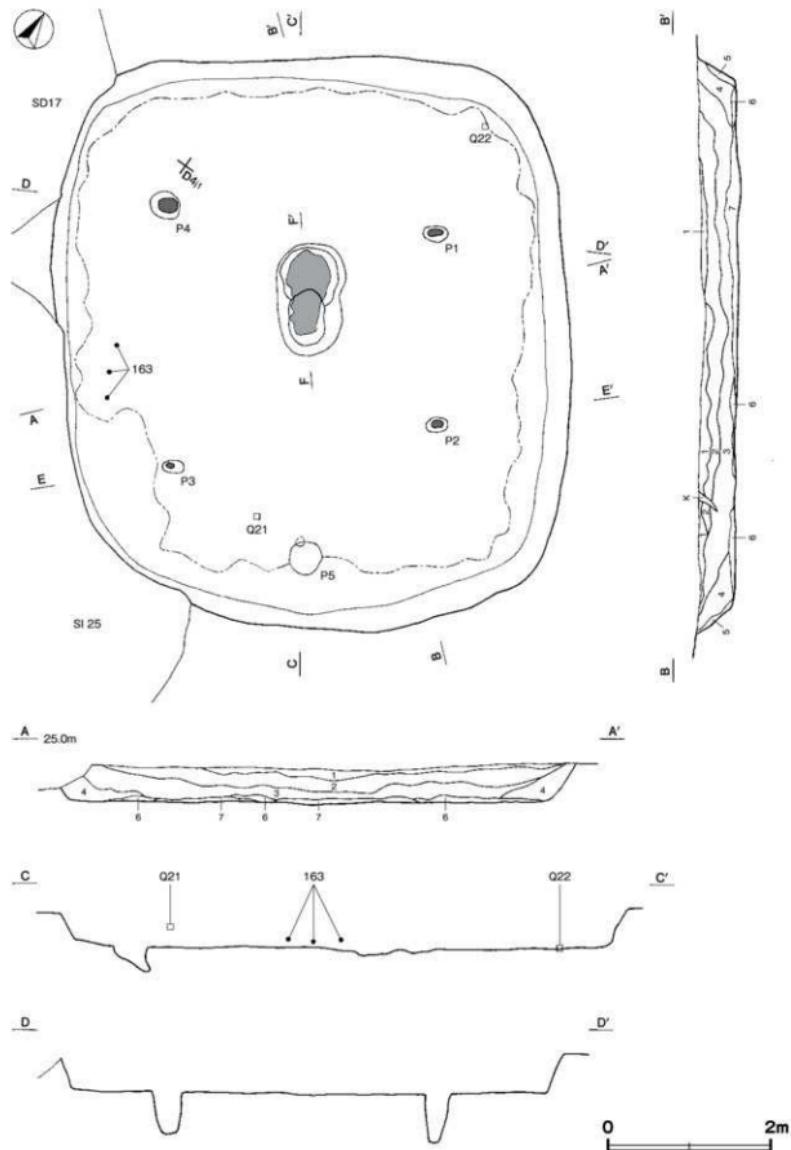
覆土 7層に分層できる。黒色土を主体とする第6・7層が堆積した後、ロームブロックが含まれる第1~5層が埋め戻されている。

土層解説

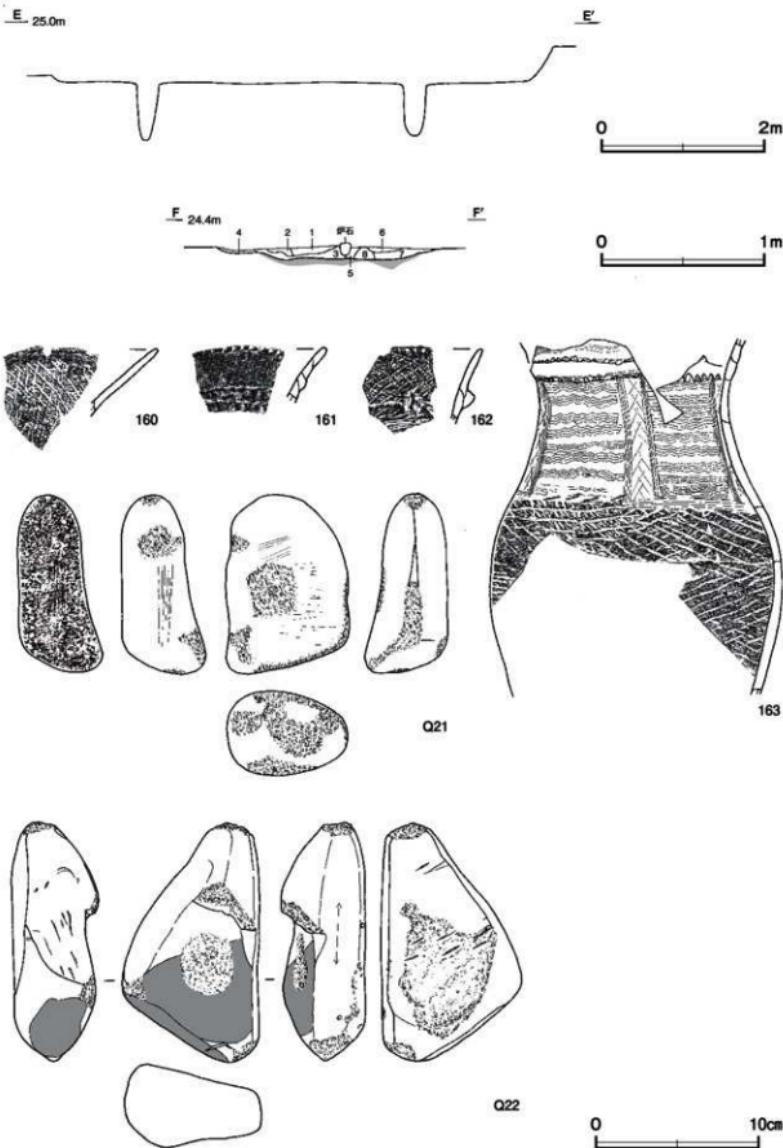
1	黒褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量	5	褐色	ロームブロック多量
2	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	6	黒褐色	ローム粒子少量
3	にぶい黄褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	7	黒色	炭化粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量
4	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量			

遺物出土状況 弥生土器片1,016点(高坏5、広口壺1,011)、土師器片6点(甕)、石器29点(磨石12、磨・敲石6、敲石1、砥・敲・磨石1、砥石6、台石2、炉石1)、被熱繩1点のほか、繩文土器片8点(深鉢)が出土している。163は、覆土中層から散在した状態で出土した破片が接合したもので、埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。Q.21・Q.22も出土層位から、同様と考えられる。そのほかの土器片も全域に散在した状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。



第59図 第30号堅穴建物跡実測図



第60図 第30号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第30号竪穴建物跡出土遺物観察表（第60図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
160	弥生土器	高杯	-	-	-	長石・石英・ 炭化粒子	に赤い黄褐色	普通	口沿部鉄文部材による削込み 附加条二種（附加 鉄文による羽状焼成）	覆土中	
161	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 炭化粒子	に赤い黄褐色	普通	口沿部ハラク工具による削込み 3本以上の柳浦 工具	覆土中 (床直上)	
162	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・ 炭化粒子	に赤い黄褐色	普通	口沿部鉄文部材による削込み 附加条二種（附加 鉄文による羽状焼成） 3本以上の柳浦状 工具	覆土中	PL.22
163	弥生土器	広口壺	-	(221)	-	長石・石英・ 雲母・黒色粒子	に赤い黄褐色	普通	口沿部鉄文部材による削込み 附加条二種（附加 鉄文による羽状焼成） 3本以上の柳浦状 工具	覆土中層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 21	鐵石	102	76	52	608.4	安山岩	前面に錐痕 鉄痕2か所	覆土上層	
Q 22	鐵・鐵・ 磨石	148	87	57	776.7	砂岩	鉄痕2か所 鐵痕6か所 磨圓3か所	覆土中層	PL.23

第31号竪穴建物跡（第61～63図 PL11・12）

調査年度 2016年度

位置 調査区南部のE 417区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.78m、短軸5.05mの長方形で、主軸方向はN-32°-Wである。壁は高さ18～34cmで、外傾している。

床 平坦で、炉の周辺及びP1周辺を除いたビットの内側が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。覆土の堆積や炉石の出土状況から、第3・4層を埋め戻し、北側に付設し直している。最終段階の形状は、径68cmの円形で、深さ6cmの地床炉である。炉床は皿状にくぼんでおり、炉石が据えられている。炉床面はそれぞれ火熱を受けて赤変硬化しており、その状況から最終段階の炉は短期間の使用と考えられる。

炉土層解説

- 1 暗褐色 燃土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子中量・燃土粒子・炭化粒子微量

3 暗褐色 燃土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量

4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

ピット P1～P4は深さ57～76cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ56cmで、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。土層の堆積状況から、柱はすべて抜き取られている。

覆土 6層に分層できる。黒褐色土を主体とする第5・6層が堆積した後、ロームが多く含まれる第1～4層が埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量・炭化粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子中量
3 暗褐色 ローム粒子中量・炭化粒子中量

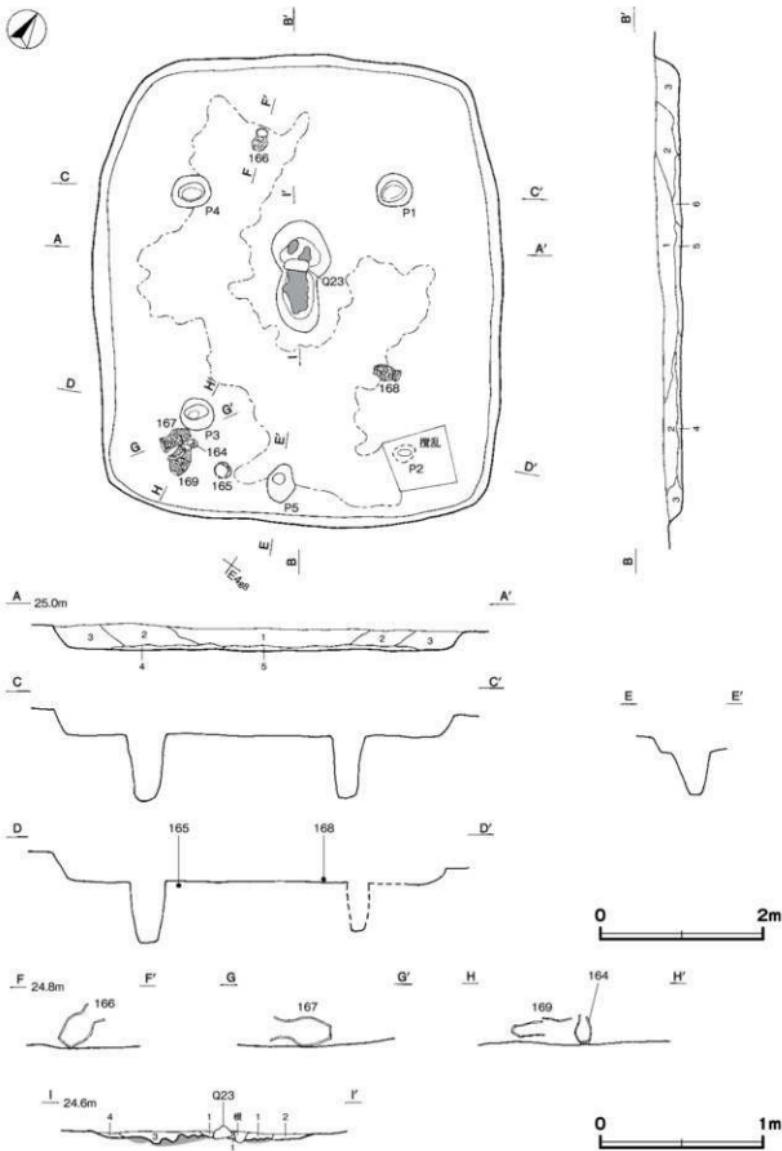
4 暗褐色 ローム粒子中量・炭化粒子少量

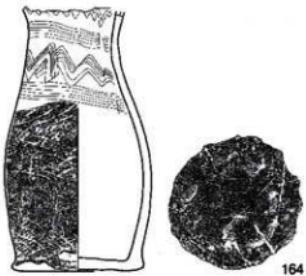
5 暗褐色 炭化粒子中量・ローム粒子・燃土粒子少量

6 黒褐色 炭化粒子中量・ローム粒子・燃土粒子少量

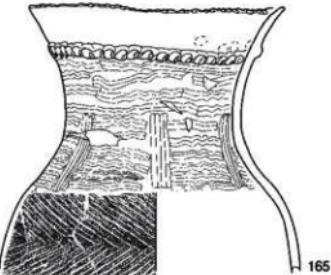
遺物出土状況 弥生土器58点（広口壺57、壺1）、石器10点（磨石7、石皿1、台石1、炉石1）が出土している。164・167・169は南コーナー付近、168は炉の南東、166は炉の北西の床面から完形で出土しており、それぞれ遺棄または埋め戻す以前に置かれたものと考えられる。165も床面から出土しているが、出土状況や残存状況から、埋め戻す際に投棄されたと考えられる。Q23は、炉石で被熱の状況から、付け替え以前から使用されていたものが、炉の移設に伴い設置し直されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。

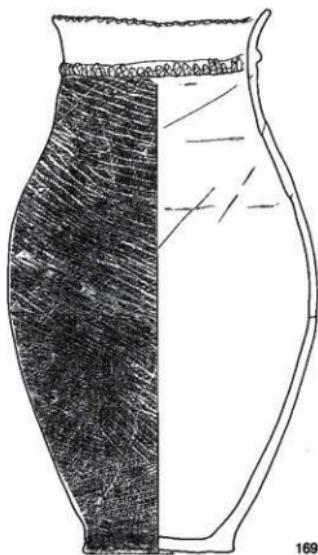




164



165



169



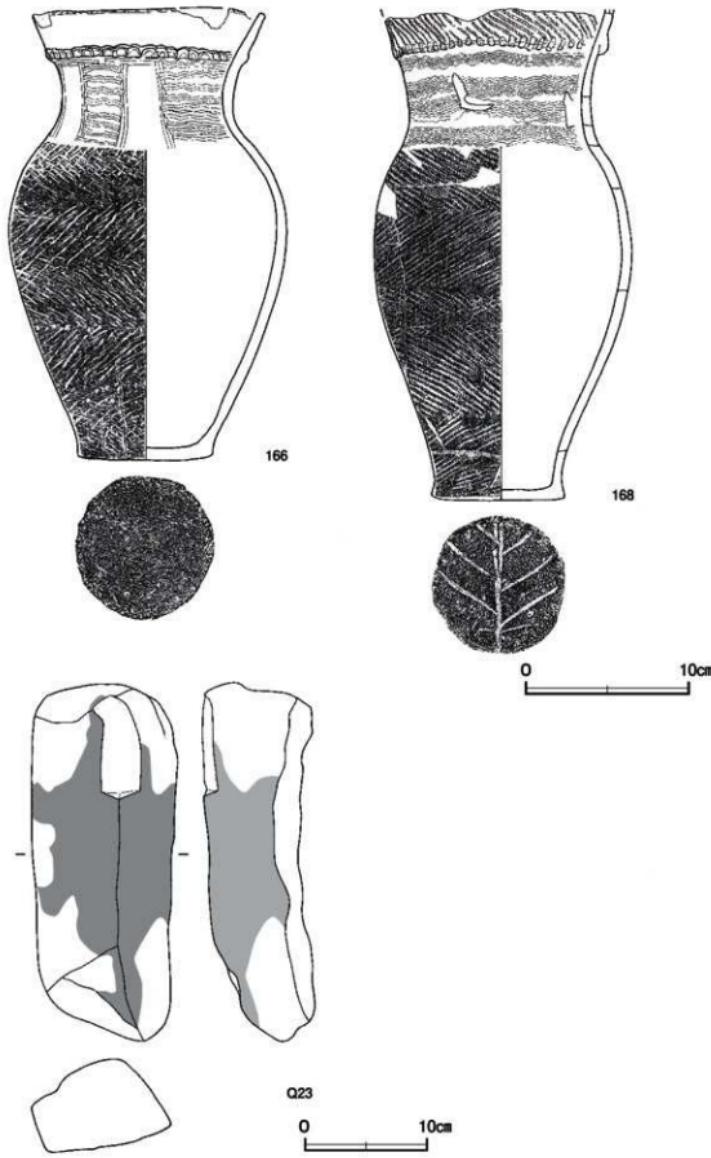
167



0

10cm

第62図 第31号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 63 図 第 31 号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)

第31号竪穴建物跡出土遺物観察表（第62・63図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
164	弥生土器	広口壺	-	(16.8)	8.2	長石・石英・ 雲母・磁隕	灰黄褐	普通	日本標示工具二種（附加1条）純文 内面黒漆底	床面	80% PL20 周辺
165	弥生土器	広口壺	15.8	(16.5)	-	長石・石英・ 雲母	浅黄褐	普通	日本標示工具二種（附加1条）純文 内面黒漆底	床面	50% 外面底
166	弥生土器	広口壺	14.7	27.8	8.4	長石・石英・ 雲母	浅黄	普通	日本標示工具二種（附加1条）純文 内面黒漆底	床面	100% PL19 内面黒漆底
167	弥生土器	広口壺	17.6	35.5	8.9	長石・石英・ 磁隕	明黄褐色	普通	日本標示工具二種（附加1条）純文 内面黒漆底	床面	85% PL19 内面黒漆底
168	弥生土器	広口壺	-	(30.4)	8.2	長石・石英・ 磁隕	褐	普通	日本標示工具二種（附加1条）純文による目状 底面素面	床面	90% PL19 外周壁 内面黒漆底
169	弥生土器	壺	13.3	33.8	9.3	長石・石英・ 雲母	にふい黄褐	普通	日本標示工具二種（附加1条）純文による目状 底面素面	床面	90% PL19 外周壁 内面黒漆底

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	等級	出土位置	備考
Q 23	炉石	29.5	11.9	7.8	4290.3	流紋岩	火熱を受け赤変	炉火床面	PL23

表3 弥生時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規格 長軸×短軸(m) (cm)	層高 (cm)	床面	埋溝	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	備考	
								王道穴	玄関入口	ビット	伊・董	窓穴			
1	D 4c2	N - 34° - W	楕丸方形	5.86 × 5.70	18 ~ 33	平底	-	4	1	-	追塗	-	人為 弥生土器、土製品 石器	後期後半	本跡→第1号竪穴 遺跡
2	C 4j0	N - 41° - E	方 形	5.52 × 5.13	35 ~ 46	平底	-	4	1	-	追塗	-	人為 自然 石器、石核、洞片	後期後半	
5	D 4a6	N - 38° - W	[椭円形]	6.57 × (5.50)	37 ~ 51	平底	-	4	-	-	追塗	-	人為 自然 石器	後期後半	
6	D 4b6	N - 60° - W	楕丸方形	3.08 × 2.75	34 ~ 53	平底	-	-	1	-	追塗	-	人為 弥生土器、土製品 石器	後期後半	本跡→ SK23, TM 1
9	C 3d6	N - 52° - W	[長方形]	5.56 × 4.56	40 ~ 45	平底	-	4	1	-	追塗	-	人為 自然 石器	後期後半	本跡→ SD 2
10	C 3g3	N - 82° - W	[楕丸形]	5.40 × (5.36)	28 ~ 55	平底	-	4	-	-	追塗	-	人為 自然 石器、土製品、 土器	後期後半	本跡→ SD 2
11	D 2e9	N - 41° - W	楕丸方形	(6.28) × 6.24	15 ~ 35	平底	-	6	1	-	追塗	-	人為 自然 土製品、石器	後期後半	
12	D 2d9	-	[三多孔形]	5.05 × (2.52)	13 ~ 22	平底	-	-	-	-	追塗	-	人為 自然 土製品、石器	後期後半	本跡→ SD 2 ~ 3
13	C 3h9	N - 23° - E	椭円形	5.53 × 4.94	18 ~ 40	平底	-	4	1	-	追塗	-	人為 弥生土器、石器	後期後半	
14	C 4j1	N - 36° - W	楕丸方形	(3.89) × 3.41	6 ~ 8	平底	-	4	-	-	追塗	-	人為 自然 石器	後期後半	
15	C 3j7	N - 37° - W	楕丸方形	4.84 × 3.96	12 ~ 36	平底	-	4	1	-	追塗	-	人為 自然 石器、土製品、 土器	後期後半	
16	D 3d4	N - 49° - W	楕丸方形	5.32 × 5.05	13 ~ 38	平底	-	4	1	-	追塗	-	人為 自然 石器	後期後半	
17	D 3g2	N - 50° - W	円 形	5.46 × 5.32	12 ~ 23	平底	-	4	1	-	追塗	-	人為 自然 石器、土製品、 土器	後期後半	
18	C 3e3	N - 34° - W	[三多孔形]	5.00 × (3.48)	30 ~ 42	平底	-	2	1	-	追塗	-	人為 自然 石器、石器	後期後半	本跡→ SD 2
19	D 3e7	N - 22° - W	楕丸方形	5.48 × 4.50	15 ~ 40	平底	-	4	1	-	追塗	-	人為 自然 石器、土製品、 土器	後期後半	本跡→ SD12
21	D 3e6	N - 31° - W	楕丸方形	5.78 × 5.64	8 ~ 40	平底	-	4	1	-	追塗	-	人為 自然 石器、石器	後期後半	
22	D 3d9	N - 74° - W	楕丸方形	5.35 × 4.77	1 ~ 5	平底	-	4	1	-	追塗	-	人為 弥生土器、石器	後期後半	本跡→ SD 8
23	D 3g8	N - 45° - W	円 形	5.74 × 5.66	12 ~ 27	平底	-	4	1	-	追塗	-	人為 弥生土器、石器	後期後半	本跡→ SD 7
24	D 3i7	N - 37° - W	楕丸方形	5.56 × 5.46	6 ~ 17	平底	-	4	1	-	追塗	-	人為 自然 石器、石器	後期後半	
25	E 3a0	N - 24° - E	[楕丸形]	6.92 × (5.93)	25 ~ 39	平底	-	-	-	-	追塗	-	人為 自然 石器、土製品、 土器	後期後半	SD30 → 本跡 → SD17
27	E 4a5	N - 26° - W	楕丸方形	5.68 × 5.33	18 ~ 52	平底	-	3	1	1	追塗	-	人為 自然 石器、土製品、 土器	後期後半	
28	E 4c3	N - 12° - E	楕丸方形	6.40 × 5.72	8 ~ 28	平底	-	4	-	-	追塗	-	人為 自然 石器、石器	後期後半	
29	E 4e5	N - 38° - W	円 形	5.95 × 5.80	22 ~ 40	平底	-	1	1	-	追塗	-	人為 自然 石器、土製品	後期後半	
30	D 4j1	N - 32° - W	楕丸方形	7.06 × 6.33	34 ~ 50	平底	-	4	1	-	追塗	-	人為 自然 石器、土製品、 土器	後期後半	本跡→ SD17, SD17
31	E 4f7	N - 32° - W	長 方 形	5.78 × 5.65	18 ~ 34	平底	-	4	1	-	追塗	-	人為 弥生土器、石器	後期後半	

(2) 堅穴遺構

第1号堅穴遺構 (第64図)

調査年度 2015年度

位置 調査区中央部のD 4 d3 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号堅穴建物跡を掘り込んでいる。

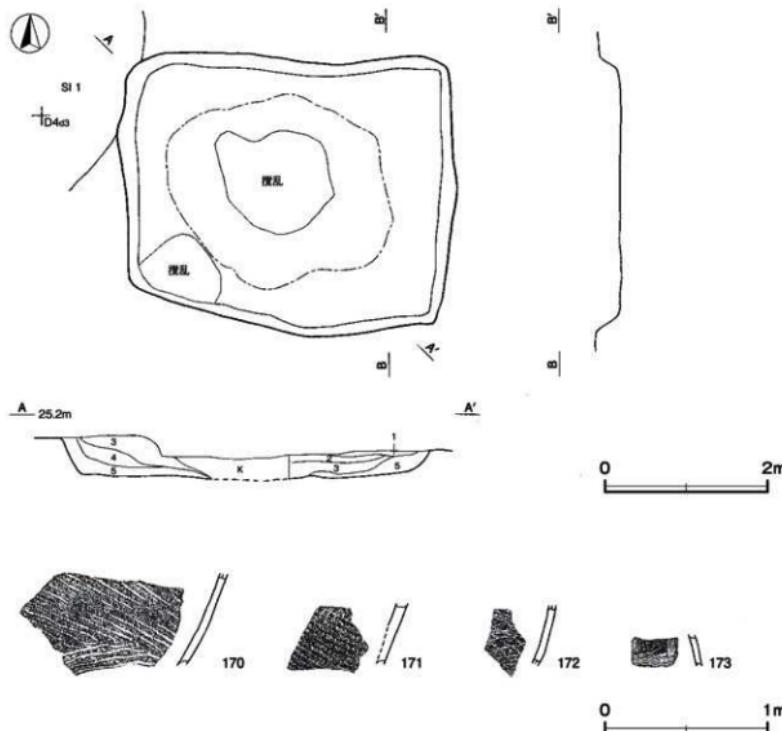
規模と形状 長軸 4.16 m、短軸 3.39 m の長方形で、長軸方向は N - 80° - W である。壁は高さ 22 ~ 48 cm で、外傾している。

床 平坦で、壁際を除いて踏み固められている。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれる第4・5層が埋め戻された後、第2・3層が自然堆積している。第1層は流入土である。

土層解説

1 黒 細 色	ロームブロック中量	4 細 細 色	ロームブロック中量
2 暗 細 色	ローム粒子少量	5 細 細 色	ロームブロック多量
3 暗 細 色	ロームブロック少量		



第64図 第1号堅穴遺構・出土遺物実測図

遺物出土状況 弥生土器片 23 点（高环 1，広口壺 22）が出土している。土器片はすべて細片で、全域に散在した状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。規模がほかの堅穴建物跡よりも小さく、柱穴や炉が確認できないことから、簡易な上屋を設けた倉庫のような施設であったことが考えられる。

第 1 号堅穴遺構出土遺物観察表（第 64 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
170	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英 長石・石英・柱子	棕	普通 附加条幅純不明繩文による羽状構成		覆土中	
171	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英 長石・石英・柱子	ぶい縞	普通 附加条一様（附加 2 級）繩文による羽状構成		覆土中	
172	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	明赤縞	普通 附加条幅純不明繩文による羽状構成		覆土中	
173	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	ぶい縞	良好 5 本櫛歯状工具		覆土中	

第 2 号堅穴遺構（第 65・66 図）

調査年度 2016 年度

位置 調査区中央部の D 3 d8 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 2.92 m、短軸 2.90 m の隅丸方形で、長軸方向は N - 41° - W である。壁は高さ 8 ~ 23 cm で、外傾している。

床 平坦で、中央部がわずかに硬化している。

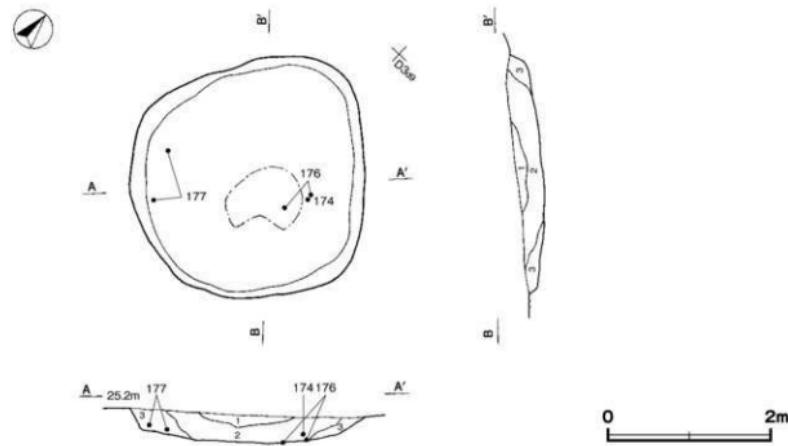
覆土 3 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれることから、埋め戻されている。

土層解説

1 深 色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
2 細 深 色 ロームブロック・炭化物少量

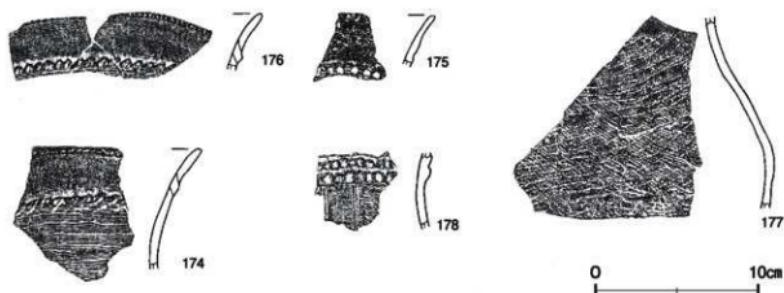
3 浅 色 ロームブロック中量

遺物出土状況 弥生土器片 138 点（広口壺）、石器 3 点（磨石、敲石、台石）、剝片 3 点のほか、縄文土器片 2 点（深鉢）、自然礫 2 点が出土している。土器片はほとんどが細片で、全域に散在した状態で出土している。



第 65 図 第 2 号堅穴遺構実測図

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。規模がほかの堅穴建物跡よりも小さく、柱穴や炉が確認できないことから、簡易な上屋を設けた倉庫のような施設であったことが考えられる。



第66図 第2号堅穴遺構出土遺物実測図

第2号堅穴遺構出土遺物観察表（第66図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
174	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・赤母	に赤い黄橙	普通	口唇部織文原体押圧・4本櫛歯状工具		覆土下層	
175	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・赤母	に赤い黄橙	普通	口唇部織文原体による削み・織文原体による帶状剥離		覆土中	
176	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・黒色粒子	浅黃橙	普通	口唇部織文原体による削み・4本以上の櫛歯状工具		覆土下層	
177	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・赤母	に赤い黄橙	普通	附加条二種（附加1条）織文による羽状構成		覆土下層	
178	弥生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・赤母	褐	普通	4本櫛歯状工具		覆土中	

表4 弥生時代堅穴遺構一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	堅 穴		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)	深さ (cm)						
1	D 4 d3	N - 80° - W	長方形	416 × 339	22 - 48	外傾	平坦	人為自然	弥生土器	後期後半	SI 1 → 本路
2	D 3 d8	N - 41° - W	構丸方形	292 × 290	8 - 23	外傾	平坦	人為	弥生土器・石器	後期後半	

(3) 土坑

第22号土坑（第67図 PL12）

調査年度 2015年度

位置 調査区東部のD 4 d9区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.74m、短径0.64mの楕円形で、長径方向はN - 41° - Wである。深さは18cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。各層にロームが含まれていることから、埋め戻されている。

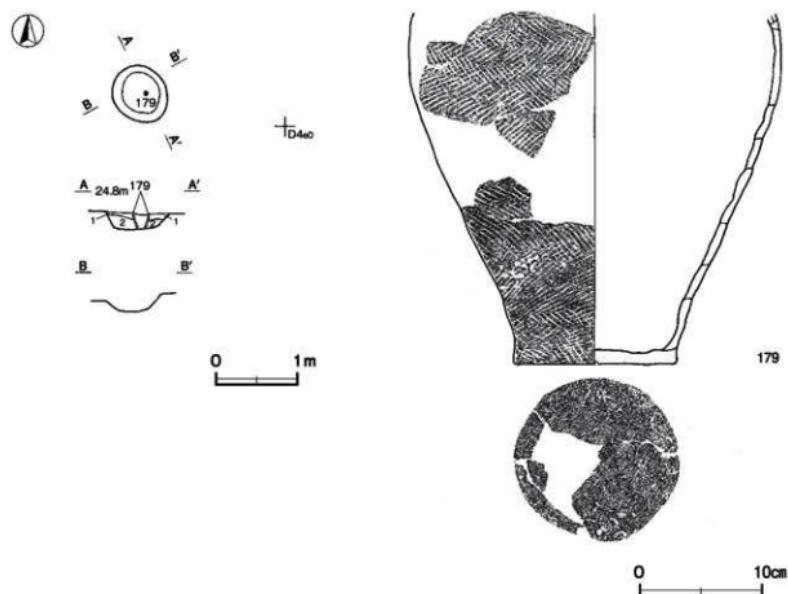
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量

2 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 弥生土器片3点(広口壺)、被熱磧1点が出土している。179は、土坑中央部に立位で埋設された状況で出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半に比定できる。上部は削平されているが大形の広口壺が埋設されており、土器棺墓の可能性がある。



第67図 第22号土坑・出土遺物実測図

第22号土坑出土遺物観察表(第67図)

番号	種別	器種	口径	深さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
179	弥生土器	広口壺	-	(28.7)	13.3	貝石・石英・ 細碎・砂多量	にい黄土	普通	附加条一種(附加2条) 縦文による羽状構成	底面	30% 一次焼成

3 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴遺構1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

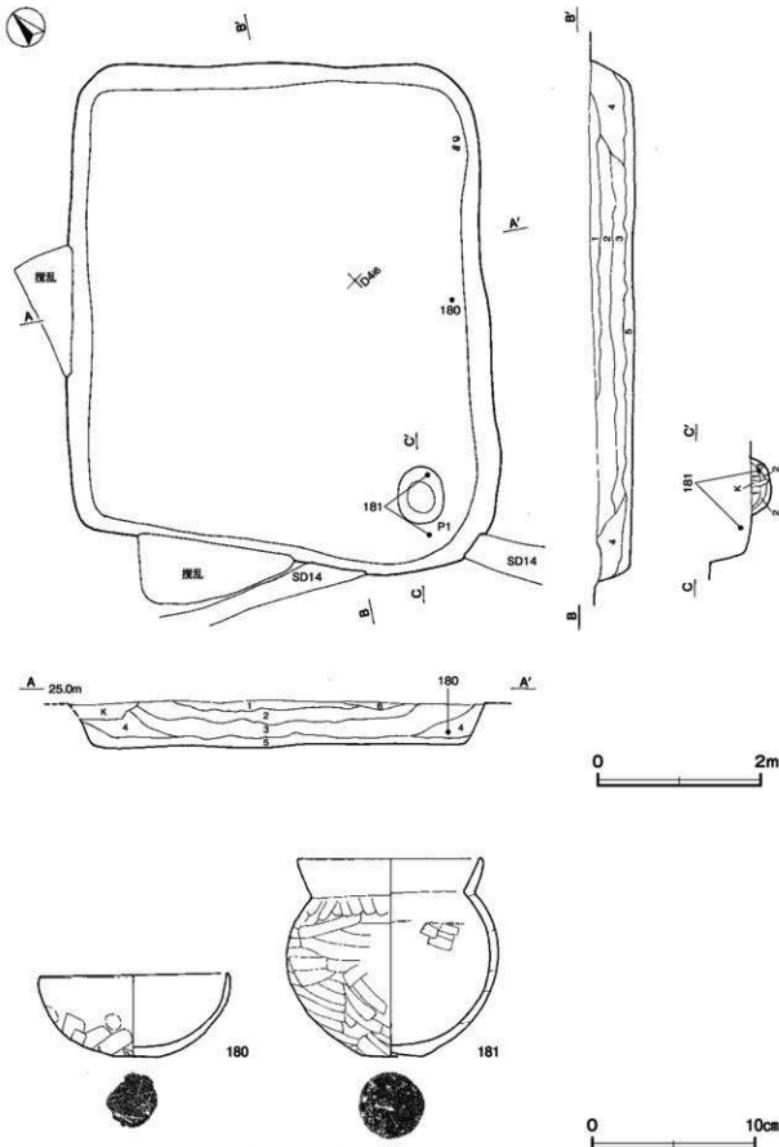
竪穴遺構

第3号竪穴遺構(第68図)

調査年度 2016年度

位置 調査区中央部のD 4 h5 区、標高 25 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第14号溝に掘り込まれている。



第68図 第3号竪穴遺構・出土遺物実測図

規模と形状 長軸 6.13 m, 短軸 5.20 m の長方形で、長軸方向は N - 47° - E である。壁は高さ 41 ~ 53 cm で、外傾している。

床 平坦である。

ピット P 1 は深さ 27 cm で、規模と配置から貯蔵穴と考えられる。第 2・3 層が竪穴の埋め戻しに伴う層で、その後第 1 層が自然堆積している。

ピット土層解説

1 黑	褐	色	ローム粒子・炭化粒子少量
2 褐	褐色	色	ローム粒子多量、炭化粒子微量
3 黒	褐	色	ロームブロック多量、炭化粒子微量

覆土 6 層に分層できる。ロームブロックが含まれる第 4・5 層が埋め戻された後、第 1~3 層が自然堆積している。第 6 層は流入土である。

土層解説

1 黑	色	ローム粒子少量	4 褐	色	ローム粒子中量、炭化粒子少量	
2 黒	褐色	色	ローム粒子少量	5 黄	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
3 黒	褐色	色	ロームブロック少量	6 黑	褐色	ローム粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土器片 42 点（高坏 3, 梗 1, 增 19, 壶 18, 小形甕 1）、炭化材 3 点（アカガシ亜属）のほか、繩文土器片 8 点（深鉢）、弥生土器片 265 点（広口壺）、石器 9 点（磨石 6, 磨・敲石 3）、石核 2 点、剥片 1 点、被熱縛 4 点、自然縛 1 点が出土している。出土遺物の大半は弥生土器片であるが、摩滅した細片が全域から出土しており、混入したものと考えられる。181 は、覆土下層及び P 1 覆土下層から出土した破片が接合したもので、炭化材同様、埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。180 は、窪地状に堆積した黒色土中から出土しており、後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀後葉に比定できる。炉や主柱穴が確認できることや、床面に踏み固められた痕跡が見られることから、建物として機能しないまま埋め戻された可能性がある。

第 3 号竪穴遺構出土遺物観察表（第 68 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
180	土器部	楕	11.9	5.2	2.8	灰石・石英・ 母貝	明赤褐色	普通	体部外・内面ヘラナデ	覆土上層	70% PL24 二次焼成
181	土器部	小形甕	11.5	12.2	3.8	灰石・石英・ 赤色粒子	にぶい緑	普通	体部外・内面ヘラナデ 内面輪積み痕 体部外 面赤褐色	覆土下層	60% PL24

4 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡 3 棟を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

竪穴建物跡

第 3 号竪穴建物跡（第 69・70 図 PL12）

調査年度 2015 年度

位置 調査区東部の D 5 i1 区、標高 24 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 3.35 m、短軸 2.98 m の長方形で、長軸方向は N - 55° - E である。壁は高さ 40 ~ 45 cm で、直立または外傾している。

床 平坦で、中央部から窓にかけて踏み固められている。

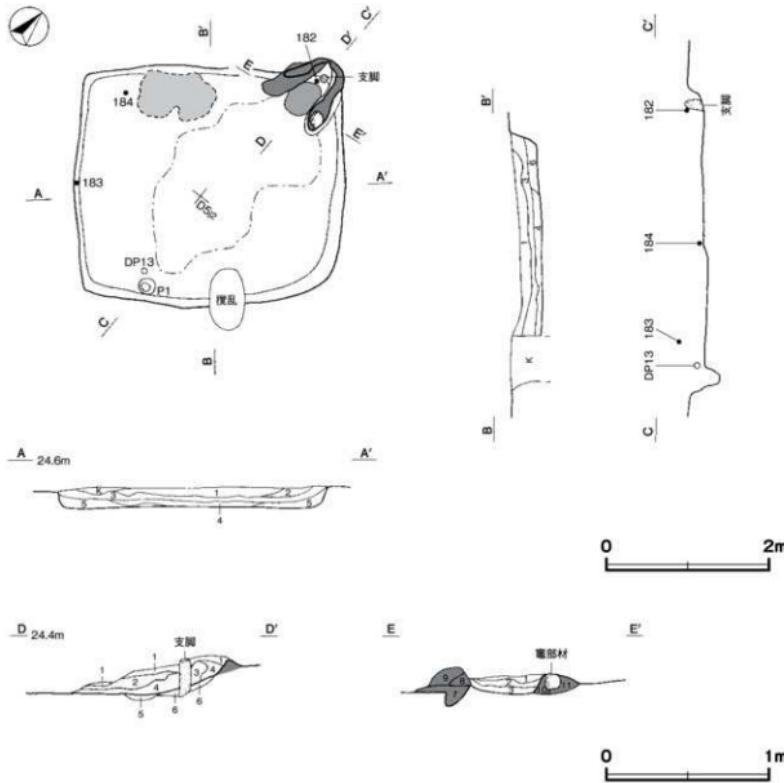
竈 北コーナーに付設されている。焚き口部から煙道部までは 82 cm、燃焼部の幅は 35 cm である。燃焼部は床面から 4 cm ほど掘りくぼめられ、第 5・6 層で埋め戻されている。この際第 6 層で支脚を固定している。袖部は、

泥質凝灰岩を芯材とし地山の上に第10・11層を積み上げて構築されている。第7～9層は崩れており、第7層が堆積している左袖の掘り込みは、芯材を固定するために掘り込まれた可能性がある。袖の内壁は火熱を受けて赤変硬化しているが、第5・6層上面の火床面はやや赤変しているものの硬化は確認できない。煙道部は壁外に29cmほど掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。第2～4層は、焼土ブロックや凝灰岩片が含まれていることから、壊されている。第1層は、建物跡の覆土である。

竪土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	7	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
2	暗褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量、ローム粒子少量	8	黒褐色	粘土ブロック・凝灰岩片中量、焼土粒子少量
3	暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量	9	黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子少量
4	暗赤褐色	焼土ブロック・凝灰岩片中量、粘土粒子少量	10	にぶい赤褐色	焼土粒子中量、粘土粒子少量
5	にぶい赤褐色	焼土ブロック中量	11	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
6	暗赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量			

ピットP1は深さ20cmで、配置から出入り口施設に伴うピットの可能性がある。堆積状況から、柱は抜き取られている。



第69図 第3号竪穴建物跡実測図

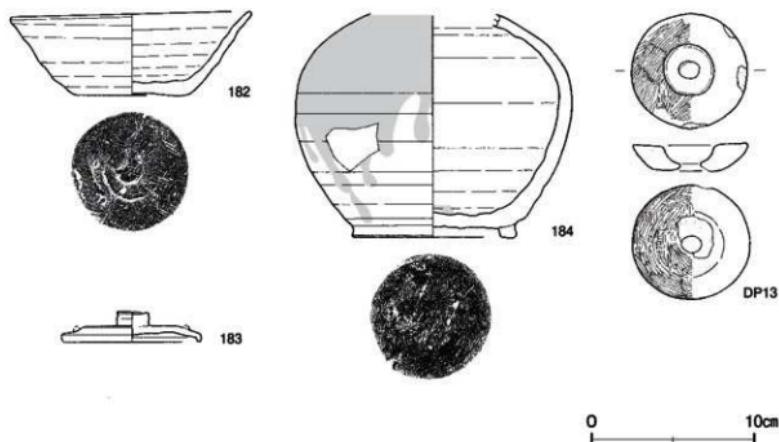
覆土 6層に分層できる。ロームが多く含まれる第3～5層が埋め戻され、第1・2層が自然堆積している。北西壁際に焼土を伴う第6層が確認できる。

土層解説

1 黒 色	ローム粒子微量	4 黒 色	ロームブロック多量
2 黒 褐 色	ローム粒子少量	5 青 褐 色	ロームブロック中量
3 青 褐 色	ローム粒子中量	6 にぶい赤褐色	焼土ブロック多量、ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片68点(甕), 須恵器片7点(坏6, 盖1), 灰釉陶器片1点(瓶), 土製品3点(紡錘車1, 不明2), 石器2点(砥石). 被熟磧7点のほか, 繩文土器片62点(深鉢), 弥生土器片64点(広口甕)が出土している。182・184・DP13は, 覆土上層及び覆土下層から出土しており, 埋め戻しの際に投棄されたと考えられる。183は, 後の投棄または混入と考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉に比定できる。北西壁際の一部ではあるが, 焼土が集中して確認できる範囲があり, 焼失建物の可能性がある。



第70図 第3号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3号竪穴建物跡出土遺物観察表（第70図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	燒 成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
182	須恵器	坏	146	53	70	灰白・石英・ 黒色粒子	灰黄	普通	底面回転へり切り後多方向の削り	覆土上層	60% 木室下窓
183	須恵器	蓋	[88]	19	-	灰白・石英・ 黒色粒子	灰	普通	天井部回転へり削り	覆土上層	70% 木室下窓
184	灰釉陶器	瓶	-	(138)	102	灰白・繩織・ 黑色粒子	灰	良好	外周輪胎	覆土下層	60% 崩倒窓

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考
DP13	紡錘車	72	17	12	(67.8)	灰白・石英・ 黒母	黒	上部斜傾の磨き 下部周縁に沿った磨き 全面黒 色處理	覆土下層	PL24

第7号竪穴建物跡（第71・72図）

調査年度 2015年度

位置 調査区東部のD 419区, 標高 24 m ほどの台地平坦部に位置している。

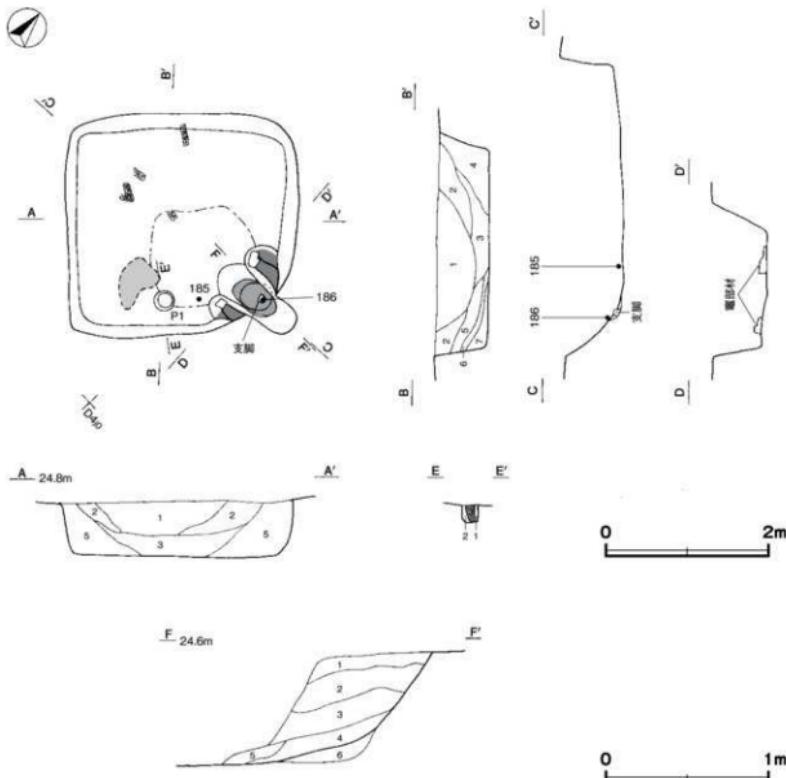
規模と形状 長軸 285 m、短軸 27.1 m の隅丸方形で、主軸方向は N - 42° - W である。壁は高さ 60 ~ 65 cm で、直立している。

床 平坦で、中央部から竪にかけて踏み固められている。

竪 東コーナーに付設されている。焚き口部から煙道部までは 111 cm、燃焼部の幅は 32 cm である。燃焼部は支脚を固定するために第 6 層を床面から 10 cm ほど埋め戻して作られている。袖部は、泥質凝灰岩を芯材とし地山の上に粘土を積み上げて構築されている。火床面は第 6 層の上面で、火熱を受けて赤変化している。煙道部は壁外に 39 cm ほど掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっている。第 2 ~ 4 層にロームブロックや焼土ブロックが含まれていることや、竪周辺には凝灰岩のブロックが散在していること、支脚が第 6 層より上に延びていないことから壊されている。第 5 層は天井の崩落で、第 1 層は竪が壊された後の建物跡の覆土である。

竪土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量	4 暗褐色	焼土粒子多量、ローム粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子中量、炭化 粒子少量	5 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量
3 暗褐色	炭化物・焼土粒子中量、ロームブロック少量	6 黄褐色	ロームブロック・炭化粒子少量



第 71 図 第 7 号竪穴建物跡実測図

ピット P 1 は深さ 21cmで、配置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第 1・2 層は埋土、第 3 層は柱痕跡である。

ピット土層解説

- | | |
|------------------------|--------------------|
| 1 細褐色 ロームブロック少量 | 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 細褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | |

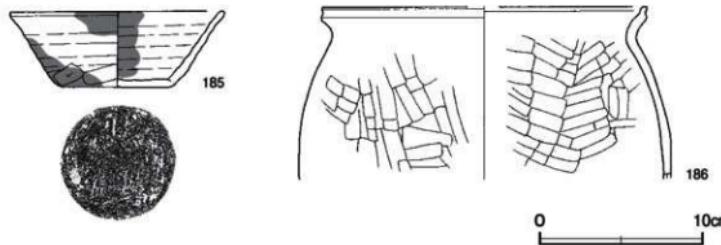
覆土 7 層に分層できる。ロームブロックが含まれる第 3~7 層が埋め戻され、第 1・2 層が自然堆積している。南東壁際に焼土を伴う第 5・6 層が確認できる。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 黑褐色 ロームブロック多量、焼土粒子少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 | 6 にぶい赤褐色 焼土ブロック・炭化物中量、ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 4 褐色 ロームブロック中量、炭化物少量 | |

遺物出土状況 土師器片 43 点(甕), 須恵器片 7 点(坏 5, 盖 2), 土製品 1 点(支脚), 石器 10 点(磨石 5, 磨石 2, 敲石 2, 台石 1), 炭化材 5 点。被熱融 21 点のほか、縄文土器片 28 点(深鉢), 弦生土器片 56 点(広口壺)が出土している。185 は、床面から完形で出土しており、遺棄されたものと考えられる。186 は、甕の覆土中層から破片の状態で出土しており、甕を壊す際に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。焼土や炭化材が確認できることから焼失建物の可能性がある。



第 72 図 第 7 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 7 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 72 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土地点	備考
185	須恵器	坏	13.1	4.8	7.0	長石・石英・雲母・磁鐵	灰黄	普通	体部下端手持ちへラ削り 底面一方向のへラ削り	床面	100% PL24 100% PL25 埋分層 切羽層
186	土師器	甕	20.0	10.7	-	長石・石英・黒色粒子	明赤褐	普通	口縁部内外面横手ナギ 体部外面面・斜位のナギ 内面側・斜位のナギ	甕覆土中層	10%

第 8 号竪穴建物跡 (第 73・74 図 PL13)

調査年度 2015 年度

位置 調査区東部の D 5g3 区、標高 24 m ほどの緩斜面に位置している。

重複関係 第 19 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 292 m、短軸 280 m の方形で、長軸方向は N - 79° - E である。壁は高さ 49 ~ 60cm で、外傾または緩やかに立ち上がっている。

床 平坦で、境界を除き踏み固められている。

■ 南東コーナーに付設されている。焚き口部から煙道部までは55cm、燃焼部の幅は47cmである。燃焼部は床面から4cmほど掘りくぼめられている。袖部は、深さ6cmほどの掘り込みに、荒く削って形を整えた安山岩片を設置し第8層で固定した後、外側に第6・7層を積み上げ構築されている。安山岩片の上部には187・188が横位に連なった状態で出土しており、焚き口の天井部を構成していたものと考えられる。火床面は、赤変硬化しておらず明確ではない。煙道部は壁外に41cmほど掘り込まれ、燃焼部から緩やかに立ち上がっている。第1～3層が天井部材や内壁崩落土、煙道部からの流入土であることから、自然崩壊したものと考えられる。第5層は、抜き出された炭が集積した層である。

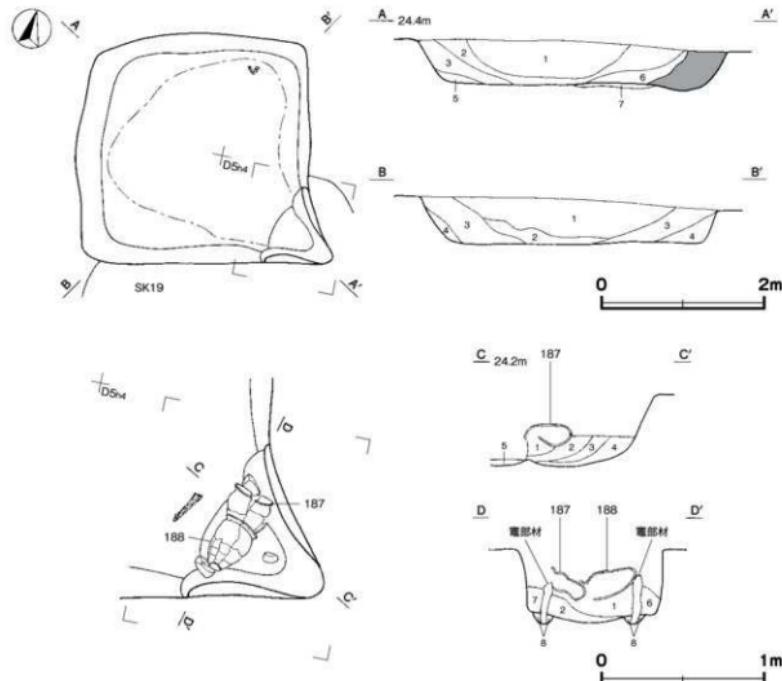
■ 土層解説

1	暗褐色	色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量	5	黒褐色	色	炭化物中量、ローム粒子・燒土粒子少量
2	暗褐色	色	ロームブロック・燒土ブロック少量	6	褐色	色	粘土ブロック・ローム粒子少量
3	暗褐色	色	ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子少量	7	暗褐色	色	ローム粒子・粘土粒子少量
4	暗褐色	色	燒土ブロック・炭化物少量	8	暗褐色	色	ロームブロック少量

■ 覆土 7層に分層できる。ロームブロックが含まれる第2～6層が埋め戻され、第1層が自然堆積している。第7層は貼床の構築土である。

■ 土層解説

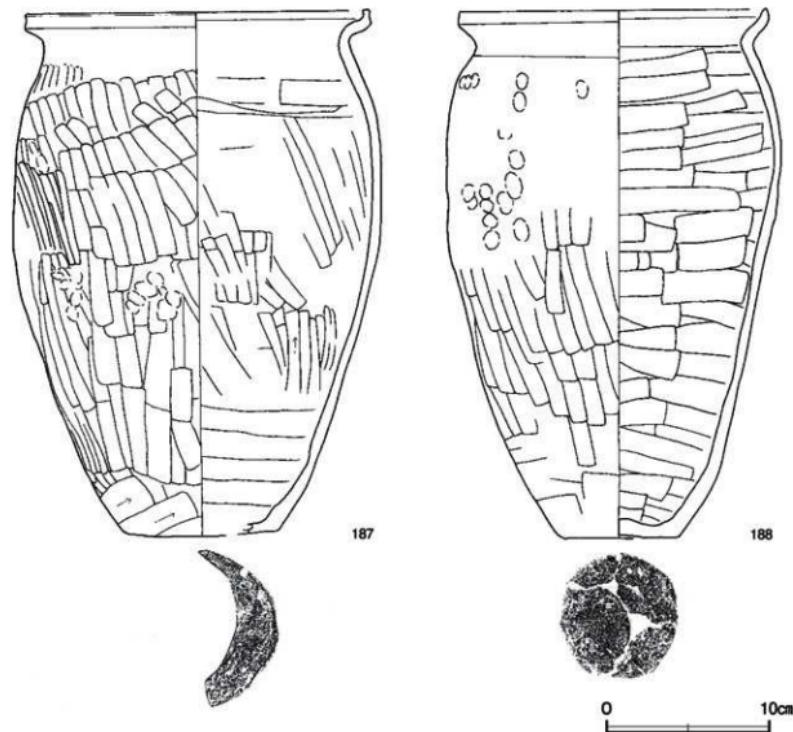
1	黒褐色	色	ロームブロック・炭化粒子微量	5	暗褐色	色	ロームブロック・炭化粒子中量
2	黒褐色	色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	6	暗褐色	色	ロームブロック・燒土粒子中量
3	暗褐色	色	ロームブロック多量、炭化粒子少量	7	黒褐色	色	ロームブロック中量
4	暗褐色	色	ローム粒子中量、炭化物少量				



第73図 第8号堅穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片 10 点（甕），須恵器片 10 点（坏 7, 甕 3），土製品 1 点（支脚_o），石器 1 点（砥石_o），石製品 3 点（竈部材），被熱繩 20 点のほか、縄文土器片 33 点（深鉢），弥生土器片 23 点（広口甕）が出土している。土器片はほとんどが細片で、全城に散在した状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 74 図 第 8 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 8 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 74 図）

番号	種別	部種	口径	部高	底径	胎土	色調	焼成	手法等	備考	出土位置
187	土師器	甕	21.0	32.5	(9.6)	砥石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい碧	普通	縄目模外・内面横模ナデ 体部表面中位以下に最位のナゲ下端横模のナデ 内面横模のナデ 成型多方向の削り	80% PL24	竪天井部
188	土師器	甕	19.1	32.7	7.2	砥石・石英・雲母・黒色粒子	灰黄鐵	普通	口縁部外・内面横模ナデ 体部外表面ナデ後下位上削り 内面横・擦位のナデ	96% PL24 底面壁底	竪天井部

表5 平安時代堅穴建物跡一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規格		床面 (cm)	床面 横溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)	(cm)			天井穴	玄入口	ビット	砂・量	芯窓穴				
3	D 5.11	N - 55° - E	長方形	335 × 298	40 ~ 45	平坦	-	-	1	-	堆	-	人為 自然	土器類、埴輪類、土製品	9世紀 中葉	
7	D 4.9	N - 42° - W	南北方形	285 × 271	60 ~ 65	平坦	-	-	1	-	堆	-	人為 自然	土器類、埴輪類、石器	9世紀 前葉	
8	D 5.9.3	N - 79° - E	方形	292 × 280	49 ~ 60	平坦	-	-	-	-	堆	-	人為 自然	土器類、埴輪類、石製品	9世紀 中葉	本跡→SK 1.9

5 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、塚1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

塚

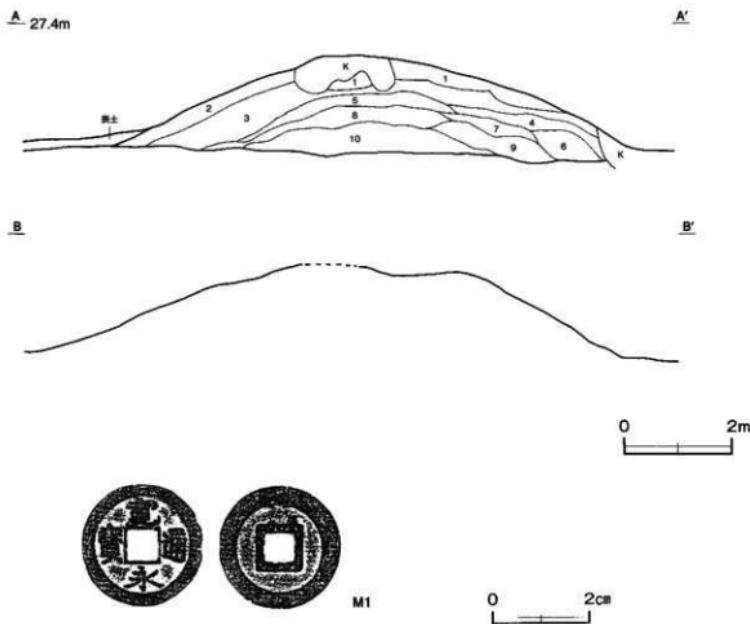
第1号塚（第75図・付図 PL13）

調査年度 2015年度

位置 調査区中央部のD 4 b5 ~ D 4 e7区、標高25mほどの台地平坦面に位置している。

調査状況 現状保存のため、測量及びトレーナーを入れて構築状況の確認のみを行った。

重複関係 第6号堅穴建物跡の埋没後に構築されている。



第75図 第1号塚・出土遺物実測図

規模と形状 長径 10.92 m、短径 10.72 m の円形である。基本層序第 2 層上面に盛土して構築されており、墳頂部までの高さは 182 cm である。

構築土と構造 構築土は 10 層に分層できる。中心部と東部に第 4 ~ 10 層を交互に盛土した後、第 2・3 層を全体に被せるように盛土している。第 1 層は堆積状況から、構築後に塚頂部を掘り返した痕跡と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック中量	6	黒褐色	ロームブロック少量
2	黒褐色	ローム粒子少量	7	暗褐色	ロームブロック少量（締まり強い）
3	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	8	黒褐色	ローム粒子微量（締まり強い）
4	暗褐色	ロームブロック中量（締まり強い）	9	黒褐色	ロームブロック微量
5	黒褐色	ローム粒子少量（締まり強い）	10	黒褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 銭貨 2 点（寛永通寶、不明）のほか、弥生土器片 77 点（広口壺）、土師器片 3 点（壺）、石器 2 点（磨石、敲石）、石核 1 点、被熱縫 4 点が出土している。

所見 構築時期は、出土した銭貨から寛永 13（1636）年以降である。トレンチによる調査のため、詳細は不明である。

第 1 号塚出土遺物観察表（第 75 図）

番号	種別	鉢名	径	孔径	厚さ	重量	材質	初 製 年	特 徴	出土位置	備 考
M1	銭貨	寛永通寶	25	0.6	0.1	29	鋼	1636 年	古寛永 背無銘	塚構築土	PL24

6 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明確でない道路跡 1 条、溝跡 18 条、土坑 43 基、集石遺構 2 基、遺物包含層 1 か所を確認した。以下、それらの遺構について記述する。

(1) 道路跡

第 1 号道路跡（第 76 図・付図）

調査年度 2015 年度

位置 調査区東部の D 5a3 ~ D 5d2 区、標高 24 m ほどの台地緩斜面部に位置している。

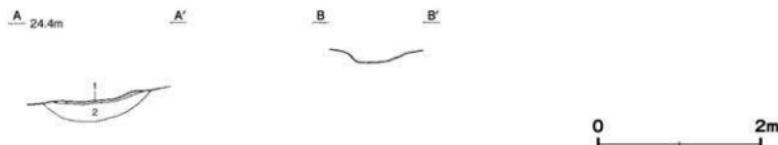
規模と形状 北東部が調査区域外に延びていることから、幅は 0.3 ~ 1.1 m で、長さは 1.6 m しか確認できなかった。D 5a3 区から北東方向（N - 30° - E）へ直線状に延びている。路面は第 1 号溝跡の覆土上面を使用している。路面は平坦で、地形の傾斜に沿っている。

覆土 2 層に分層できる。周囲から土砂が流入した自然堆積である。

第 1 号溝跡（第 1 号道路跡）土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量（締まり強い）	2	暗褐色	ローム粒子少量
---	-----	-----------------------	---	-----	---------

遺物出土状況 第 1 号溝跡覆土から、弥生土器片 5 点（広口壺）、石器 1 点（磨石）、剥片 1 点、金属製品 1 点（指貫）、が出土している。

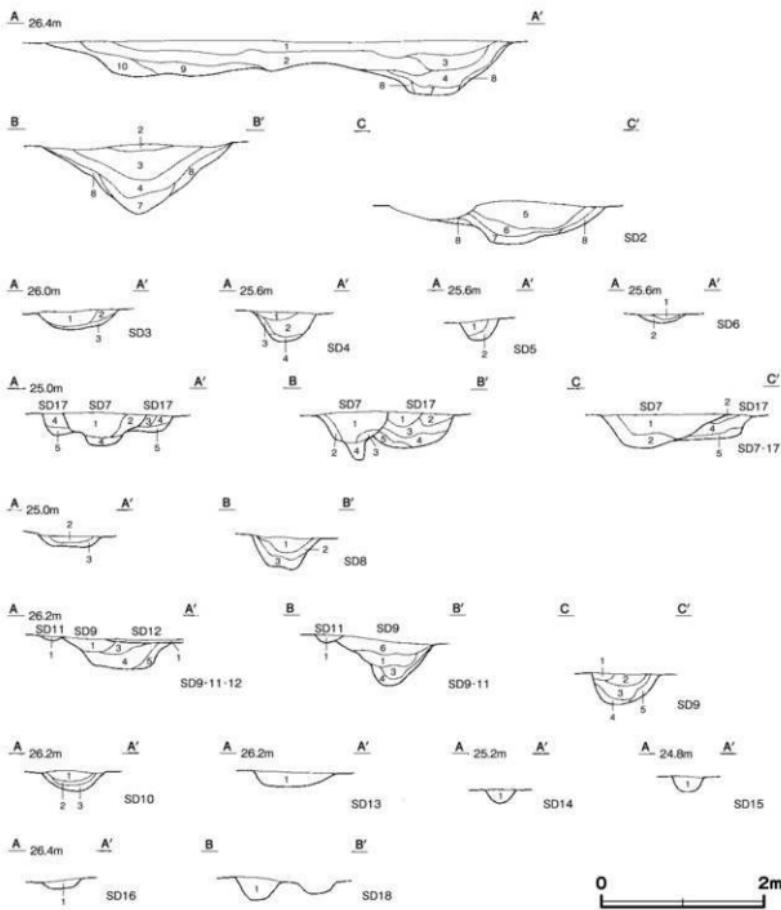


第 76 図 第 1 号溝跡（第 1 号道路跡）実測図

所見 出土遺物からは、時期は判断できない。第1号溝跡が埋没した後に、溝状の窪地を道路として利用したと考えられる。調査区域外に斜面を降りる林道があり、そこに向かい延伸することから、近年まで利用されていたことが推測される。

(2) 溝跡

溝跡については、実測図（第77図・付図）、土層解説及び一覧表にて掲載する。調査年度はすべて2016年度である。



第77図 その他の溝跡実測図

第2号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量
- 8 黒褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量
- 9 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量
- 10 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物少量

第3号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック多量

第4号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量

第5号溝跡土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 黄褐色 ロームブロック中量

第6号溝跡土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

第7号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 黑褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量

第17号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量

第8号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黑褐色 ロームブロック中量

第9号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 にぶい黄褐色 ローム粒子中量
- 4 黑褐色 ローム粒子中量
- 5 黑褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 6 黑褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第11号溝跡土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

第12号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 2 黑褐色 ロームブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

第13号溝跡土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量

第14号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量

第15号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第16号溝跡土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック中量

第18号溝跡土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

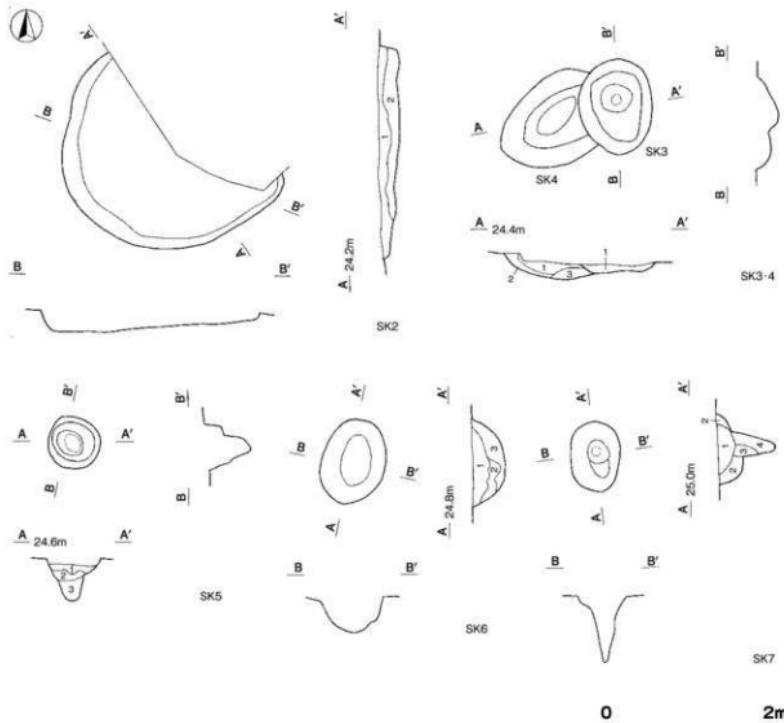
表6 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	断面		断面	横断面	裏土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)			
1	D 5b3~D 5d2	N = 30° - E	直線	(11.52)	0.50 ~ 2.00	0.17 ~ 0.63	50	直状	鐵鋸	人為 洗生土器、石器、金屬製品
2	C 3c6~D 2g0	N = 32° - E N = 69° - W	直線	(66.74)	1.78 ~ 2.36	0.12 ~ 0.32	25 ~ 85	V字状・ 逆台形	鐵鋸	人為 洗生土器、陶器、鐵鋸、石器 S 19・10・12・18 →SD 3・10. S K 21→深
3	D 2d7~D 2f0	N = 64° - W N = 26° - E	L字状	(15.58)	0.42 ~ 1.07	0.07 ~ 0.45	7 ~ 10	U字状	鐵鋸	自然 石器 土師質土器、 S D 2→本跡
4	D 3e2~D 3g1	N = 22° - E	直線	(9.18)	0.80 ~ 1.05	0.27 ~ 0.42	39	逆台形	外縁 鐵鋸	人為 洗生土器、頭蓋器、 土師質土器、陶器
5	D 3f2~D 3g1	N = 21° - E	直線	(5.00)	0.32 ~ 0.55	0.08 ~ 0.30	26	逆台形	外縁 鐵鋸	人為
6	D 3e3~D 3f2	N = 30° - E N = 110° - E	L字状	(5.12)	0.25 ~ 0.75	0.10 ~ 0.42	10 ~ 25	逆台形	外縁 鐵鋸	人為
7	D 3g6~E 3h9	N = 120° - E N = 163° - W	L字状	(29.06)	0.36 ~ 1.50	0.15 ~ 0.46	57	逆台形	外縁 鐵鋸	人為 洗生土器、土師質土器、 石器
8	D 3d9~D 4d1 D 4d1~D 3h9	N = 65° - W N = 30° - E N = 31° - E	L字状 乾行	7.45 20.47	0.50 ~ 0.70 0.62 ~ 0.90	0.33 ~ 0.51 0.20 ~ 0.48	11 ~ 25 14 ~ 36	逆台形 山字形直立	外縁 鐵鋸	人為 自然 洗生土器 S 122→SD 8
9	D 3a4~D 3e2	N = 156° - W	直線	14.20	0.81 ~ (1.27)	0.23 ~ 0.43	33 ~ 60	逆台形	外縁 鐵鋸	人為
10	D 2a0~D 3a1	N = 115° - E	直線	5.22	0.60 ~ 0.69	0.28 ~ 0.42	18 ~ 32	浅V・U 字状	自然	洗生土器、石器 S D 2→本跡

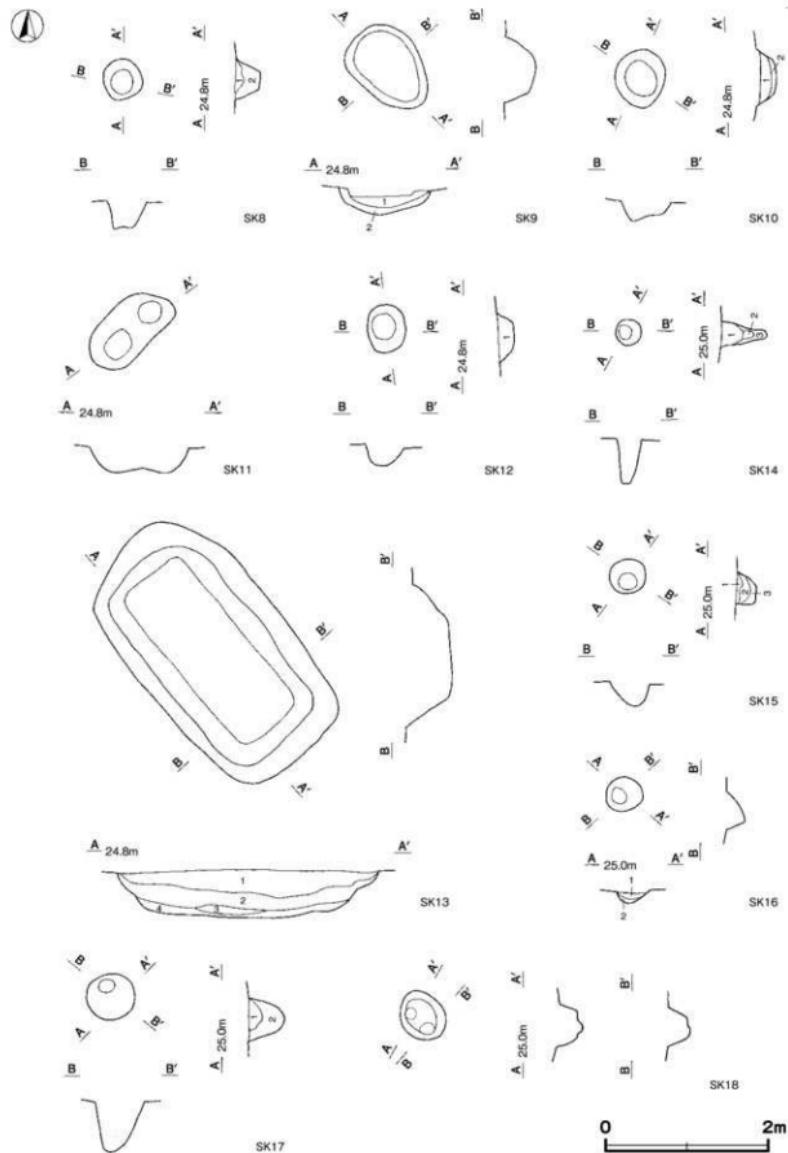
番号	位置	方向	平面形	規 模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備 考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
11	D 3a3~D 3c3	N - 24° - E	直線	5.70	0.19~0.31	0.10	10	浅いU字状	緩斜	自然		SD 9 → 本路
12	D 3a4~D 3c6	N - 60° - W	直線	11.28	0.43~0.77	0.26~0.59	11	逆台形	緩斜	人為		SI 19 SD 9 → 本路
13	D 3a4	N - 30° - E	直線	(3.71)	0.41~0.51	0.25~0.32	18	逆台形	緩斜	人為		本路 → SD 9
14	D 4a4~E 4a7	N - 60° - W	蛇行	(12.98)	0.25~0.72	0.09~0.35	15	逆台形	外傾	人為	溝生土器	SI 26 → 本路
15	E 5c3~E 5e1	N - 46° - E	直線	11.60	0.28~0.41	0.13~0.27	18	逆台形	外傾	人為	溝生土器	
16	C 3i6~D 3a5	N - 13° - E N - 130° - E	鉤状	17.20 6.00	0.28~0.78	0.16~0.58	11	逆台形	外傾 緩斜	人為	石器、銅貨	
17	D 3i9~E 3i9	N - 117° - E N - 163° - W	L 字状	(16.88)	1.64	0.50~1.40	20~45	逆台形	外傾	人為		SI 25~30 → 本路 → SD 7
18	C 3i4~C 3j4	N - 18° - E	直線	5.46	0.23~0.59	0.11~0.21	17~35	逆台形	外傾	人為		

(3) 土坑

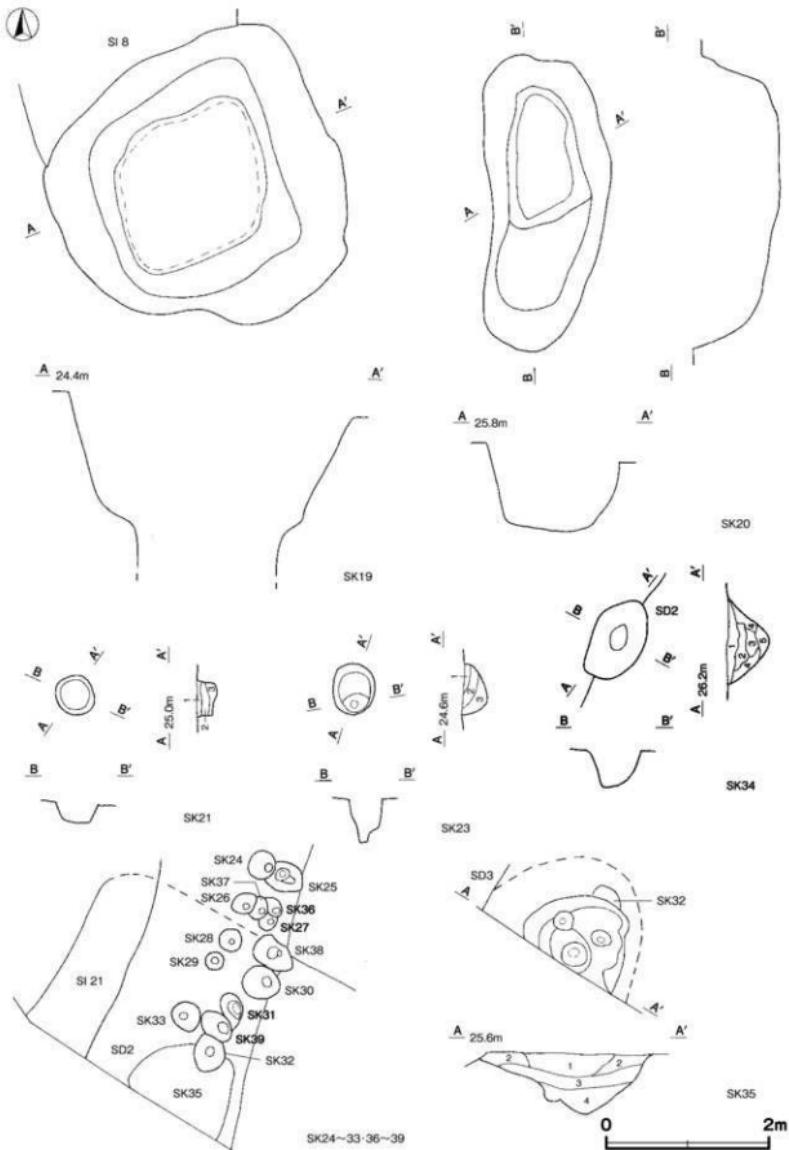
土坑については、実測図（第 78 ~ 81 図）、土層解説及び一覧表にて掲載する。調査年度は、第 2 ~ 23 号土坑が 2015 年度、第 24 ~ 45 号土坑が 2016 年度である。



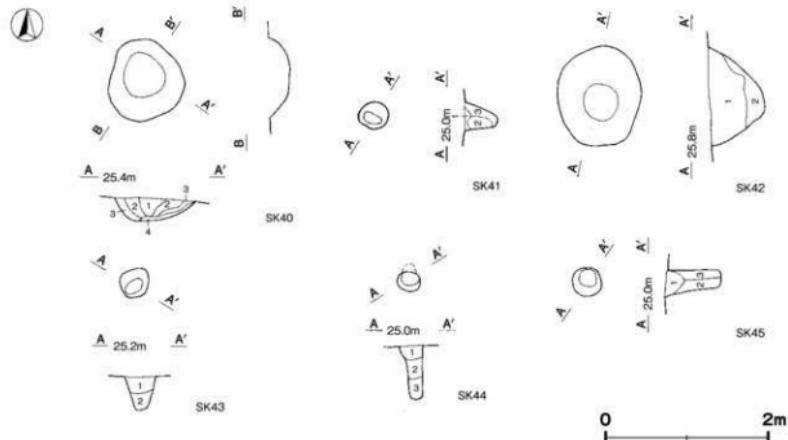
第 78 図 その他の土坑実測図(1)



第79図 その他の土坑実測図(2)



第80図 その他の土坑実測図(3)



第 81 図 その他の土坑実測図(4)

第 2 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第 3 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

第 4 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量

第 5 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

第 6 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第 7 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

第 8 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第 9 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 無褐色 ローム粒子中量

第 10 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第 12 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量

第 13 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック・炭化粒子中量

第 14 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黑褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第 15 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第 16 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第 21 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第 23 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黑褐色 ローム粒子中量

第 34 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 黑褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 黑褐色 炭化物中量、ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量、炭化物少量
- 5 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

第 17 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
2 略褐色 ロームブロック少量

第 35 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子少量
3 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第 42 号土坑土層解説

- 1 黄褐色 ロームブロック中量
2 黄褐色 ロームブロック多量

第 40 号土坑土層解説

- 1 黄褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック・炭化物中量
3 黄褐色 ロームブロック多量、炭化物中量
4 にぶい黄褐色 ローム粒子多量

第 41 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
3 褐色 ローム粒子中量

第 43 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
2 褐色 ローム粒子中量

第 44 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
2 黑褐色 ローム粒子中量
3 暗褐色 ローム粒子中量

第 45 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック少量
3 褐色 ローム粒子中量

表7 その他の土坑一覧表

番号	位置	長辺方向	平面形	規格		壁面	底面	面土	主な出土遺物	備考
				長辺×短辺(m)	深さ(cm)					
2	D 5b5	-	(円形・楕円形)	2.73 × 1.38	25	外傾	平坦	人為 自然	縄文土器、弥生土器、石器	
3	D 5d2	N - 12° - W	楕円形	1.15 × 0.90	20 - 31	外傾	凸凹	人為		S K 4 → 本跡
4	D 5d2	N - 65° - E	楕円形	1.26 × 1.07	27	紙斜	皿状	人為		本跡 → S K 3
5	D 4b0	-	円形	0.64 × 0.63	54	外傾	平坦	自然	縄文土器	
6	D 4d0	N - 22° - E	楕円形	1.07 × 0.78	41	外傾	平坦	人為	縄文土器、弥生土器	
7	D 4c8	N - 3° - W	楕円形	0.85 × 0.62	83	外傾	平坦	自然	縄文土器、弥生土器、石器	
8	D 5d1	-	円形	0.52 × 0.52	32	外傾	平坦	自然		
9	D 4a9	N - 42° - W	楕円形	1.18 × 0.80	35	外傾	平坦	自然	縄文土器	
10	D 4b0	-	円形	0.68 × 0.65	22	ほぼ直立	平坦	人為		
11	D 5e1	N - 56° - E	楕円形	1.22 × 0.63	50	外傾	凸凹	自然	縄文土器	
12	D 5d1	N - 5° - W	楕円形	0.61 × 0.50	27	外傾	平坦	人為	縄文土器、被熱繩	
13	D 4c9	N - 43° - W	長方形	3.40 × 1.88	40	外傾	平坦	人為 自然	縄文土器、弥生土器、石器、熟熱繩	
14	D 4e4	-	円形	0.34 × 0.32	53	ほぼ直立	平坦	自然	縄文土器	
15	D 4b7	-	円形	0.44 × 0.43	26	紙斜	平坦	自然		
16	C 4b9	-	円形	0.46 × 0.45	21	外傾	平坦	自然		
17	C 4i8	-	円形	0.61 × 0.58	64	外傾	皿状	自然		
18	C 4b0	N - 33° - W	楕円形	0.67 × 0.50	27 - 33	外傾	凸凹	人為		
19	D 5b4	-	不整形	3.60 × 1.59	225	外傾	平坦	人為	縄文土器、弥生土器、石器、熟熱繩	本跡 → S I 8
20	D 4c4	N - 90°	不定形	3.65 × 1.54	94	ほぼ直立	平坦	人為		
21	D 4a8	-	円形	0.49 × 0.47	27	外傾	平坦	自然		
22	D 4a6	N - 5° - W	楕円形	0.65 × 0.52	53	ほぼ直立	凸凹	自然	弥生土器	
24	D 2f0	-	円形	0.36 × 0.33	68	直立	皿状	人為		S D 2 → 本跡
25	D 2f0	N - 56° - W	楕円形	(0.40) × 0.37	61	外傾	凸凹	人為		S D 2 → 本跡
26	D 2f0	N - 24° - E	(楕円形)	(0.25) × 0.26	74	ほぼ直立	皿状	人為		S D 2 → 本跡
27	D 2f0	N - 55° - E	不定形	0.23 × 0.20	69	ほぼ直立	皿状	人為		S D 2 → 本跡
28	D 2f0	N - 62° - W	楕円形	0.29 × 0.26	72	ほぼ直立	皿状	人為		S D 2 → 本跡
29	D 2f0	-	円形	0.23 × 0.22	52	ほぼ直立	皿状	人為		S D 2 → 本跡
30	D 2f0	-	円形	0.44 × 0.41	41	外傾	皿状	人為		S D 2 → 本跡
31	D 2f0	N - 8° - W	不整形	0.47 × 0.27	62	外傾	皿状	人為		S D 2 → 本跡
32	D 2f0	N - 15° - E	(楕円形)	(0.45) × 0.37	81	外傾	皿状	人為		S K 2 → S K 35 → 本跡
33	D 2f0	N - 32° - W	楕円形	0.37 × 0.33	71	外傾	皿状	人為		S D 2 → 本跡
34	D 3b1	N - 26° - E	楕円形	1.06 × 0.67	50	外傾	皿状	自然		S D 2 → 本跡
35	D 2f0	N - 30° - E	(楕円形)	(2.11) × (1.35)	75	外傾	凸凹	人為		S D 2 → 本跡 → S D 3 → S K 32

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
36	D 2 f0	N - 52° - W	楕円形	0.30 × 0.20	34	外傾	圓状	人為		SD 2 → 本跡
37	D 2 f0	N - 50° - W	[楕円形]	0.26 × (0.19)	68	外傾	圓状	人為		SD 2 → 本跡
38	D 2 f0	N - 58° - W	楕円形	0.32 × 0.36	55	外傾	凸凹	人為		SD 2 → 本跡
39	D 2 f0	N - 38° - W	楕円形	0.45 × 0.32	83	直立	圓状	人為		SD 2 → 本跡
40	C 4 i1	-	不整円形	1.01 × 0.95	26	傾斜	平坦	自然		
41	C 4 j2	-	円形	0.33 × 0.32	41	直立	圓状	自然		
42	D 3 e5	N - 11° - E	楕円形	1.25 × 1.05	68	外傾	平坦	人為		
43	E 4 e3	N - 38° - E	楕円形	0.41 × 0.37	42	直立	平坦	人為		
44	E 4 d4	N - 80° - W	楕円形	0.31 × 0.25	66	直立	平坦	自然		
45	E 4 d5	-	円形	0.37 × 0.36	71	直立	平坦	自然		

(4) 集石遺構

第1号集石遺構（第82図）

調査年度 2015年度

位置 調査区東部のD 515区、標高24mほどの緩斜面部に位置している。

規模と形状 挖方は長径0.66m、短径0.57mの楕円形で、長径方向はN - 35° - Eである。深さは7cmで、底面は平坦で礫が散かれている。壁は外傾している。

覆土 単一層で、混入物のほとんどない黒褐色土が礫間に入り込んでいることから、自然堆積である。

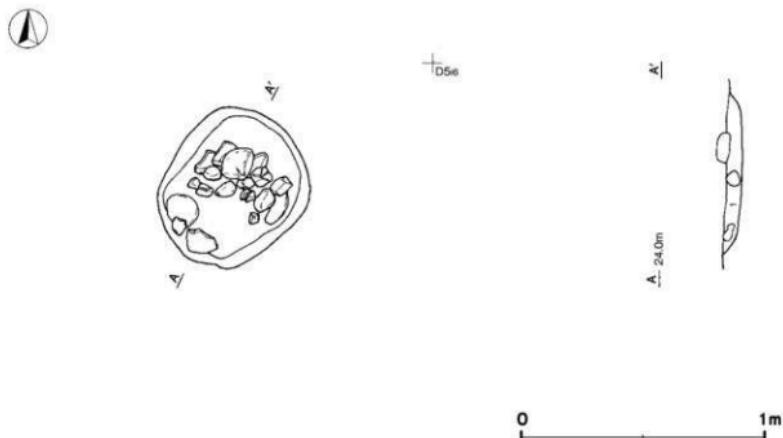
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 被熱礫15点、石器7点（磨石）が、土坑状の掘り込みの底面に敷かれた状況で出土している。

石材は安山岩と砂岩で、総重量は9.7kgである。磨石も全点被熱しており、再利用されたものと考えられる。

所見 出土遺物からは、時期は判断できない。礫の出土状況や赤変した状況から、集石の中央部で火を燃やしたものと考えられる。



第82図 第1号集石遺構実測図

第2号集石遺構（第83図）

調査年度 2016年度

位置 調査区東部のE 4b5区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 掘方は、径0.61mの円形である。深さは12cmで、底面は皿状で礫が敷かれている。壁は緩やかに傾斜している。

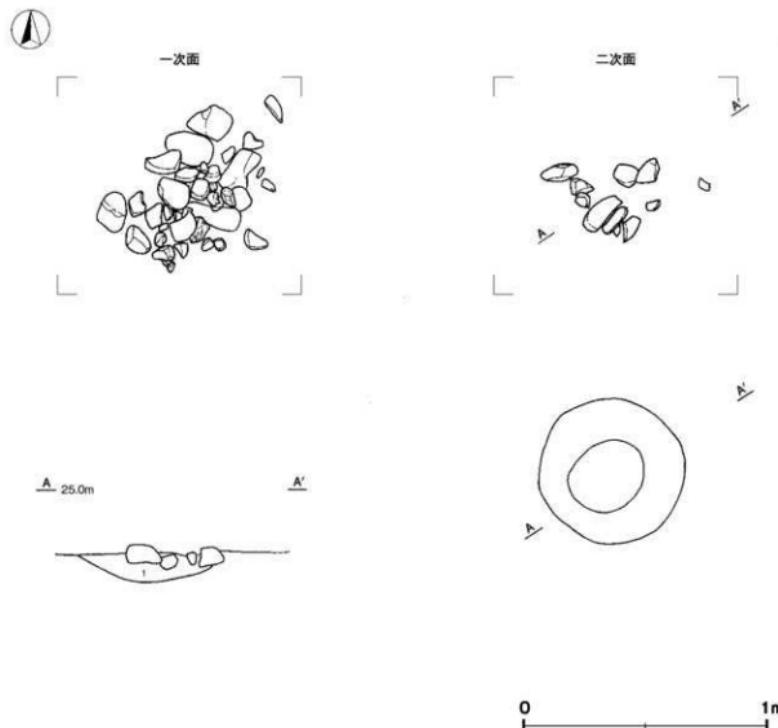
覆土 単一層で、混入物のほとんどない黒褐色土が礫間に入り込んでいることから、自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 被熱礫42点、石器14点（磨石10、敲石2、台石2）が、土坑状の掘り込みの底面に敷かれた状況で出土しているほか、弥生土器片1点（広口壺）が出土している。石材は安山岩と砂岩で、総重量は22.3kgである。石器も全点被熱しており、再利用されたものと考えられる。弥生土器は、細片で混入と考えられる。

所見 出土遺物からは、時期は判断できない。礫の出土状況や赤変した状況から、集石の中央部で火を燃やしたと考えられる。遺構の形状や遺物の出土状況から、第1号集石遺構と同時代と考えられる。



第83図 第2号集石遺構実測図

表8 その他の集石遺構一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		覆 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	D 515	N-30°-E	椭円形	0.66 × 0.57	7	外縁 斜面	平坦	自然	被熱躍	
2	E 4 b6	-	円形	0.61 × 0.61	12	傾斜 斜面	圓錐状	自然	被熱躍	

(5) 遺物包含層

第2号遺物包含層（付図）

調査年度 2016年度

位置 調査区東部のE 4 a9～E 4 b0区にかけての標高25mほどの台地平坦部に位置している。

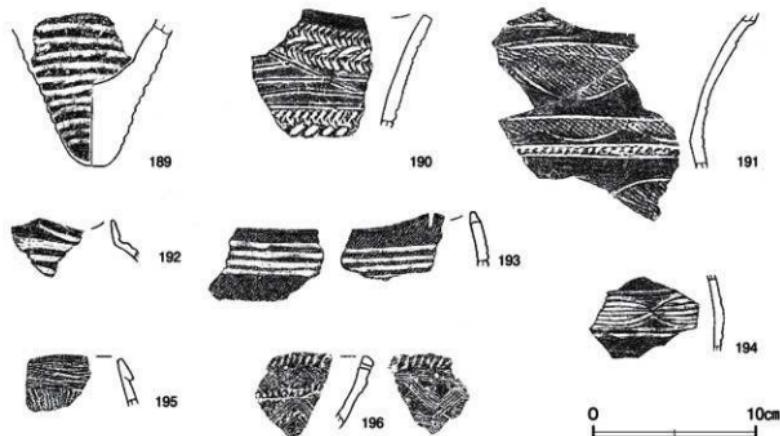
規模 東西幅・南北幅それぞれ約7mにかけて確認した。

遺物出土状況 被熱躍792点、石器29点（磨石20、磨・敲石4、敲石3、砥石1、台石1）、自然躍18点、繩文土器片9点（深鉢）、弥生土器片9点（広口壺）のほか、土師器片1点（椀）が基本層序の第3層中から出土している。石器を含むすべての石類は安山岩と砂岩を主体としており、そのほか流紋岩・泥岩・チャート・瑪瑙を確認した。石器・自然躍を含む石の総重量は、78.7kgで、9割以上が被熱躍が占めている。被熱躍の多くが破碎された状態で出土しており、接合する破片もあることから、投棄されたものと考えられる。

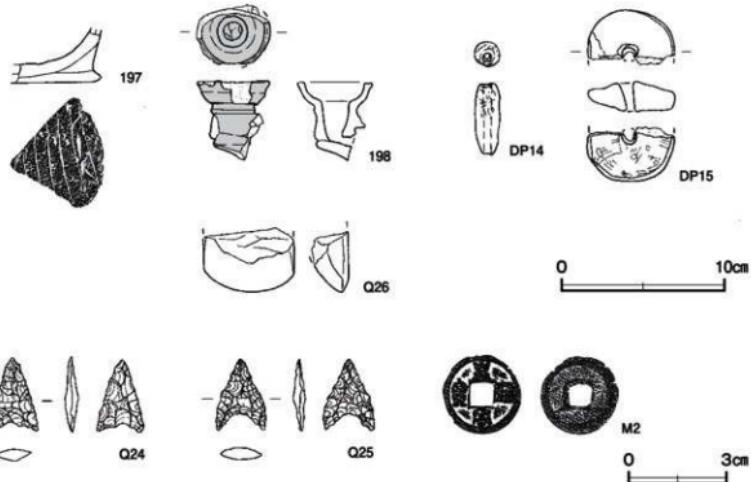
所見 時期は、出土遺物や層位から、繩文時代から弥生時代の範疇に入ると推測される。破碎され不要となつた被熱躍の捨て場として利用されたと考えられる。遺構の配置や出土した被熱躍から、第1・2号集石遺構との関連が考えられる。

(6) 遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物について、実測図（第84・85図）及び観察表を掲載する。



第84図 遺構外出土遺物実測図(1)



第85図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表（第84・85図）

番号	種 別	部 種	口 径	厚 度	底 槌	筋 土	色 調	施成	手 法 の 特 徴 ほ か	出 土 位 置	備 考
189	陶文土器	深鉢	-	(0.2)	-	長石・石英・赤色粒子	にふい黄橙	管状機位の沈線	D 4号 早期中型	5% PL22	
190	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	棕	普通 波状口縁 貝殻複捺压痕 横・斜位の平行沈線	S 12覆土中	前期中型	
191	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英・赤色粒子	にふい黄橙	普通 沈線で区画したRL單路の筋消褪文 刺突文	S 11覆土中	後期後半	
192	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	にふい黄橙	普通 波状口縁 横位の沈線	第3号竪穴 遺構質土中	後期中型	
193	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	黑褐	普通 波状口縁 横位の單路機位LR後機位の沈線	S 12覆土中	PL22	
194	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	暗灰青	普通 外周磨き 沈線・浮線文	PL22	中期中型	
195	陶文土器	深鉢	-	-	-	長石・石英	明黄褐	普通 飾系文	S 12覆土中	PL22	
196	陶生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英・赤色粒子	にふい黄橙	口唇部捲頭支脚体による削み 6本筋歯切工具 盛唐に據文原作による刻凹 施成部空孔2ヶ所	2015年度土中	後期中型	
197	陶生土器	広口壺	-	-	-	長石・石英	棕	普通 表面施縫文	2015年度土中	後期後半	
198	灰陶陶器	淨瓶	(4.6)	-	-	長石・黑色斑点 灰白	良好	外・内面施釉	E 5号	5% PL24 後期後半	

番号	器種	形	長さ / 條数	孔径	重量	筋 土	色 調	特 徴	出 土 位 置	備 考
DP14	管状土錠	L5	4.5	0.4	8.2	長石・石英・赤色粒子	にふい褐	全面ナデ調整	D 3号	PL24
DP15	紡錘革	5.4	1.8	0.6	(268)	長石・石英・角閃石・赤色粒子	にふい褐	上下面ハケ目後ナデ調整 一方向からの穿孔	D 4号	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出 土 位 置	備 考
Q 24	罐	23	1.5	0.4	1.0	黒色ガラス質 萤石岩	無基	2016年度表土	PL23
Q 25	罐	23	1.6	0.4	0.9	安山岩	無基	E 4号	PL23
Q 26	帶製石斧	(3.8)	5.6	2.3	(73.3)	綠岩	基部欠損 刃部表裏から紙引き出す 裏面敲打痕残る	2015年度表土	

番号	種 別	銘 名	径	孔径	厚さ	重 量	材質	初 製 年	特 復	出 土 位 置	備 考
M 2	銭貨	皇宋通寶	2.5	0.7	0.1	2.4	銅	1039年	素面	2016年度表土	PL24

第4節 まと め

1はじめに

当遺跡は、郡河川支流の桜川と沢渡川が合流する台地先端部に位置している。今回の調査では、縄文時代の遺物包含層1か所、弥生時代後期後半の竪穴建物跡25棟、竪穴造構2基、土坑1基、古墳時代の竪穴造構1基、平安時代の竪穴建物跡3棟などを確認した。確認した遺構遺物の大半は、弥生時代後期後半に比定されるものである。ここでは、遺構を確認できた主な時代について概観し、検討を加えまとめとする。

2 縄文時代

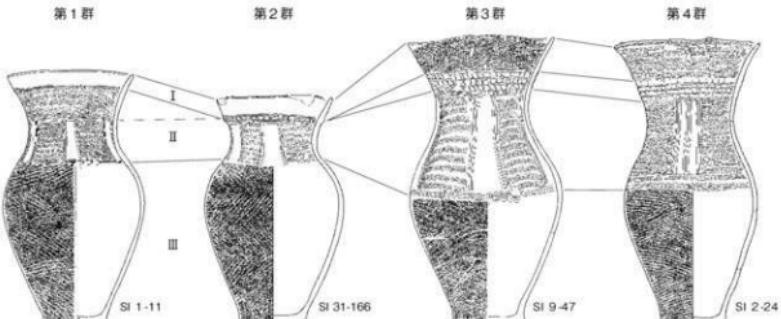
今回の調査で、遺物包含層1か所を確認した。中心となるのは早期中葉の田戸下層式土器で、この時期に捨て場として利用されたものと考えられる。また、直前の撲糸文期末葉にあたる天矢場式に比定できる土器片も2点確認しており、掲載したものでは8(第5図)が該当する¹⁾。このほか、遺構に伴うものではないが、後期後葉の安行式や晩期中葉の大洞A式併行の時期に比定できる土器片も複数出土している。当遺跡や隣接する植松遺跡では、水戸市の確認調査によって縄文時代中期の土器片が発見されていたが²⁾、早期・後期・晩期にも遺跡が形成されたことが判明した。

3 弥生時代

(1) 十王台式土器について

当遺跡は、弥生時代後期後半には十王台式土器の文化圏に含まれており、今回の調査では十王台式土器が多量に出土している。十王台式土器は、1939年に山内清男氏によって設定され³⁾、二軒屋式土器との分別を行った鈴木正博氏によって研究の基礎が築かれている⁴⁾。その後、当財團の弥生時代研究班⁵⁾や海老澤稔氏⁶⁾、鈴木素行氏⁷⁾らにより研究が進められ、それぞれ十王台式の細分が行われている。ここでは、これら先駆の成果を参考にして当遺跡から出土した十王台式土器を検討することにする。

十王台式土器は、胴部下半に附加条縄文を施し、上部には櫛描文によるスリットで形成した縱区画内に同じく櫛描文による充填波状文を施していることが特徴である。附加条縄文は、附加条2種(附加1条)を主体とし、そのほか頭部に押圧隆起線と呼ばれる隆帯が付くことが典型である。器種構成はほとんどが広口壺で、前述した櫛描文で施される土器のほか、櫛面を用いず附加条縄文を全体に施文する土器がある。その他の器種として高壺や浅鉢があるが、当遺跡の出土土器の組成には浅鉢は含まれておらず、替わりに蓋が加わっている。これらの蓋が十王台式の組成に含まれているかどうかは明確でない。広口壺は、形状は類似するが、大きさに小・中・大の3タイプがあり、作り分けがされていたことが考えられている。当遺跡の出土した土器のうち器高が測れるものが30点あり、16.3~23.0cmのものを小形、26.7~35.5cmのものを中形とすることができます。大形のものに器高を測れるものはないが、底径は中形が9.4cm以下に対し大形のものは12.8~16.9cmで、口径は中形が18.9cm以下に対し大形は21.6cm~23.2cmと有意の差を持つて作られていることから判別は可能である。逆に小形・中形の別では、口径・底径の計測値が一部混在する。これは、鈴木素行氏の定義した細頸・中頸・太頸の形態差⁸⁾によるもので、口縁部片や底部片のみで小形・中形を分けるのは難しい場合がある。この小・中・大の3タイプは、主に用途による違いと考えられ、中形の中頸のものが主に煮沸具として利用されたようである。当遺跡からの出土土器で煮沸痕が確認できる



第 86 図 十王台式土器の変化 (S : 1 / 6)

ものは、35 点あり、そのうち 30 点が中形である。

次に当遺跡から出土した十王台式土器の特徴を比較し、分類を行う。対象はスリットによる縦区画内充填波状文を持つ中形の土器とする。今回出土した中形の十王台式土器は、全体像が復元できるものに関しては全て中頭タイプである。特に注目した点は、器形、I（口縁部）文様帶、II（頸部）文様帶、隆帯の 4 項目で、そのほか櫛歯の本数、スリットの区画数、縄文原体の別を参考にした。それぞれの特徴を比較していくと以下の 4 群に分けられる（第 86 図）。

第 1 群…11 (SI 1), 165 (SI 31) が該当する。

口径が胴部最大径より小さく、胴最大径部が頭括れ部と底部の中央より上に位置することから、やや肩の張った印象を受ける器形となる。I 文様帶は無文で、最大の特徴は II 文様帶が分化している点にある。隆帯は 1 条で、縄文原体による刺突を施すもの、爪痕を付けながらしっかりと押圧を行った押圧隆起線を持つものが確認できる。施文に使用する櫛歯は 3・4 本、スリットによる区画は 6・7 単位。胴部の縄文は附加条一種（附加 2 条）または附加条二種（附加 1 条）縄文による羽状構成である。

第 2 群…166・167 (SI 31) が該当する。

器形や I 文様帶が無文である点は第 1 群と類似するが、II 文様帶の分化がないものとなる。隆帯は爪痕を付けながらしっかりと押圧を行うもので、条数は 166 は第 1 群同様 1 条であるが、167 は押圧隆起線が 4 条と多く、その分 I 文様帶が狭まっている。施文に使用する櫛歯は 3・4 本、スリットによる区画は 5・6 単位。胴部の縄文は附加条一種（附加 1 条）または附加条二種（附加 1 条）または附加条軸縄不明縄文による羽状構成である。附加条一種（附加 1 条）縄文は、当遺跡において非常に稀な施文具と考えられる。また、附加条軸縄不明縄文は、軸縄の縄文が土器に付されないため、撲糸文と同様の施文状態になっているものである。

第 3 群…46・47 (SI 9), 123 (SI 23), 140 (SI 27) などが該当する。

口径が胴部最大径と同じくらいで、胴最大径部が頭括れ部と底部の中央付近に位置することから、やや丸みを帯びた印象になる。I 文様帶は第 1・2 群よりやや広く、そこに櫛歯によるスリットや波状文、または胴部と同じような附加条縄文が施文される。47 や 123 のように II 文様帶も広くなり、文様帶が下がった印象を受けるものもある。押圧隆起線は中形に関しては 3 条でまとまっており、押圧は粗くなり凹凸がわかる程度に圧してあるだけのものが多い。47 は、第 2 群と同じように爪痕を付けているが、

凹凸ははっきりせず、平坦な印象を受けるものである。施文に使用する櫛歯は3~7本、スリットによる区画は4・5・8単位、胴部の繩文は附加条二種（附加1条）または附加条軸繩不明繩文による羽状構成である。

第4群…21・24・25（SI 2）、74（SI 13）、96~98・101（SI 19）などが該当する。

口径が胴部最大径と同じくらいかそれよりも大きく、胴最大径部の位置は第3群と同じような位置であるが、器高に対し胴部最大径が短く細身的印象である。I文様帶は第3群よりもさらに大きく主に波状文が施されている。口唇部に突起が付くものがある。押圧隆起線は中形に関しては3・4条で、押圧は粗く、第3群と比較しても凹凸がはっきりしないものが多い。施文に使用する櫛歯は4~6本、スリットによる区画は3・4単位、胴部の繩文は中形に関しては附加条軸繩不明繩文による羽状構成である。以上の分類結果は時間の経過に伴った変化と考えられ、第1群が最も古く、数字の順に新しくなっていくものと考えられる。器形は、第1群の口径が胴部最大径より小さく肩の張った形状から、第3群の口径と胴部最大径が同じで丸みを帯びた形状に変化し、第4群の口径が胴部最大径より大きく細身の形状へと変化していく。瀬沼川流域の茨城町大戸遺跡群でも、大畠遺跡と矢倉遺跡出土の十王台式土器を比較して、当遺跡の第3群から第4群への変化と同じ傾向が指摘されている⁹⁾。I文様帶の幅は、第1・2群では幅2~3cm程度で、第3群では3~4cmに、第4群では5cm前後に広がっている。それに伴い、第1・2群では無文だったものが、第3群になると櫛描文や繩文が施文されるようになり、第4群では波状文が使用されるようになる。隆帶は第1群の1条から第2群の2~4条、第3群の3条、第4群の3・4条と幅を持ちながら徐々に条数を増やしていく傾向にある。また、隆帶の押圧の仕方も、変化がみられる。第1群では繩文原体で隆帶に刺突するものや、しっかりと押圧を施し波状の凹凸を形成する押圧隆起線がある。押圧隆起線は、第2群でも引き続きしっかりと押圧したものがみられ、中には爪痕をつけて装飾するものもある。第3群になると、押圧が粗くなる傾向がみられ、前段階ほど凹凸のはっきりしたもののがみられなくなる。また、第2群同様、爪痕をつけるものが確認できる。当遺跡出土土器には、押圧隆起線に爪痕をつけるものは、多い遺構でも10点に1点ある程度で、さほど主体的な文様ではないようである。第4群ではさらに凹凸が目立たなくなり、爪痕をつけるものはみられなくなる。当遺跡から出土した十王台式土器の中形土器は、以上のような変遷を遂げており、これらをもとに、当遺跡の十王台式期集落は第1期から第4期に分けることができる。第1期から第4期は、それぞれ第1群から第4群の土器に対応させるものとする。

(2) 各時期の土器様相と遺構

前項で確認した各時期の土器様相を概観し、確認した遺構の時期を検討する。当遺跡の十王台式期の遺構の埋没状況は、全て埋め戻されているか、埋め戻した後に黒色土が中央の窪地に自然堆積したかのどちらかに該当する。遺構の時期決定にあたっては、層位を含めた出土状況から判断した同時性も検討に入れた。

第1期（第87図）

当地に弥生時代の集落が営まれ始めた時期である。この時期は中形土器のII文様帶が分化しており、前述した11・165（第62図）のほかに第23号竪穴建物跡から出土した118（第45図）も該当すると考えられる。これらは十王台式直前段階として十王台1a式という細分型式が与えられている¹⁰⁾。この時期の遺構として挙げられる第1号竪穴建物跡から出土した土器で、十王台式土器の特徴を備えているのは11・16のみである。そのほかは、1条の隆帶下に櫛歯による横走文を施文する12や、2条の押圧隆起線で区



第 87 図 第 1 期の土器 (S : 1 / 8)

画された I・II 文様帶に櫛歯による波状文を施す 13 などがあり、これらの特徴を持つ土器群は長峯 (新) 式に比定できる¹¹⁾。長峯式の特徴をまとめると、以下の通りである¹²⁾。

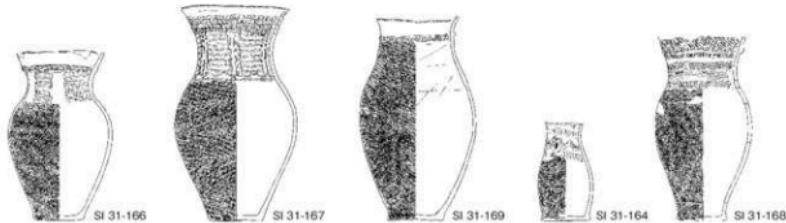
- (1) 基本組成は広口壺の精製・粗製土器の組み合わせで、ほかに鉢・高環などがある。
- (2) 口縁部は素縁のものと複合口縁とがあり、口縁部が無文のものは素縁化が進む。素縁の場合、口縁下に押圧隆起線がつく。長峯 (新) 式になると I 文様帶に波状文が施されるものがある。
- (3) II 文様帶には、櫛歯 4 本前後の横走波状文、横走波状文 + 円形刺突文、連弧文、格子目文、縦区画充填波状文などが施されるものがある。十王台 1 a 式のように文様帶が分割されることはほとんどない。長峯 (新) 式では、頸部に無文帯を持つ土器が出現する。

(4) III 文様帶には附加条縄文が羽状に施文される。附加条縄文は一種 (附加 2 条) が多く、一種 (附加 1 条) のものもある。長峯 (新) 式になると附加条二種 (附加 1 条) も施文されるようになる。

同じような組成は、第 29 号竪穴建物跡にもみられる。155 は、十王台式の特徴を持っているが、胴部の縄文が附加条一種 (附加 1 条) で、前述した長峯式の要素も持っている。小形のため II 文様帶が分化していないが、十王台 1 a 式の土器とすることができるだろう。150 ~ 154 も長峯 (新) 式と考えられる。

また、他地域との交流を示す資料も出土している。第 1 号竪穴建物跡出土の 18・19・20 (第 8 図)・第 29 号竪穴建物跡出土の 159 (第 58 図) は二軒屋式の特徴を持つ土器である。18 は縄文原体による帶状刺突列と櫛歯による山形文内光填波状文が施文され、胴部に附加条一種 (附加 2 条) を羽状に施文したものである。19 の胎土は在地のものと考えられ、20・159 は細織を含む胎土で、搬入品と考えられる。

以上のように、第 1 期の遺構は第 1・29 号竪穴建物跡で、そこから出土した土器群は、長峯 (新) 式土器を主体とし、その中に十王台 1 a 式土器や二軒屋式土器が含まれる様相を呈している。この 2 棟から出土した土器群は、十王台式の成立を考える上で非常に興味深い資料である。



第88図 第2期の土器 (S : 1/8)

第2期 (第88図)

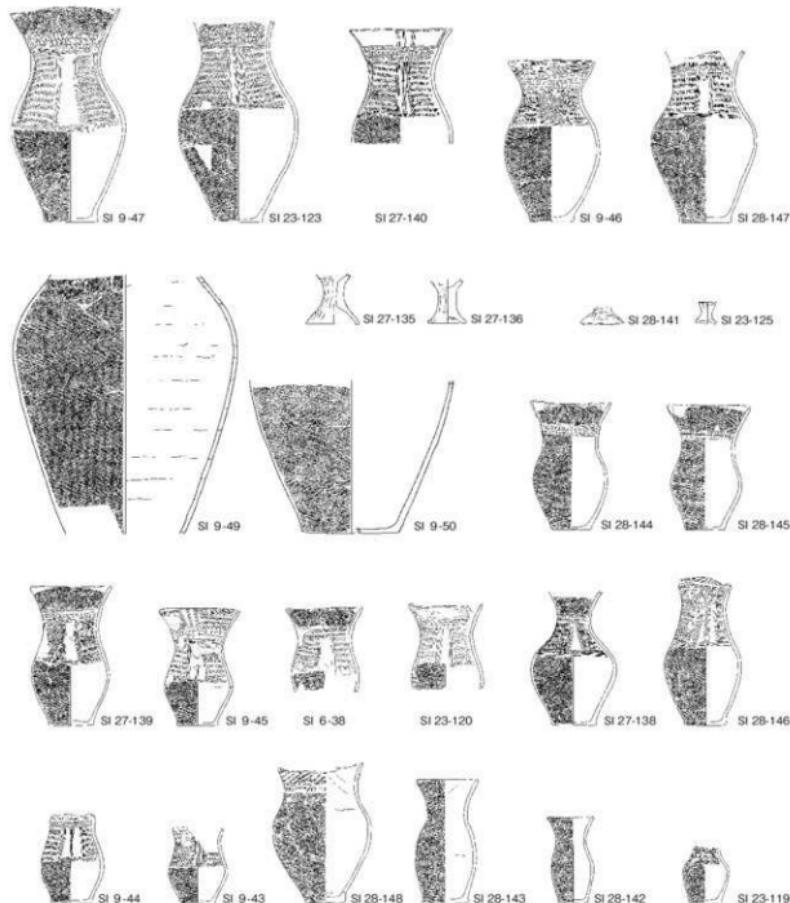
中形の土器にⅡ文様帯の分化がなくなる時期で、第2群の十王台式土器として第31号堅穴建物跡出土の166・167を挙げた。166は、1条の押圧隆起線下に櫛歯による横走文を1段施し、その後スリットによる縦区画充填波状文を施している。十王台式土器は、Ⅲ文様帯に縄文を施した後に、Ⅱ文様帯とⅢ文様帯の区画として横走文、波状文、下向き連弧文などを全周させることが典型となる。しかし、この個体は、区画の施を行わず、Ⅱ文様帯に施した後にⅢ文様帯に縄文を施しておる。十王台式土器に多くみられる作法に則ったものではない。十王台式土器の範型となるイメージが定まっていない段階のものと考えることができる。166は、後の段階に統く製作作法が確認できるものである。164は、櫛歯による文様構成は長峯(新)式のものと考えられるが、櫛歯の数が6本と多く、二軒屋式の影響を受けたものと考えられる。169は口縁が広がらない器形で、他の土器と比べて非常に重量感がある土器である。大洗町長峯遺跡第42号住居跡出土土器¹³⁾や、同町鷺釜遺跡第4号堅穴建物跡出土土器¹⁴⁾に類似した器形を確認できる。これら二つの土器には掲文が入れられているが、169は1条の隆起下に縄文を施しているのみである。168は、二軒屋式土器で、胎土は在地のものではなく搬入品である。

第2期の遺構は、第21・31号堅穴建物跡である。第31号堅穴建物跡は、前段階の土器である165が埋め戻しの際に投棄されており、第1期直後の建物跡と考えられる。第21号堅穴建物跡に関しては、埋め戻された下層の出土遺物全体から判断した。このほか、第1期から第2期の間に比定できる遺構として、第2号堅穴遺構と第22号土坑がある。第22号土坑出土の179(第67図)は大形広口壺の胴部以下が土坑に埋設されていたもので、附加条一種(附加1条)縄文が羽状に施文されている。胎土は168などにみられる細緻を含んだもので、二軒屋式文化圏からの搬入品と考えられる。

第3期 (第89図)

この時期になると十王台式土器の定型化が進み、小形のものも含み、ほとんどの土器がスリットによる縦区画充填波状文を持つようになり、文様帯の区画や構造が安定する。一方で、中形土器の観察でも確認できたように、各文様帯への施文方法にはバリエーションがみられる。Ⅰ文様帯の施文パターンには、附加条縄文、櫛歯による横走波状文、スリット、スリットと波状文の組み合わせが確認できる。Ⅱ文様帯のスリットは、2条のものと3条のもの、2条のスリット間に山形文を施文するもの、スリットが波状のものなどがある。そのほか、第30号堅穴建物跡出土の163(第60図)のように2条のスリット間に格子目文を施すものもこの時期のものと考えられる。49・50のような大形の土器もしっかりと焼成されており、焼成技術の向上がみられる。

また、十王台式土器にも搬入されたものが確認できる。十王台式土器には、那珂川流域で製作されたも



第89図 第3期の土器 (S : 1/8)

のと久慈川流域以北で製作されたもので違いが確認されている。久慈川流域の土器の胎土には金雲母が含まれていることや、底面の圧痕に久慈川流域では砂目痕が多く、那珂川流域では布目痕が多いことが挙げられる。そのほか、久慈川流域以北の十王台式土器は、大半がスリットが2条で構成され、那珂川流域では3条のものが多くみられる。久慈川流域以北の十王台式の遺跡では、ほぼ在地の十王台式土器で占められるに対し、那珂川流域では久慈川流域で製作されたと考えられる十王台式土器が一定数みることができる。このことは十王台式土器の移動が久慈川流域から那珂川流域への一方的に限り盛んに行われていた結果と捉えられており¹⁵⁾、当遺跡でもその状況を確認することができる。46は、胎土に金雲母を含み底

面に砂目痕がつくもので、久慈川流域で製作されたものである。

第3期とした土器群の中でも、古い要素を持った土器がいくつか確認できる。38・163は、隆帯下に縄文原体で刺突を行うものであり、この段階ではほとんどみられないものである。147は、文様構成は完全に本期のものであるが、器形は前段階のものとみられるものである。120は、口唇部に5単位とみられる突起をもつものであるが、次の時期によくみられる突起とは形状を異にする、天王山式土器にみられるような突起となっている。

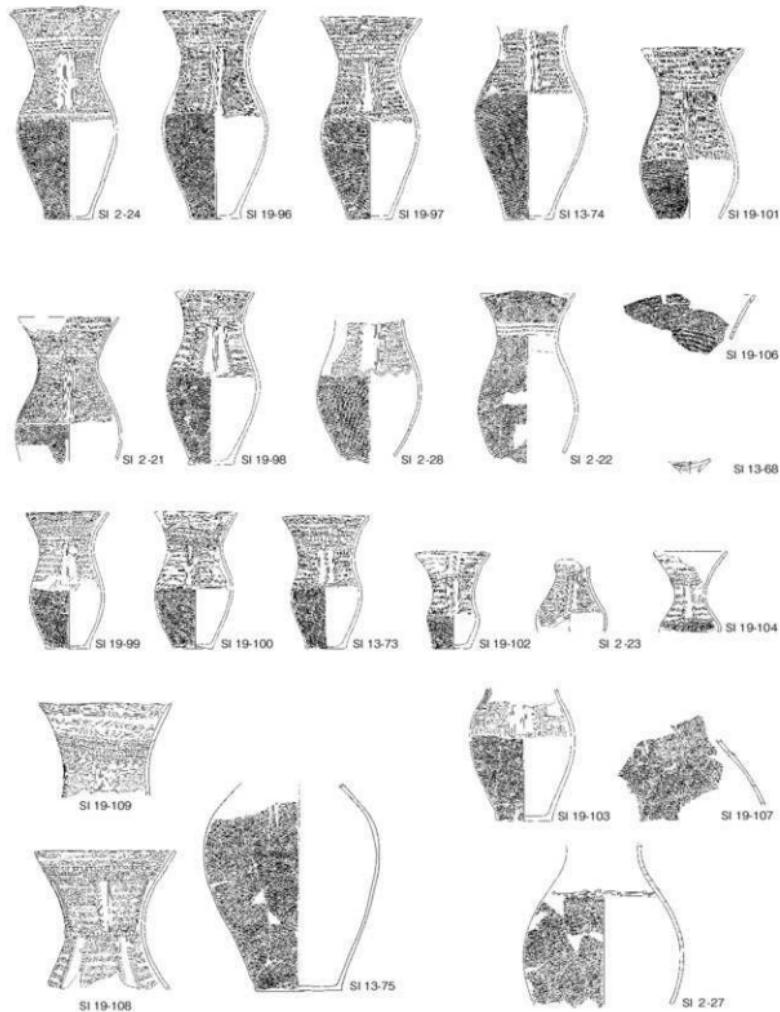
十王台式以外のものとして、119・142・143・148がある。119は、胎土は在地のものであるが、7本櫛歯で施文された二軒屋式土器である。142・143は、全体に附加条縄文を施文しただけの土器で、器形は十王台式土器とは異なり底部が外側に張り出すようになっている。時期は古くなるが類例として、長峯遺跡第42号住居跡出土遺物（第46図3）¹⁶がある。特筆することとして、内面に赤色顔料が付着していることが挙げられる。特に142では明確に認められ、顔料の容器として用いられていたことが推測される。148は、素縁で撚糸文を施文された、十王台式の組成には入らない甕である。施文方法が異なる上、時期は遅るが、美浦村陣屋敷遺跡第32号住居跡出土遺物（第104図571）¹⁷や、土浦市根鹿北遺跡第22号住居跡出土遺物（第48図2・3）¹⁸に同じ器形を確認することができる。しかし、これらの土器の器形もそれぞれ在地の土器型式の中に含まれないようで、さらに南方の臼井南式やその系譜を引き継いだ土器の影響を受けたものと考えられる。148はその流れを受けた土器として捉えた。また、146は施文の構造は十王台式のものであるが、櫛歯が太いことや附加条一種（附加2条）が施文されていることから、槽式や二軒屋式の影響を受けて製作された土器と考えられる。

第3期の遺構数は格段に多くなり、第6・9・12・23・27・28・30号竪穴建物跡が挙げられる。この中で第6・30号竪穴建物跡は、出土遺物の様相から古い段階に位置づけられる。

第4期（第90図）

十王台式土器の規格化がピークに達する。中形の土器の製作手順も均一化され、I文様帯には櫛歯による波状文、隆帶には凹凸の弱い押圧隆起線が3・4条、II文様帯にはスリットによる縱区画充填波状文、III文様帯には附加条二種または輪縄不明の羽状構成が同じように施文される。櫛歯は4~6本で、スリットによる区画は3~5区画である。21・24・101のように口唇部に4単位の突起が付されるものが散見できる。106のように複合口縁を持つものもある。複合口縁を持つ十王台式土器は、山内清男氏の『日本先史土器図譜』¹⁹でも紹介されており、大洗町一本松遺跡の第II調査区第45号住居跡（第152図114）²⁰などで出土しているが、組成に含まれる割合は極めて稀である。また、前段階同様、久慈川流域で製作されたものも当遺跡に搬入されている。28は、胎土に金雲母を含み、II文様帯が2条のスリットで区画されたもので、II文様帯とIII文様帯の区画として山形文が採用されている。久慈川流域では鈴木素行氏の編年による「小祝式櫛巾段階」になると、II文様帯とIII文様帯の区画には下向き連弧文が採用されるようになる²¹のだが、28の山形文区画はその前段階に位置づけられるものであろう。第25号竪穴建物跡出土の133（第49図）も、28と同じ段階と考えられる。当遺跡では、第24号竪穴建物跡出土の127（第47図）が「小祝式櫛巾段階」に比定できるものであるが、遺構に伴うものは確認できていない。小形土器も同様に均一化されており、大形土器の焼成の状態から前段階よりさらに焼成技術が向上したものと推測される。

他地域との交流をうかがわせる土器は本段階でも確認することができる。27は、スリットが入らず、頭部の横走文上にボタン状突起が張り付けられるもので、二軒屋式土器の特徴を持っている。107は、スリットによる縱区画充填波状文が施文されているが、27同様ボタン状突起が張り付けられ、胴部には附



第90図 第4期の土器 (S : 1/8)

加条一種（附加2条）縄文が羽状に施文されており、二軒屋式の影響を受けて製作された土器である。103は、文様構成は十王台式土器であるが、太い櫛歯状工具が用いられており、櫛式の影響を受けたものと考えられる。

第4期の遺構も前期から引き続き多く確認され、第2・11・13・15・16・19・22・24・25号堅穴建物跡が挙げられる。このほか、第3期から第4期の間に比定できる遺構として、第5・10・14・17・18号堅穴建物跡がある。

これらの時期の変遷を先学の研究成果と対応させると、表9のように整理されよう。鈴木素行氏の武田西塙段階（新）からは古墳時代に相当すると考えられている²²⁾ことから、今回調査を行った十王台式土器を有する集落は概ね3世紀代に営まれていたと考えられる。

表9 十王台式土器細分の対比

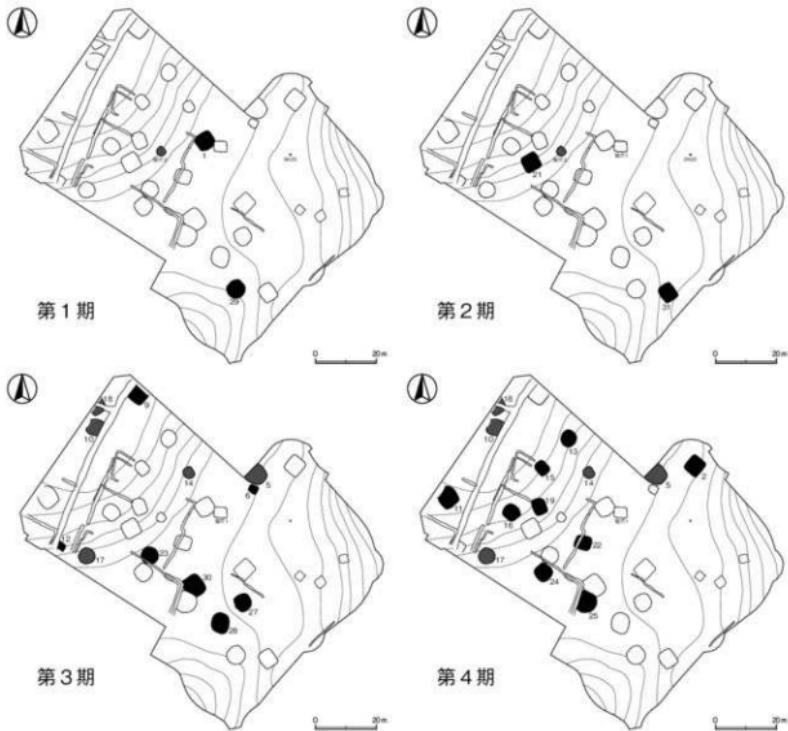
本論	弥生時代研究班 ²³⁾	鈴木（正）・海老澤 ²⁴⁾	鈴木（素） ²⁵⁾
第1期	1a式	1a式	1a式
第2期	1式	1式十王台段階	大煙式
第3期		1式紅葉段階	武田式西塙段階（古）
第4期	1（新）式	2式矢倉段階	武田式西塙段階（新）

（3）弥生時代後期後半の集落の様相（第91図）

前項で、当遺跡の弥生時代後期後半土器様相が、4期に渡り変遷することを確認した。ここでは、確認した集落の様相を概観する。

第1期は当地に集落が営まれ始めた時期である。今回の調査では、その前の段階の弥生土器は出土していない。第1・29号堅穴建物跡が該当し、調査区中央部・南部に展開する。詳細は付章に譲るが第29号堅穴建物跡出土の158の底面には、キビ・イネの可能性がある圧痕を確認している。現段階では可能性を示すのみであるが、新しい土地に移住した弥生人が農耕を行ったことが考えられる資料である。第2期には第21・31号堅穴建物跡が該当し、第1期の2棟からやや場所を移して西部・南部に展開している。第2号堅穴建物は、倉庫的な役割を考えているが、第1・21号堅穴建物跡のどちらかに付随する施設であろう。また、第22号土坑は、上部が削平されており明確にはできないが土器棺墓の可能性がある。第3期になると、建物数が増加し、第4期にピークを迎える。第91図からは、集落の範囲が北西に移動していく様子が伺える。第4期を境に、その後の遺構は確認できない。前述した127や古墳時代前期の土師器が、自然堆積した遺構覆土上層から出土しており、集落は引き続き営まれていたと考えられる。当遺跡の範囲は、今回の調査区域より南側の彰考館や徳川ミュージアムの敷地一帯まで広がっており、古くは「徳川家宅地内弥生遺跡」と呼称されていた。また、調査区北東の谷津を挟んで対岸にある護国神社の境内には植松遺跡があり、十王台式土器が散布する弥生時代の遺跡とされている²⁶⁾。集落はこれらの場所に移動したものと考える。

今回確認した25棟の堅穴建物跡の形状は、隅丸方形や隅丸長方形のものが多いが、円形や楕円形のものも含まれている。全体を確認できなかったものも含め5棟が円形または楕円形で、第2期以外の時期で確認できる。このことから、形状の違いは時期を示すものではなく、系統を異にする集団が存在していたことを示したものと考える。炉は25棟中24棟で確認しており、そのうち8棟から炉石を検出している。うち5棟からは据えられた状況で出土しており、各時期において確認できる。これら5つの炉石は、それぞれ炉床の入り口側の際に主軸と直交する形で据えられており、定型化された設置方法であったことが伺



第91図 見川塚畠遺跡における集落の変遷

える。また、炉石が確認されなかつた16棟のうち、5棟の炉で被熱していない粘土を確認した。被熱しておらず、炉床上に設置されていることから、廃絶時に置かれたものである。時期は第3・4期に限定される。類例を見つけることはできなかつたが、注目すべき事例である。

(4) 遺物から確認できる特徴

出土遺物の中に赤色顔料の利用を示す遺物が確認できた。容器として用いられた142や、赤彩された土器片114（第42図）や、顔料を磨った可能性がある磨・敲石Q14（第45図）である。赤彩土器や顔料の付着した石器は、矢倉遺跡²⁷⁾やひたちなか市武田西塙遺跡²⁸⁾で確認されているが、資料は少ない。当遺跡でも出土したこと、那珂川流域の十王台式文化圏で赤彩が行われていたことがより確実なものとなつた。石器は、炉石のほかは磨石・敲石が主である。金属製品は出土していないが、金属器を研いだことをうかがわせる砥石が出土しており、鉄器等を利用していったことが推測できる。

また、自然科学分析により、土器の底面に付いた布目压痕に、平織や綾織の編組製品のものが含まれることが判明した。今回は確認した事例が少ないため時期による技術の変遷等の分析は難しいが、データを蓄積することによってそうしたことも明らかになる可能性がある。

4 古墳時代

古墳時代の遺構は、第3号竪穴遺構のみであったが、前述したように弥生時代の竪穴建物跡の覆土上層からは4世紀代の土師器片が複数出土しており、周辺に集落が営まれていたことが考えられる。第3号竪穴遺構は、貯蔵穴として設置されたと推測されるピットはあるが、炉や柱穴が存在せず、床面に明確な硬化がみられない。長軸は6mを超え、掘り込みも50cm程度確認できたが、建物として機能したと判断できなかった。遺構に伴う遺物もほとんど確認できないことから、何らかの理由で構築を中断してしまったものと推測した。出土した炭化材は、埋め戻しの際に投棄されたもので、樹種は分析の結果アカガシ亜属に同定される。建築部材として利用されることが多いものであり、想像の域を出ないが、柱として利用するために持ち込まれた可能性がある。

5 平安時代

平安時代の竪穴建物跡が3棟確認できた。これらは9世紀前葉および中葉に比定でき、全てコーナー部に竈を持つ建物跡である。駒澤悦郎氏らの分析によるとコーナー部に竈を持つ「壁隅竈の竪穴建物」は、集落の外縁部にあたる台地縁辺部に構築されている傾向がある²⁹⁾。駒澤氏はこれらの竪穴建物が外界との接触地帯を選択して構築された可能性を述べている。当遺跡で確認した3棟の竪穴建物跡も台地縁辺部に構築されており、同様の可能性を指摘することができる。一方で、壁隅竈の竪穴建物跡は、壁の中央部付近に竈が付設される一般的な竪穴建物跡群の中に少数派として確認されることが多いのであるが、当遺跡では壁隅竈の竪穴建物跡のみが存在し、周辺に一般的な竈の竪穴建物跡の存在が確認できなかった。集落の構成としては特殊なものと考えられる。また、特徴的な遺物として、須恵器の短頸壺の蓋や灰釉陶器の瓶、灯明具として使用されたと考えられる須恵器の坏がある。ほかに遺構には伴わないが灰釉陶器の淨瓶が出土しており、これらの遺物を総じてみると仏教との関りが想起される。仏教系遺物と壁隅竈の竪穴建物の関係は、つくば市下大井遺跡でも確認することができる。下大井遺跡では、仏教系遺物が出土する壁隅竈の竪穴建物跡のほか、仏堂の可能性がある四面庇の掘立柱建物跡を確認している³⁰⁾。今回の調査ではそうした施設を確認することはできなかったが、当遺跡における平安時代の集落が、下大井遺跡の集落と同様の性格を持ったものであった可能性がある。

6 終わりに

今回の調査区域では9世紀後葉以降、700年以上に渡り明確な人間の痕跡を確認することができなかった。次に確認できるのが江戸時代で、塚が構築されている。トレンチによる堆積状況の確認のみであり、特徴的な遺物の出土もないため、当時の状況を判断することは難しい。そのほか時期を比定できた遺構は無く、現在に至るまでほとんどの手が入った様子がない。そのため、弥生時代や平安時代の集落が良好な状況で遺存しており、その一部を確認できたことは大きな成果である。一方で、得られた情報量が膨大であり、検討に至らない点が多く残った。各時代の竪穴建物の構造や軸方向の検討、石器や土製品の分析を交えた生業の検討、近隣遺跡との関係の検討などが挙げられる。こうした課題の検討を重ねていくことで、水戸市域の歴史がより明らかになっていくことが期待できる。

註

- 1) 中村信博ほか「天矢場－民間開発に伴う天矢場遺跡第2次発掘調査報告書－」『茂木町埋蔵文化財調査報告書』第2集
2002年3月
- 2) 水戸市教育委員会「水戸市埋蔵文化財分布調査報告書」1999年3月
- 3) 山内清男「十王台式」「日本先史土器図譜」第1輯 1939年
- 4) 鈴木正博「『十王台式』理解のために－分布圏西部地域を中心にして』『常磐台地』7号 常磐台地研究会 1976年5月
- 5) 弥生時代研究会「茨城後期弥生式土器編年の検討（Ⅲ）」「研究ノート」3号 財団法人茨城県教育財團 1993年7月
- 6) 海老澤稔「茨城県における弥生後期の土器編年」「要良岐考古」第22号 要良岐考古同人会 2000年5月
- 7) 稲田健一編「舟塗道路」「（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告」第32集 2005年3月
- 8) 鈴木素行編「武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編」「（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告」第15集 1998年1月
- 9) 飯島一生「北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書 I 矢倉遺跡・後日原遺跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第135集 1998年3月
- 10) 鈴木正博ほか「リュウガイ遺跡」高萩市教育委員会 1976年3月
- 11) 鈴木正博「『鉢釜』研究抄」「要良岐考古」第4号 要良岐考古同人会 1982年3月
- 12) 海老澤稔「長峯式土器について」「研究ノート」創刊号 財団法人茨城県教育財團 1992年7月
- 13) 大洗町長峯遺跡調査団「茨城県大洗町長峯道路」「大洗町文化財調査報告書」第4集 1973年12月
- 14) 天野早苗「鉢釜遺跡 行人塚古墳 都市計画道路駅前海岸線整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財団文化財調査報告」第421集 2017年3月
- 15) 前掲註8)
- 16) 前掲註13)
- 17) 陸平調査団「陣屋敷遺跡」「陸平研究所報告」1 1992年12月
- 18) 開口満編「根鹿北遺跡・栗山窯跡発掘調査報告書」「土浦市今泉塗園拡張工事事業地内埋蔵文化財調査報告書」「土浦市教育委員会 1997年3月
- 19) 前掲註3)
- 20) 井上義安編「一本松遺跡」茨城県大洗町一本松埋蔵文化財発掘調査会 2001年3月
- 21) 前掲註7)
- 22) 鈴木素行「茨城県域「十王台式」の土器と社会」「公開講座「ひたちなか市の考古学」第6回 弥生時代後期の北関東」ひたちなか市埋蔵文化財調査センター 2014年1月
- 23) 前掲註5)
- 24) 前掲註6)
- 25) 鈴木正博「茨城弥生式の終焉－「続十王台式」研究序説－」「古代」第100号 早稲田大学考古学会 1995年9月
海老澤稔「茨城県城里町北方窓の上遺跡出土の弥生土器について－住居跡出土の穿孔された土器の性格－」「研究ノート」第14号 公益財団法人茨城県教育財團 2017年3月
- 26) 佐々木義則編「武田道路群 総括・補遺編」「（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告」第40集
2010年3月
- 27) 前掲註2)
- 28) 前掲註9)
- 29) 鈴木素行編「武田西塙遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編」「（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告」第21集 2001年3月
- 30) 駒澤悦郎ほか「茨城県内における壁開窓の竪穴建物について（2）－特異な窓を付設した竪穴建物の分析（1）－」「研究ノート」第14号 公益財団法人茨城県教育財團 2017年3月
- 31) 烏田和宏「下大井遺跡2 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財団文化財調査報告」第197集 2003年3月

付 章

茨城県水戸市見川塚畠遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

茨城県水戸市見川に所在する見川塚畠遺跡は、弥生時代の竪穴建物跡や溝跡、土坑の他、平安時代の遺構、遺物も検出される複合遺跡である。

本報告では、弥生時代後期から古墳時代前期に帰属するとされる竪穴建物跡から出土した炭化材の同定を実施し、当時の木材利用について検討する。また、弥生時代後期後半の土器に確認された圧痕を対象として、マイクロスコープ観察を実施し、圧痕の由来について検討する。

2 炭化材同定

(1) 試料

試料は、第3号竪穴遺構(SI26)から出土した炭化材1点(炭化材①)である。

(2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・極目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

(3) 結果

炭化材は、広葉樹のコナラ属アカガシ亜属に同定された。解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射乳材で、道管は単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-15細胞高のものと複合放射組織がある。

(4) 考察

弥生時代後期から古墳時代前期の範囲に入る第3号竪穴遺構から出土した炭化材①は、径20-30cmとされ、出土状況から建築部材に由来する可能性がある。分析試料として採取された部分は、土壤塊に最大で2cm角程度の炭化材片が多数含まれている状況であり、破片間の接合関係は確認できなかった。最も大きい破片で5年分の年輪が認められる。この炭化材片は、常緑広葉樹のアカガシ亜属に同定された。確認のために、全ての破片について樹種を同定したが、同定可能な大きさを持つ破片10片は全てアカガシ亜属

であった。

アカガシ亜属の木材は比較的重硬で強度が高い材質を有しており、建築部材として強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。茨城県内で弥生時代から古墳時代の建築部材について樹種同定した事例をみると、沿海地でアカガシ亜属などの常緑広葉樹が多いのに対し、内陸部では落葉広葉樹のクヌギ節・コナラ節を主体とした木材利用であり、植生の違いを反映したことが指摘されている（高橋、2012）。水戸市周辺では、東に隣接するひたちなか市の半分山遺跡、ほんばり山遺跡、猪谷津遺跡、船窪遺跡、武田原前遺跡等で弥生時代から古墳時代の住居跡出土炭化材について樹種同定が実施され、遺跡によってクヌギ節主体となる結果も見られるが、全体的にアカガシ亜属、モチノキ属、ヤブツバキなどの常緑広葉樹が目立つ結果となっている。水戸市内では同時期の調査事例がほとんど無いが、今回の結果から少なくとも水戸市内まではアカガシ亜属が生育しており、その木材を建築部材等に利用していたことが推定される。

3 土器圧痕観察

(1) 試料

試料は、弥生時代後期後半の土器5点（SI23（122）、SI29（156）、SI29（158）、SI28（144）、SI9（46））の底部に確認された圧痕11箇所である。SI23（122）では、葉圧痕と楕円状圧痕1箇所を対象とする。SI29（156）では、葉圧痕と編組製品圧痕1箇所、楕円状圧痕1箇所を対象とする。SI29（158）では、楕円状圧痕1箇所、卵状圧痕1箇所を対象とする。SI28（144）では、編組製品圧痕と不定形圧痕1箇所、楕円状圧痕1箇所を対象とする。SI9（46）では、不定形圧痕1箇所を対象とする。

(2) 分析方法

面相筆を用いて、圧痕内部に充填する泥を除去する。クリーニング後の圧痕を肉眼およびマイクロスコープ（株式会社キーエンス製：VHX-1000）で観察する。

SI23（122）、SI29（156）、SI29（158）の楕円状圧痕については、マイクロスコープ深度合成・3D合成処理を実施する。SI28（144）、SI9（46）は、土器接合後の状態であることから、マイクロスコープ観察を実施する。

(3) 結果

・SI23（122）（図版2）

葉圧痕を形成する物質は、双子葉類の葉の裏面で、広葉樹のカシワ（*Quercus dentata* Thunb. ex Murray : コナラ属コナラ亜属）の可能性がある。葉圧痕は、径7.2cmの円形を呈す土器底部外面全面に確認され、先端や基部、葉縁は確認されない。葉脈痕は凹状で細脈まで明瞭に確認されることから、葉裏と考えられる。主脈（1次脈）は、長さ6.9cm、幅2mm、深さ1mmで、側脈（2次脈）は、4対が主脈に対して45～65°の角度ではなく平行配列し、最長4.3cm、幅・深さ0.5～0.7mm、上下側脈間は0.7～2.6mmを測る。3次脈は側脈に対して概ね垂直に配列し、上下の側脈に到達し連結する。4次脈や5次脈等も連結し、4～5角形の微細な網目模様を成す。主脈より計測した半分の最大幅は4.2cmであることから、圧痕を形成する葉の幅は8.4cm以上と推測される。

幅8cm以上の大型の葉をもつ所有現生標本（カシワ、ナラガシワ、ミズナラ、ヤマグワ、カジノキ、コウゾ、ホオノキ、クズ、トチノキ、ヤマブドウ、クロカンバ、ケンボナシ等）や濱野（2005）、田中（2008）

等を参考に、圧痕との比較を試みた結果、側脈の間隔・角度や細脈まで葉裏に隆起する点でカシワに最も似ることがわかった。ただし、同定根拠となる葉の先端や基部、葉縁が確認できないため、葉裏圧痕はカシワの可能性にとどめている。

一方、楕円状圧痕を形成する物質は、種類、部位ともに不明であった。圧痕は、土器底部外面周縁部に位置し、長さ2.8mm、幅1.7mm、深さ0.8mmの歪な楕円形で一端が突出する。表面は粗面・不明瞭で模様等は認められず、土器胎土を構成する砂粒が確認される程度である。

・SI29 (156) (図版3)

葉圧痕を形成する物質は、双子葉類の葉の裏面で、広葉樹と考えられるが分類群は不明である。葉圧痕は、径8.8cmの円形を呈す土器底部外面全面に確認され、先端や基部、葉縁は確認されない。葉脈痕は凹状で2側脈まで明瞭に確認され、3次脈は細溝状に確認されることから、葉裏と考えられる。主脈は、長さ6.1cm、幅3~3.5mm、深さ0.5mmで、中央よりややずれた位置に幅1mmの稜があり、2本にみえる。側脈は、3対が主脈に対して40°の角度ではば平行配列し、最長6.3cm（うち2.5cmは編組製品痕が覆う）、幅1mm、深さ0.3~0.4mm、上下側脈間は12~2cmを測る。一部の側脈には主脈と同様に稜があり、2本にみえる。3次脈は主に土器底部外面周縁に確認され、側脈に対して垂直に配列し、上下側脈に到達し連結する。4次脈等細脈は不明瞭である。主脈より計測した半分の最大幅は5.9cmであることから、圧痕を形成する葉の幅は12cm以上の大型の葉をもつ分類群と推測される。ただし、主脈や側脈の一部が2重線を呈すことから、人による線状痕を含む可能性がある。

編組製品圧痕は、土器底部外面中央約4cm範囲に確認され、重複する葉脈痕は不鮮明で一部消えている。圧痕は、幅0.5mm程度の細糸状が縱横交互に浮き沈みさせて編まれた左右対称な平織状で、微細な網目模様を呈す。圧痕を形成する編組製品は布製品等の可能性がある。

楕円状圧痕を形成する物質は、種類、部位ともに不明であった。圧痕は、土器底部外面周縁部より0.6cmに位置し、長さ4.6mm、幅2.7mm、深さ1.7mmの楕円形で表面は粗面・不明瞭である。圧痕のマイクロスコープ深度合成、3D合成処理を実施した結果、イネ表面にみられる2本の縱隆条がかろうじて確認されたが、一端1/3付近で段差があり急に浅く細まることから、不明としている。

・SI29 (158) (図版4)

楕円状圧痕を形成する物質は、栽培種のイネ (*Oryza sativa L.* : イネ科イネ属) の胚乳(米)の可能性がある。圧痕は、土器底部外面周縁部より1.4cmに位置し、長さ6.0mm、幅3.2mm、深さ1.7mmの楕円形で、一端が斜切状であることから基部の胚の可能性がある。表面は粗面・不明瞭である。圧痕のマイクロスコープ深度合成、3D合成処理を実施した結果、イネの表面にみられる2本の縱隆条がかろうじて確認された。

卵状圧痕を形成する物質は、栽培種のキビ (*Panicum miliaceum L.*) *Oryza sativa L.* : イネ科キビ属) の果実(背面)の可能性がある。圧痕は土器底部外面周縁部に位置し、長さ6.0mm、幅2.7mm、深さ0.7mmの広卵形で、表面はやや平滑である。マイクロスコープ深度合成、3D合成処理を実施した結果、全体的に丸みを帯びることから、背面の可能性がある。また、正中線上の一端が尖ることから、基部の可能性がある。

・SI28 (144) (図版5)

編組製品圧痕は、土器底部外面全面に確認され、幅0.5mm程度の細糸状が縱の割合が多く編まれた左右非対称な継織(斜文織)状で、微細な縱長の網目模様を呈す。圧痕を形成する編組製品は、SI29 (156)とは技法が異なる布製品等の可能性がある。

不定形圧痕を形成する物質は、岩片の可能性がある。圧痕は土器底部外面周縁部に確認され、長さ4.8mmと4.7mm、幅2.5mm、深さ0.6mmのL字状を呈す。一端に径2.5mmの岩片が残る。土器胎土を構成する細繙と考えられ、この細繙の移動により圧痕が形成された可能性がある。

楕円状圧痕を形成する物質は、種類、部位ともに不明であった。圧痕は、土器底部外面周縁部より1.6cmに位置し、長さ4.2mm、幅2.9mm、深さ1.4mmの楕円形で表面は粗面・不明瞭である。

・SI 9 (46) (図版5)

不定形圧痕を形成する物質は、種類、部位ともに不明であった。圧痕は、土器底部外面周縁部より0.8cmに位置し、径5mm、深さ1mmの不定形で表面は粗面・不明瞭で模様等は認められず、土器胎土を構成する砂粒が確認される程度である。

(4) 考察

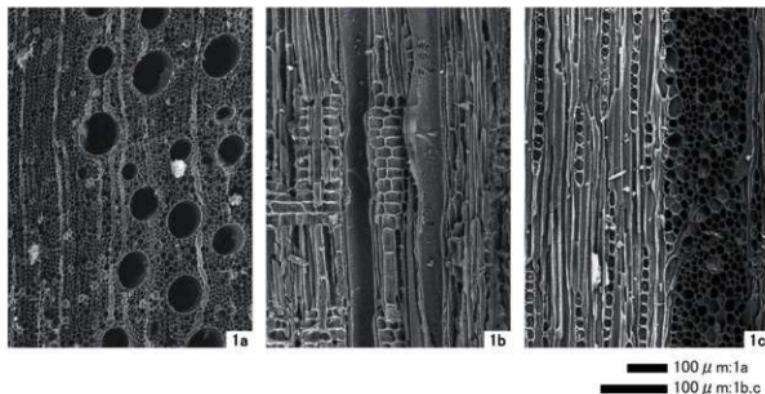
弥生時代後期後半の土器底部外面に確認された圧痕のマイクロスコープ観察の結果、圧痕形成物質は、SI23 (122) が双子葉類（カシワの可能性）の葉裏、SI29 (156) が双子葉類（広葉樹？）の葉裏および人による葉脈状痕の可能性と平織状編組製品、SI28 (144) が綾織状編組製品、SI29 (158) が栽培種のイネの胚乳（米）の可能性とキビの果実（背面）の可能性が指摘された。一方、SI28 (144) は岩片（細繙）の可能性、SI23 (122)、SI29 (156)、SI28 (144) の楕円状圧痕と、SI 9 (46) の不定形圧痕は、種類・部位ともに不明であった。

SI23 (122) の葉圧痕は、広葉樹のカシワの可能性が指摘された。カシワは、沿海地や丘陵の日当たりの良いやせ地や疊地などに生育する落葉高木で、現在の本地域にも分布し、コナラやミズナラと雜種を作りやすい。大形の葉は食物を蒸すとき等に利用され、現在でも広く柏餅に利用される。当時の土器製作時において、大形の葉をもつカシワが選択的に採取・利用された可能性は充分に考えられる。

また、SI23 (122) と SI29 (156) の土器底部外面全面に確認された葉圧痕は、葉脈痕が凹状であることから、土器成形後焼成前の段階で、土器底部に葉裏が接していたことが示唆される。さらに、SI29 (156) は、葉圧痕に編組製品圧痕が重なることから、葉裏の上に編組製品を置き、その上に土器を置いた可能性と、葉裏の上に土器を置いた後、土器を移動し編組製品の上に置き替えた可能性等が挙げられる。一方、SI29 (156) は、葉脈痕の一部が2重線を呈すことから、葉脈痕に沿って人が線状痕をつけた可能性がある。

引用文献

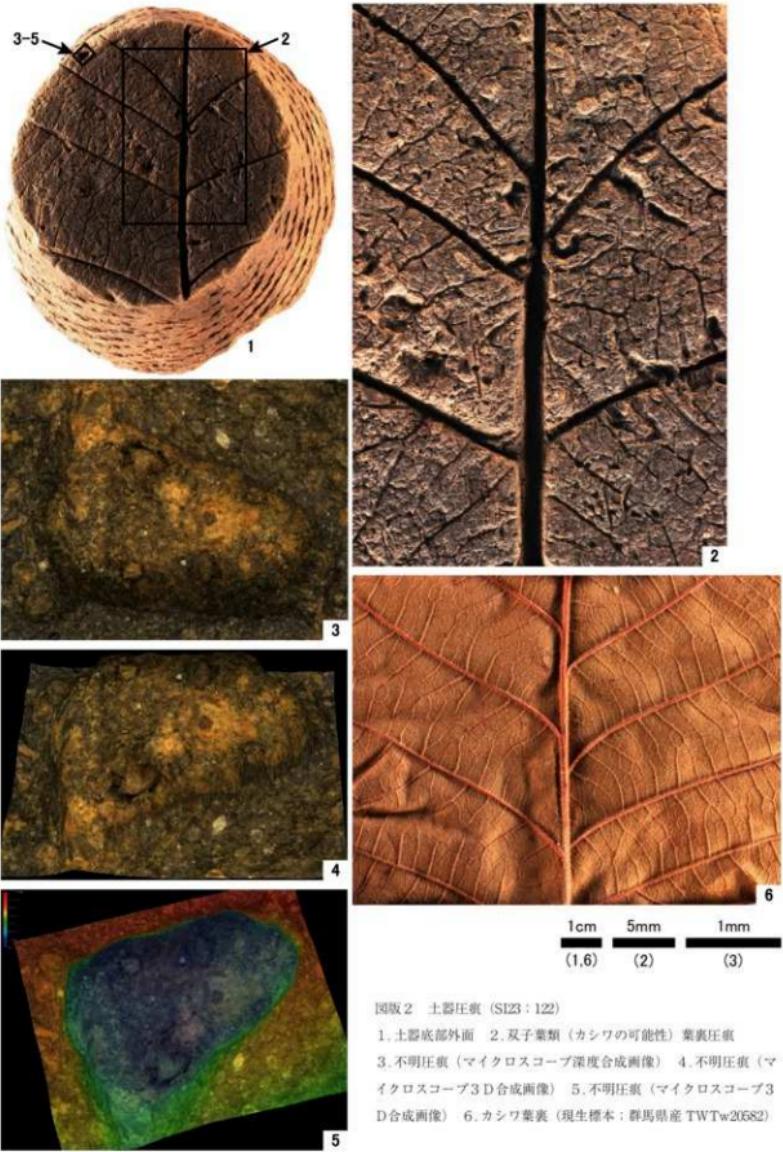
- 渢野国春。2005. 原寸図叢葉っぱでおぼえる樹木. 柏青社. 334p.
- 林昭三。1991. 日本産木材 跡微波写真集. 京都市立木質科学研究所.
- 伊東隆夫。1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料. 31. 京都市立木質科学研究所. 81-181.
- 伊東隆夫。1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料. 32. 京都市立木質科学研究所. 66-176.
- 伊東隆夫。1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料. 33. 京都市立木質科学研究所. 83-201.
- 伊東隆夫。1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料. 34. 京都市立木質科学研究所. 30-166.
- 伊東隆夫。1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料. 35. 京都市立木質科学研究所. 47-216.
- 島地謙・伊東隆夫。1982. 図説木材組織. 地球社. 176p.
- 高橋敦。2012. 北関東・甲信・茨城県・栃木県・群馬県・山梨県・長野県～「木の考古学 出土木製品用材データベース」.
- 伊東隆夫・山田昌久（編）。海青社. 157-178.
- 田中啓徳。2008. 落葉樹の葉. 山溪ハンディ図鑑 12. 山と溪谷社. 447p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編). 1998. 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯清（日本語版監修），海青社. 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]



図版1 炭化材

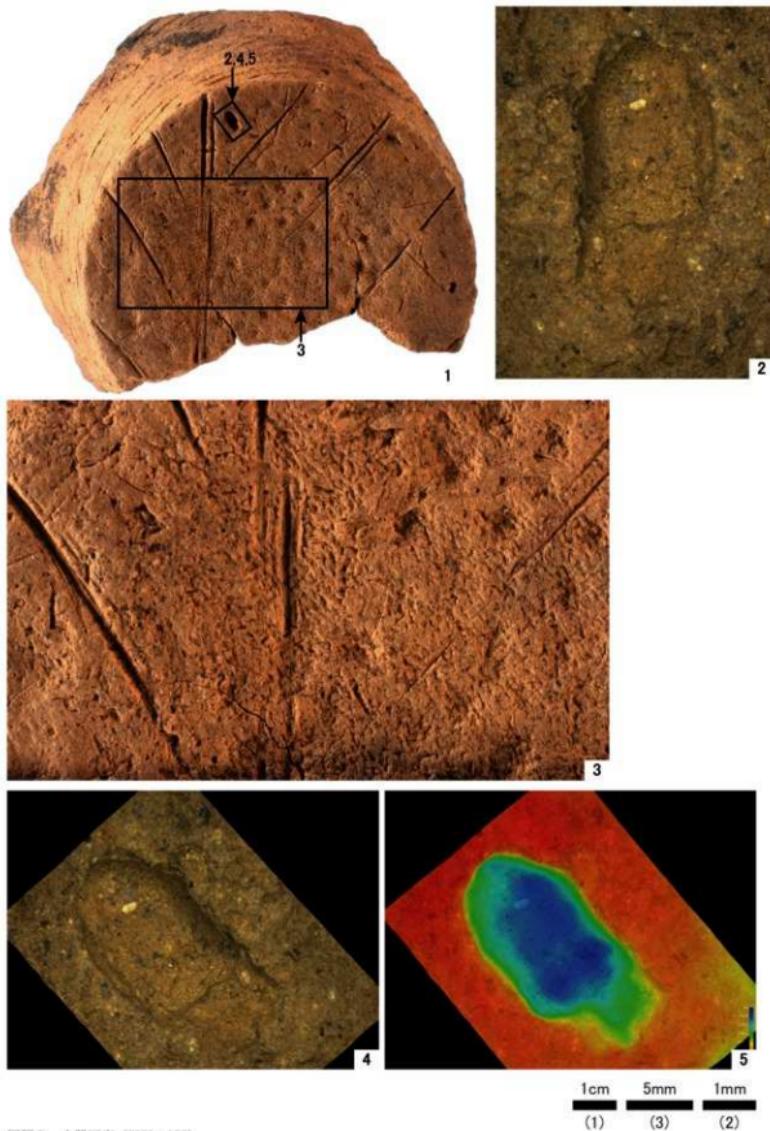
1. コナラ属アカガシ亜属（第3号竖穴遺構：炭化材①）

a: 木口, b: 極目, c: 板目



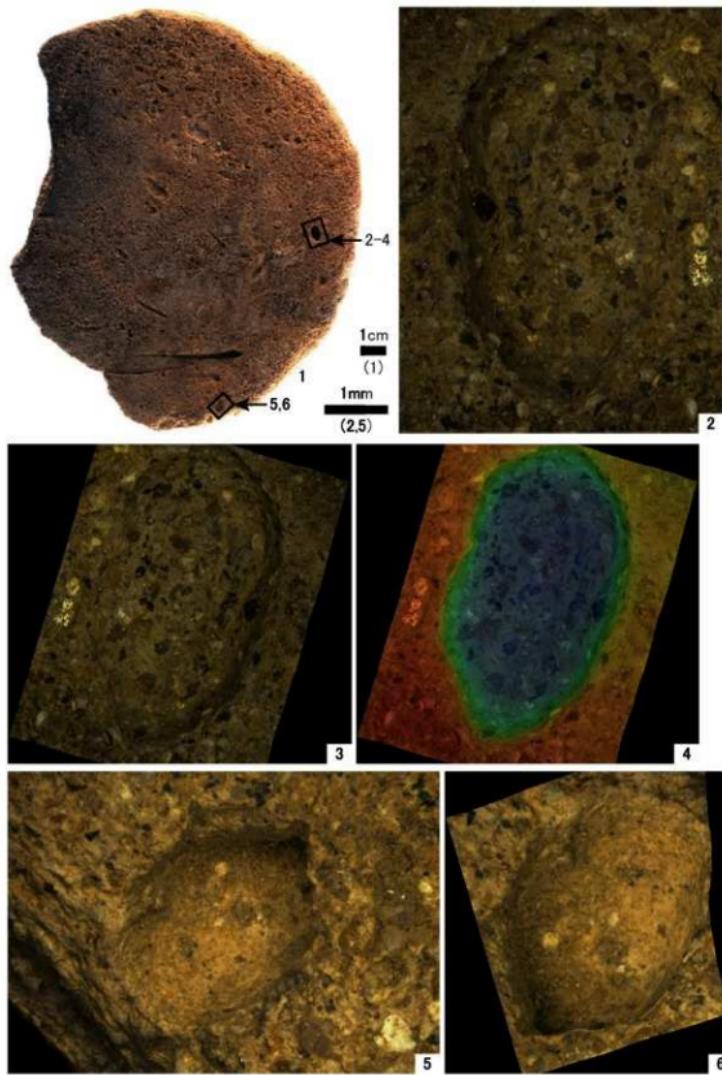
図版2 土器圧痕 (SI23:122)

1. 土器底部外面 2. 双子葉類（カシワの可能性）葉裏圧痕
 3. 不明圧痕（マイクロスコープ深度合成画像） 4. 不明圧痕（マイクロスコープ3D合成画像）
 5. 不明圧痕（マイクロスコープ3D合成画像） 6. カシワ葉裏（現生標本；群馬県産 TWTw20582）



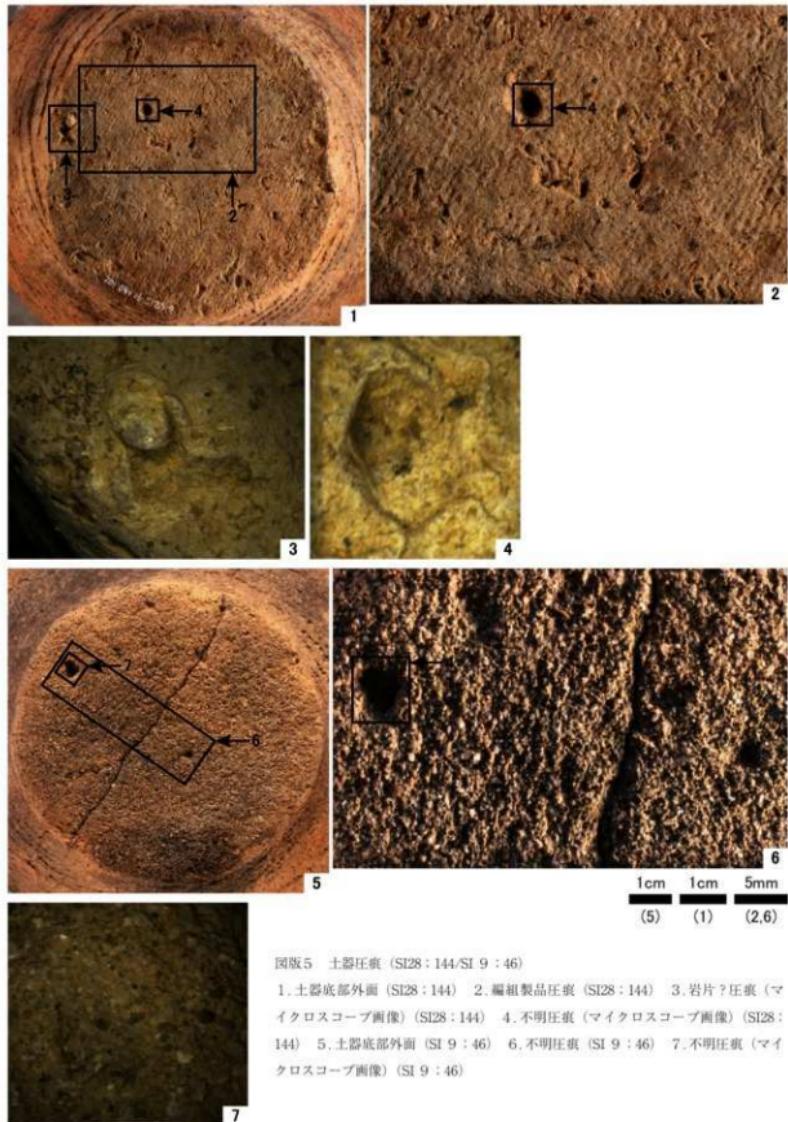
図版3 土器圧痕 (SI29 : 156)

1.土器底部外面 2.不明圧痕（マイクロスコープ深度合成画像） 3.双子葉類（広葉樹？）葉裏圧痕の上に編組製品圧痕が重なる 4.不明圧痕（マイクロスコープ3D合成画像） 5.不明圧痕（マイクロスコープ3D合成画像）



国版4 土器圧痕 (SE29:158)

1. 土器底部外面 2. 不明(イネ胚乳の可能性) 圧痕(マイクロスコープ深度合成画像) 3, 4. 不明(イネ胚乳の可能性) 圧痕(マイクロスコープ3D合成画像) 5. 不明(キビ果実の可能性) 圧痕(マイクロスコープ深度合成画像) 6. 不明(キビ果実の可能性) 圧痕(マイクロスコープ3D合成画像)



図版5 土器圧痕 (SI28:144/SI 9:46)

1. 土器底部外面 (SI28:144) 2. 編組製品圧痕 (SI28:144) 3. 岩片?圧痕 (マイクロスコープ画像) (SI28:144) 4. 不明圧痕 (マイクロスコープ画像) (SI28:144) 5. 土器底部外面 (SI 9:46) 6. 不明圧痕 (SI 9:46) 7. 不明圧痕 (マイクロスコープ画像) (SI 9:46)

写 真 図 版



遺跡全景（2016年度）



遺跡遠景（2016年度）

PL2



調査区全景
(2015年度)



調査区全景
(2016年度)



第1号遺物包含層
遺物出土状況



第2号竪穴建物跡
遺物出土状況



第9号竪穴建物跡
遺物出土状況(全体)



第9号竪穴建物跡
遺物出土状況(部分)

PL4



第9号竪穴建物跡



第10号竪穴建物跡



第11号竪穴建物跡



第13号竖穴建物跡



第15号竖穴建物跡



第16号竖穴建物跡

PL6



第17号竪穴建物跡



第19号竪穴建物跡
遺物出土状況(全体)



第19号竪穴建物跡
遺物出土状況(部分)



第19号竪穴建物跡



第21号竪穴建物跡



第23号竪穴建物跡

PL8



第24号竪穴建物跡



第25号竪穴建物跡



第27号竪穴建物跡



PL10



第29号竪穴建物跡
遺物出土状況(全体)



第29号竪穴建物跡
遺物出土状況(部分①)



第29号竪穴建物跡
遺物出土状況(部分②)



第30号竖穴建物跡



第31号竖穴建物跡
遺物出土状況(全体)



第31号竖穴建物跡
遺物出土状況(部分)

PL12



第31号竖穴建物跡



第22号土坑
遺物出土狀況



第3号竖穴建物跡
甕



第 8 号 穴 建 物 跡
窯 遺 物 出 土 状 況



第 1 号 塚



第 2 号 溝 跡



第1号竪穴建物跡
出土弥生土器



第28号竪穴建物跡
出土弥生土器



第31号竪穴建物跡
出土弥生土器



SI 1-11



SI 9-47



SI 19-97



SI 2-24

第1·2·9·19号竖穴建物跡出土土器



SI 2-21



SI 9-46



SI 19-96



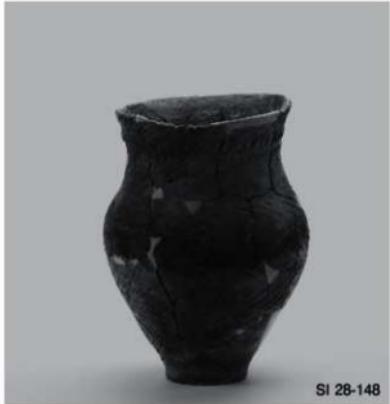
SI 19-98



SI 19-108



SI 19-109



第28号竖穴建物跡出土土器

PL18



SI 29-153



SI 29-150



SI 29-151



SI 29-152



SI 29-157

第29号竖穴建物跡出土土器



SI 31-168



SI 31-166



SI 31-169

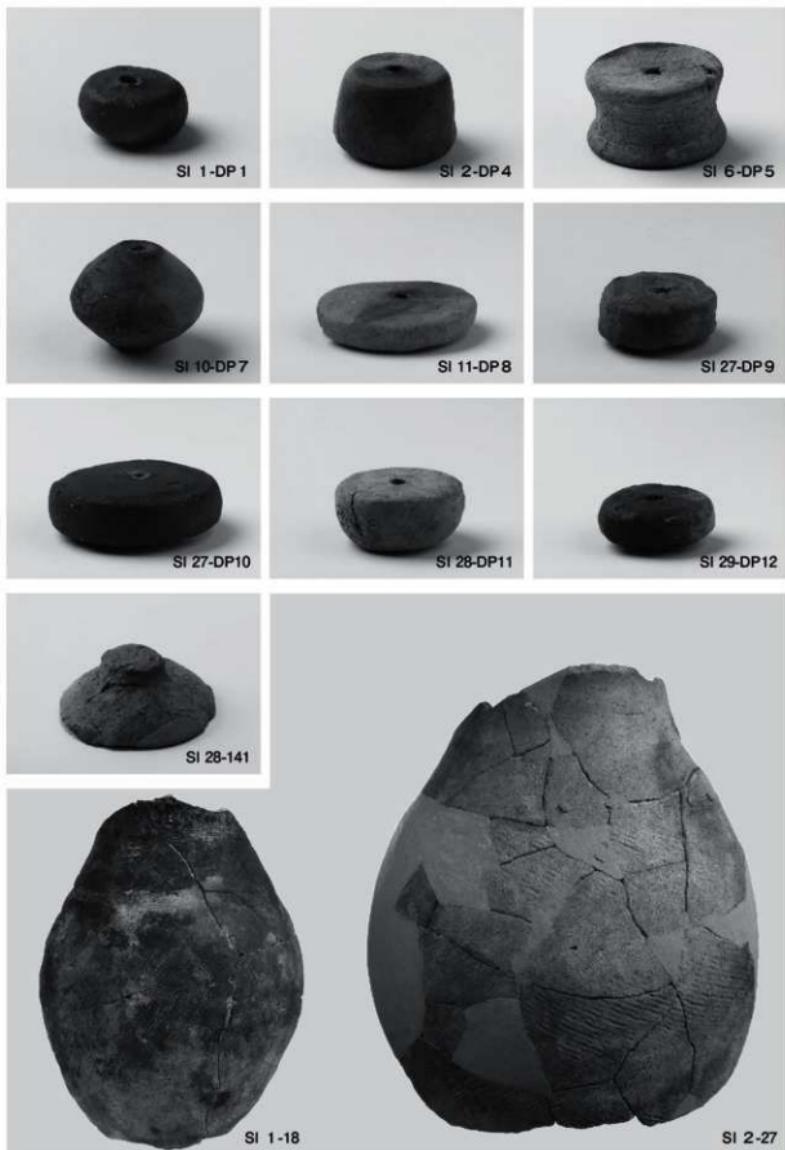


SI 31-167

第31号竖穴建物跡出土土器



第 1 · 9 · 19 · 29 · 31 号竖穴建物跡出土土器



第1・2・6・10・11・27・28・29号竪穴建物跡出土土器、土製品



第1·5·9·21·23·30号竖穴建物跡，第1号遺物包含層，遺構外出土土器



第1·2·9·15·18·25·27·28·30·31号竪穴建物跡，第1号遺物包含層，遺構外出土石器



第3·7·8号竖穴建物跡、第3号竖穴遺構、第1号塚、遺構外出土土器、土製品、錢貨

抄 錄

印 刷 仕 様

編 集 O S Microsoft Windows 10
Home
編集 Adobe InDesign CS6
図版作成 Adobe Illustrator CS6
写真調整 Adobe Photoshop CS6
Scanning 図面類 RICOH imago MP W4001
使用Font OpenType リュウミンPro・L
写 真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上
印 刷 印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第430集

見 川 塚 畑 遺 蹤

広域公園衛生園路広場整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成30（2018）年 3月15日 印刷

平成30（2018）年 3月16日 発行

発行 公益財團法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 山三印刷株式会社

〒311-4153 水戸市河和田町4433-33

TEL 029-252-8481